

秋の叙勲に本学から7氏 サイバーセキュリティセンターを設置 イチョウ並木の一般開放を実施



1 監事業務と大学改革

■ 全学ニュース

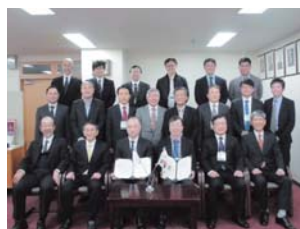
- 2 秋の叙勲に本学から7氏
- 11 サイバーセキュリティセンターを設置
- 11 イチヨウ並木の一般開放を実施
- 12 「北海道大学進学相談会」を名古屋と大阪で開催
- 13 北大フロンティア基金
- 14 平成27年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
- 15 新渡戸カレッジ10月学内合宿を開催
- 16 「北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）」、「日本語・日本文化研修コース（日研コース）」及び「日本語研修コース」入学式を挙
- 17 北海道大学総長奨励金給付証書並びに北海道大学私費外国人留学生特待プログラム留学生採用証書授与式を挙
- 18 南アフリカ共和国プレトリア大学で「日本留学フェア2015」を開催
- 19 北大インターナショナルハウス伏見がオープン
- 19 インターナショナルハウスで消防避難訓練を実施
- 20 新入留学生を対象に防災センター・開拓の村バスツアーを実施
- 20 教育情報システム（ELMS）講習会を開催
- 21 「学生の主体的な学習を促す授業スキル」ワークショップを開催
- 21 第11回「食と健康」研究会を開催
- 22 研究者のためのスキルアップセミナー⑥「その服装（かっこう）？それじゃ研究は伝わらないー着こなしも、プレゼンスキルの一つですー」を開催
- 23 「北大URAシンポジウム～北大URAが目指すもの～」を開催
100名を超える参加者を迎えての活発なディスカッション
- 24 人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPで移転可能研究力強化セミナー（TSS）を開催

■ 部局ニュース

- 25 触媒科学研究所（旧触媒化学研究センター）改組記念講演会・記念式典・祝賀会を開催
- 26 北方生物圏フィールド科学センターで「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を開催



北方生物圏フィールド科学センター
「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」



歯学研究科
全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携
25周年記念交流行事



北海道大学進学相談会



新入留学生対象 防災センター・開拓の村バスツアー

- 32 北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭を挙
- 32 歯学研究科で全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携25周年記念交流行事を開催
- 33 経済学部で第2回プレゼン大会を開催
- 34 経済学研究科・経済学部で「学部生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催
- 34 経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催
- 35 工学研究院で寄附分野「エコセーフエナジー分野」閉講式並びに「循環・エネルギー技術システム分野」開設式を開催
- 36 消防訓練の実施
- 38 函館キャンパスで「秋のキャンパス一斉清掃」を実施
- 38 北海道大学病院指導医ワークショップを開催（医科・歯科）
- 40 平成27年度北海道地区大学図書館職員フレッシュ・パーソン・セミナーを開催
- 41 故高嶋英雄氏撮影写真等の資料を大学文書館で受贈
- 42 北海道大学サマーインスティテュート・トライアル「課題解決の手法を学ぶ2+2日間（part2）」を開催

■ 諸会議の開催状況 43

■ 学内規程 44

■ 表敬訪問 45

■ 人事 46

■ 訃報

- 47 名誉教授 安田 壽一 氏
- 47 名誉教授 南部 悟 氏
- 48 名誉教授 深瀬 忠一 氏
- 48 名誉教授 長岡 新吉 氏

■ 資料

- 49 役職員数（平成27年10月1日現在）
- 50 在籍学生数（平成27年10月1日現在）
- 52 広報誌等一覧（平成27年10月調査）



消防訓練の実施



函館キャンパス
「秋のキャンパス一斉清掃」

表紙：新渡戸カレッジ10月学内合宿（関連記事15頁に掲載）

裏表紙：北の鉄道風景② 去り行くブルートレイン

監事業務と大学改革

常勤監事 よねざわ 米澤 つとむ 勉
(国立大学法人等監事協議会会長)

監事は国立大学等90組織の健全な発展に資するために、国民目線を心掛け監査の有用性に努めるべく文部科学大臣の辞令を経て学内に席を置く立場であるが、法人化された平成16年度以来、新規に設けられた監事職に関する規程はどの大学にも詳細は無く、監事それぞれの創意工夫で業務がなされてきた。第2期中期目標期間の始まる平成22年度に着任したが「何をすれば良いのか」といった他大学からの質問が多く、平成24年1月に業務遂行に資する『参考指針』を策定し、共有してきた。それから2年余を経た平成26年6月に学校教育法、独立行政法人通則法、国立大学法人法の一部が改正と相成り、僅かではあるが監事の義務・責任が明記された。この法に準拠して協議会では『改訂参考指針』を検討中である。この12月初旬に本学で開催される監事協議会総会で日の目を見る予定であるが、実に法人化後12年の歳月をかけた後に、監事の役割が一定程度明確になりそうである。法の改正は大学組織の民主的一体性を前提に、執行部による責任ある学内行政をより強固にしようとするものと解釈しているが、これに伴い監事の役割もこの趣旨を踏まえ、大学の持続的発展に繋がるように心掛けていきたい。本稿はこうした経緯を踏まえた監事の機能について、学内関係者のご理解とご協力をお願いする趣旨で編集担当課に掲載を依頼したものである。

今回の大学関連法の改正は、企業におけるコーポレートガバナンスに準拠した内容と考えるが、「大学とは何か」「大学は誰のものか」という原点に立てば、企業ほど簡潔な結論が得られるものではない。企業では不祥事や経営トップの独走などに対し、法人としての社会的責任（良質で適正な価格の商品・サービスの提供、雇用、納税、株主への配当及び社会貢献）を果たし、ステークホルダーの利益を守ることを目的として「企業統治（ガバナンス）」が図られている。一方、平成18年に改正された教育基本法では「大学は学術の中心として高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」とされ、教育・研究に加え社会貢献が大学の社会的責任として明確化された。しかしながら、大学のス

テークホルダーは多様・多層であり、学長による統治の出発点はステークホルダーからの信託に始まる訳であるから、ガバナンスの在り方への結論を得るのは複雑かつ難しい。ともあれ、これらをより正しく実行するためには、大学も企業も経営マネジメント、内部統制（内部監督）、計画と評価、監査を骨格とした体制の確立と情報公開、経営責任などもまずは明確にしなければならない。こうした経過の中で、大学の監事は様々な制約はあるものの、現場の監査を通じてガバナンスの仕組みや内部統制システムが有効に機能しているのかを検証し、これを阻害する要因があれば学内組織や主務官庁に対して指摘し、現状では判断が付き難いものも含めて将来の正答の糧になろうとするものである。

第3期中期目標・中期計画の立案・策定を目前にしている現在、平成25年6月に始まる今日の大学改革加速期間で思い出すのは、平成13年6月の「遠山プラン」である。「大学が変わる、日本を変える」、曰く日本資本主義の競争力回復、大学を起点とする日本経済活性化、産業競争力優先の大学改革、産学官連携等々であったが、改革の底流として当時の「国立大学の再編・統合」「民間の発想の経営手法」「第三者評価による競争原理」などが今も受け継がれている。政界・財界から揺さぶられたカイカクの機会は悪いことではないが、その指摘や成果については今後を待たなければならない点は既に述べた。大学の機能強化策としての3つの枠組みや人文社会科学系学部の廃止や改組などに対しては、教学ガバナンスをどのように捉えるのか、大学の独自性・自主性に関しても政府へのリアクションではない立場でいかに発揮するのかという観点から、教育研究評議会の機能が重要であり、同会の運営が現状で妥当なのかに関しては再考の余地がある。

システムや仕組みの整備状況が有効に働いているのかを見届ける監事の役割には限界がある。教職員に比して全学を広く浅く捉えている点に自負はあるものの、一人の監事が12学部を擁する総合大学の現場を詳細に把握することは極めて困難である。言うまでもなく人材育成目標の点検、教育研究の自由の確保、イノベーションの源である自由な発想と研究者の好奇心に基づく基礎研究などが、政治権力から独立しているのかなど、学内関係者は自覚していかなければならない。先ず教員は世間からの高踏的との批判から脱し、本学の基本理念を実質化する人材育成の具体的方針を各人が自覚・検証し、学生が不得意とするコミュニケーション術を駆使し、学内に在って隠し事の無い部局を超えた教員間の交流を拡大していく自己改革こそが大学改革の前提であると確信している。蛇足になるが教職員同士では言い難い面もあるであろうし、監事も使いようではないのかと思うこの頃である。

■全学ニュース

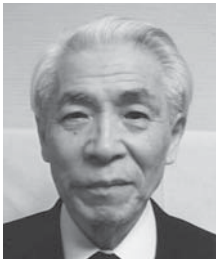
秋の叙勲に本学から7氏

この度、本学関係者の次の7氏が、平成27年秋の叙勲を受けることについて、11月3日（火・祝）に発表となりました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝中綬章	名誉教授（工学部）	石川達雄
瑞宝中綬章	名誉教授（工学研究科）	稲垣道夫
瑞宝中綬章	名誉教授（言語文化部）	田中利光
瑞宝中綬章	名誉教授（言語文化部）	仲田和弘
瑞宝中綬章	名誉教授（水産科学研究院）	山内皓平
瑞宝中綬章	名誉教授（薬学研究科）	鎌滝哲也
瑞宝単光章	元 看護師長	吉川悦子

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

（総務企画部広報課）



いしかわ たつお
石川 達雄 氏

感想

替え唄ではありませんが、「経つ私は跡を残さず」でありました。しかし、最初で最後なのだと思います。平成10年3月号につまらない乱文を残しました。でも、また、感想文をと云われ、恐縮そのものであります。

さて、この度、多くの方々のご尽力により瑞宝中綬章の叙勲を戴きました。本来ならば、私が頂戴するよりも最も当然な方々がおられますし、祖父の功績などを思うと、とても資格などないので辞退すべきと考えていました。しかし、頂戴いたしました。大変嬉しく、有難いのであります。さらに、章と賞状は自宅まで持参いただくということで、関連の皆様にも厚く、深く感謝しております。

私の事ではありますが、9年前の3月末にバスから地下鉄へ乗り換えの時、脳出血で倒れ、5日後に自分が判るようになりました。全く知らない方々のお陰であります。半身麻痺ですが、いつかのその時まで、なるべくお世話にならないように、またできる範囲で善いことをするように、との毎日です。

ところで、本学での日々を顧みたいと思います。まず一つ目は、北海道大学という美しく広大なキャンパスであります。何も言いませんが、自慢の場所でありました。近くの植物園でも芝生の中央付近で、学生友達とそれなりの議

論をしていたことが思い出されます。最近のイチョウ並木ばかりではなく、ポプラ並木ばかりではなく、冬も春も夏もすべて、すばらしいのは、周知のところでありましょう。

二つ目は北大への入学以来、定年退官まで、さらに学内にある放送大学北海道学習センターでの70歳まで、20ヶ月の国外出張を含めて、限りなく楽しく過ごさせていただきました。その中で特に幸運だったのは、全く異なる二人の先生から、立派な遺産をいただくことができたことです。たとえば、言いたい内容のお話をしながら、長時間、参加している数人の対応で、慎重に判断する大先生と、主張はしないで、多くの異論を拝聴しつづけ、無くなった時に、初めて具体的な妙案を出す大先生とでありました。少しでも同じような進め方をやろうと思いつつも、実際は難しく、人々にうまく伝えることはできませんでした。でも、いまだに思っていることがあるのです。できるならば、「エンドレス駆伝で」。もらったタスキは、とにかく止めずに、正しく確実に次の人に伝えるのであります。北海道大学だけではなく、多くの人々についても、私の最後の小さい念願であります。

読んでくださり、ありがとうございました。

功績等

石川達雄氏は、昭和9年12月北海道斜里郡斜里村に生まれ、同37年3月北海道大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程を単位修得退学、直ちに北海道大学工学部助手に採用され、同年9月に工学博士の学位を取得後、同39年8月同助教、同49年1月同教授に昇任されました。平成5

年6月から同7年5月までは同評議員、同8年4月から同10年3月まではエネルギー先端工学研究センター長を務められ、同月停年により退官されたのち、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されています。

同人は、36年余の長きに亘る北海道大学在職中、工学部においては、金属物理化学、金属表面化学など、大学院工学研究科においては、金属表面化学特論、電解製錬工学特論などを担当、学生の教育・研究指導に尽力され、多くの技術者と研究者の育成に努力されました。

同人の研究業績は専門分野である溶融塩化学及び腐食化学の分野で顕著に現れています。溶融塩化学の分野では、塩化アルミニウム含有溶融塩からのアルミニウム電解採取に関する研究において、大幅な省エネルギーが可能なバイポーラー電解槽を開発されました。この電解槽型式は、電流効率が向上する独創的なものとして、国内外で認められており、この他に、溶融塩の物性研究と電解槽内の電流の流れを解析する研究など、溶融塩電解工学の新しい分野を切り開かれました。

一方、腐食化学の研究分野では、ステンレス鋼の耐食性研究や淡水系における鉄鋼材料の腐食に関して先駆的な役割を果たされてきました。

これらの研究業績に対して、昭和38年4月に電気化学協会進歩賞、同63年2月に同協会溶融塩委員会溶融塩賞及び平成6年2月に表面技術協会論文賞を受賞されています。

校内では、工学部評議員、エネルギー先端工学研究センター長を歴任され、入学者選抜制度調査委員などを務められ、北海道大学の運営に貢献されました。

学外においては、日本金属学会理事及び同北海道支部長や電気化学協会（現 電気化学会）理事及び北海道支部長などを務められたほか、宇宙開発事業団（現 宇宙航空研究開発機構）スペースシャトル利用委員会専門委員、財団法人道央テクノポリス開発機構（現 公益財団法人道央産業振興財団）などの理事を歴任されるなど、多岐にわたるフィールドの学識経験者として産業技術・地域振興の一翼を担われました。

以上のように、学生の教育、学術研究の発展、北海道大学の運営・発展並びに地域社会、産業界に対する同人の貢献は極めて大なるものであります。

略 歴

生 年 月 日	昭和9年12月19日
昭和37年4月	北海道大学工学部助手
昭和39年8月	北海道大学工学部助教授
昭和49年1月	北海道大学工学部教授
平成5年6月	北海道大学評議員
平成7年5月	
平成8年4月	北海道大学エネルギー先端工学研究センター長
平成10年3月	
平成9年4月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成10年3月	北海道大学停年退職
平成10年4月	北海道大学名誉教授

(工学院・工学研究院・工学部)



いながき 道夫 氏

感 想

このたび瑞宝中綬章を戴くことになりました。昭和33年に名古屋大学を卒業し、大学院に進学して以来、名古屋大学、豊橋技術科学大学、北海道大学そして愛知工業大学に在職しながら、炭素材料を中心として研究を続けてきました。その間、日本学術振興会第117委員会（炭素材料）、炭素材料学会、そしてJournal CARBONを中心に、研究成果を発表してきました。さらに退職後も、インターネットを通して北海道大学附属図書館を利用して、炭素材料に関するいくつかの本の出版、さらに炭素材料のいろいろな面に注目した総説を出版することができました。55年以上にわたり炭素材料に関わってきたこととなります。名古屋大学大学院及びその後名古屋大学に在職中には、野田稲吉先生のご指導を、またアメリカ留学中はProf. S. Mrozowski、フランス留学中さらにその後の研究ではMme. A. Oberlinから多くのご教示を得ることができましたことは、大きな幸運に恵まれたものだと思っております。また、国内の多くの研究者と共同研究を行うことができ、さらにフランス、ポーランド、中国など国外でも多くの共同研究者に恵まれたこと、さらに在職した4つの大学で一緒に研究してくれた多くの優秀な学生諸君にも恵まれました。また、4つの大学を変わるという、あまり普通にはない状態を、私の家族、特に妻が裏で支えてくれました。現在の私があるのは、そして瑞宝中綬章を戴くことができたのも、ひとえに尊敬する先生方のお導きと、多くの共同研究者、学生諸君そして家族の支えによるものと深く感謝しております。

炭素材料は、炭素繊維、カーボンナノチューブ、フラーレンそしてグラフェンと、それぞれの時代に大きな注目を集めてきました。それらの注目された炭素材料を研究の対象とすることなく、古くからの炭素材料の基礎的な面を研究の中心に置いてきた私が今回受章することができたことは、私が今まで炭素材料科学に抱いてきた視点が認められたものと考えるのは、私の勝手な思い込みでしょうか。これからも、炭素材料を中心として、材料科学の進歩に関わっていければと思っております。

功績等

稲垣道夫氏は、昭和10年10月4日に愛知県に生まれ、同38年4月名古屋大学大学院博士課程を修了し、同年同月名古屋大学工学部助手に採用、同工学部附属人工結晶研究施設講師、同助教授を歴任され、その後、同53年4月豊橋技術科学大学工学部教授に昇任、平成2年4月には北海道大学工学部教授に着任され、同11年3月に停年により退官されました。平成11年4月には北海道大学名誉教授の称号を授与されています。

また、平成11年4月愛知工業大学大学院工学研究科教授

に採用され、同18年3月に定年を迎えられたのち、特任教授として同20年3月まで勤務されました。

昭和38年以降、名古屋大学、豊橋技術科学大学、北海道大学、愛知工業大学在職中は、無機工業化学、無機材料化学、固体化学に関連する講義、演習を担当されるとともに、学部生及び大学院生の研究指導に当たり、多くの技術者、研究者の育成に努められました。

これら大学に在職中は、一貫して炭素及びセラミックス材料の構造・組織の観点から研究に取り組み、同氏の業績は炭素材料について、1) そのナノ組織を分類し、その重要性を指摘したこと、2) 炭素の生成過程(炭素化)及びそれらの高温処理による構造の成長機構(黒鉛化)の解明に寄与したこと、3) 炭素材料の構造・組織の制御による新しい機能性の発現を具体的実験結果として提示したこと、4) インターカレーションの新しい手法の開発に寄与する多くの実験を行ったこと、に要約され、炭素材料の正しい理解と新しいプロセスそして材料の開発に貢献されました。これらの研究成果は多くの論文として国際学術誌に発表されており、アメリカ・カーボン学会からSGL賞(平成16年)を授与されたことをはじめ、国内の学会等からも数々の賞を授与されています。

また、学外においては文部省学術審議会科学研究費分科会専門委員などを歴任し、我が国の教育・科学技術行政にも寄与されるとともに、炭素材料学会会長としてアジア地区各国の炭素学会の連合体(アジア炭素材料連合, Asian Association of Carbon Groups)を組織し、初代会長を務められるなど、我が国の学術研究の発展に尽くされました。この功績に対しては、平成23年に国際カーボン連合(The International Carbon Community)から、ピーター・A・スローアー賞(The Peter A. Thrower Award)を授与されています。

以上のように同氏は、大学における教育・研究への貢献のみならず、炭素材料分野における学術研究の発展と同分野の研究者の育成に尽くされており、その功績は誠に顕著であります。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和10年10月4日
- 昭和38年4月 名古屋大学工学部助手
- 昭和39年4月 名古屋大学工学部附属人工結晶研究施設講師
- 昭和43年6月 名古屋大学工学部附属人工結晶研究施設助教授
- 昭和53年4月 豊橋技術科学大学工学部教授
- 平成2年4月 北海道大学工学部教授
- 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
- 平成11年3月 北海道大学停年退職
- 平成11年4月 北海道大学名誉教授
- 平成11年4月 愛知工業大学教授
- 平成18年4月 } 愛知工業大学特任教授
- 平成20年3月 }

(工学院・工学研究院・工学部)



たなか としみつ
田中 利光 氏

感 想

この度は叙勲に与かり、嬉しく、また恐縮に存じております。ご配慮くださった方々に深くお礼申し上げます。ありがとうございます

ました。

私が、北海道大学文学部に赴任したのは、1965年4月のことでした。東京大学文学部言語学科の高津春繁先生、服部四郎先生のご推挙をいただき、北海道大学文学部言語学科の池上二良先生のお招きによるものでした。

担当は、全学教養部学生対象のラテン語、ギリシャ語、文学部学生対象のラテン語でした。前任者は池田英三先生でした(1957年4月1日~1964年11月3日。1958年まではラテン語が開設されていたが、同年、古典語としてラテン語・ギリシャ語が併設されることになったと伝えられます)。このように、教養部課程の科目としての古典語に専任のポストがあるということは、北大のユニークなところなのではないかと思えます。

ギリシャ語とラテン語という名前はよく知られているだけでなく、私たちの暮らしの中でなにげなく触れているというほどの身近な言葉だと言えるでしょう。それに比べて、34年間、初歩ですが、ギリシャ語とラテン語を教育してきたというのは日本では大変珍しいということになるでしょう。

私にはなかなかの「悪戦苦闘」でした。その経験を勘案して、それぞれの入門書『ラテン語初歩』(1990, 改訂版2002), 『新ギリシャ語入門』(1994)を出版しました。また、古典語のほかに、一般教育演習「プラトンを読む」として、『ゴルギアス』『テアイテトス』『国家』などを取り上げて読み方の訓練をしました。

一方、文学部言語学科の「言語比較方法」を担当しました。これは、ソシュールの「一般言語学講義」などに到る言語学形成の歴史を辿ることによって、言語学の基礎を教えるものだったと言えるでしょう。そこで例えば、ウィリアム・ジョーンズがインド・ヨーロッパ語族という存在をはっきりさせたことが、普通「言語学の本当の始まり」とされていますが、その認識の内実はどのようなものであったかを検討しました。ジョーンズは1783年4月にベンガル州判事としてインドに向け出発、翌年「アジア学会」を創設、1794年まで毎年創設記念講演を(計11回)行いました。第三年次の講演の中に問題の発言はあるのですが、その講演だけでなく、11回の講演全体にわたってジョーンズの興味ある知見を明らかにしました(「ウィリアム・ジョーンズと印欧語族の認識」『言語研究』93号1988年3月)。札幌での暮らしをことのほか喜び、私の健康のため尽くしてくれた妻に対して、改めて感謝の想いを深くしております。

功績等

田中利光氏は、昭和10年6月8日、東京都に生まれ、同33年3月東京大学文学部を卒業し、国際基督教大学助手、北海道大学講師、助教授を経て同56年10月に北海道大学教授に就任され、平成11年3月に停年にて退職されるまで、古典語の教育・研究に努められ、同年4月に北海道大学名誉教授になりました。

同氏の古典語教育は、19世紀に発達した歴史言語学、20世紀前半に発達した構造言語学についての学識に基づく手堅いものでありました。30年余の教育経験を生かして、ラテン語とギリシャ語のそれぞれについて入門書を執筆されていますが、平明で無駄のない記述に示されているといえます。

昭和54年からは、一般教育演習「プラトンを読む」をはじめ、プラトンの代表的な作品を素材に、できるだけ正確に読み、理解したところを平易に表現するという訓練を行い、良い効果を上げました。

同氏の研究分野はギリシャ語学、一般言語学、言語学史の3つに大別されます。ギリシャ語学については、音韻史、形態論、文論など広い範囲に関わる個別専門的な問題を取り扱い、我が国では珍しい方面の研究に貢献されました。例えば古代ギリシャ語のラコニア方言では他の方言が文字テータで記している所をシグマの文字で記しています。この事実からラコニア方言の音韻の歴史を推定され、ボイオテア方言のeiで終わる奇妙な人名の形の由来、難解として有名なマルコ伝4章10-13の意味を、その個所にあるhinaを、使徒行伝27章42節のhinaの用法と同じであるという観察から理解する、など注目すべき見解を提示しました。

また同氏は、言語比較方法、言語学演習などの教育上の必要から、言語学の基礎的・一般的な諸問題、すなわち形態素分析、ソシユールと変形文法の関係、言語学的意味論、音韻変化などに関して取り扱われました。音韻変化について言えば、自発変化と結合変化、無条件変化と条件変化の分類法がすでに唱えられ、区別があるにも関わらず、広く標準的な文献でも混同して用いられていること、また後者の分類法は適切でないことを指摘されました。なお自発変化はその名の通り、原因は不明であるとされてきましたが、これを通時音韻理論からその原因を説明する試みがなされるようになり、イオニア・アッティカ方言の重要な母音変化についてもいくつかその試みがありますが、同氏はそれら先行研究を厳しく論評して、独自の見解を打ち出されています。

更に同氏は言語学の色々な考え方を教育する上で、どのようにしてそのような考え方が生まれるようになったのかその歴史を説明する必要があるようになったところから、言語学史の研究も行うようになりました。手始めにジョーンズ、シュレーゲルに関して通説化している内容を、第一次資料に基づいて、再検討して新しい知見を提起されました。また更に近現代の言語学史を超えて、西欧言語学史の先頭に位置するプラトンの作品で、今もってその

意図がわからないとされる『クラテュロス』の解釈に3編の論文で挑戦されました。第1編は日本西洋古典学会で報告され、ユニークな解釈として、一定の評価を得ました。他の2編も、この作品解釈の上で無視しがたい論点を含んでいると考えられます。

同氏には翻訳の業績もあり、あまりにも有名なホメロスの『イリアス』の第1巻と最終巻(第24巻)です。テキストをなるべく忠実に、素朴にたどろうとしている感じのナイーブな調子の散文訳ですが、平明で格調があると評する専門家もいると聞きます。

以上のように、同氏は、古典語教育及びそれに関連しての言語学研究に尽くされたものであり、その功績は誠に顕著であります。

略歴

生年月日	昭和10年6月8日
昭和39年4月	国際基督教大学語学科助手
昭和40年4月	北海道大学文学部講師
昭和45年11月	北海道大学文学部助教授
昭和56年10月	北海道大学言語文化学部教授
平成11年3月	北海道大学停年退職
平成11年4月	北海道大学名誉教授

(国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院)



なかた かずひろ
仲田 和弘 氏

感想

この度は身に余る叙勲の荣誉に預かり、感激に心が震える心地です。私は生来、性愚鈍、その上浅学非才であり、到底その資格はないものと思っておりました。それにも関わらず、推薦の労をとってくださった北大、煩雑な手続きを行ってくださった事務方、並びに種々バックアップを惜しまなかった古巣のかつての同僚諸氏に心から感謝いたします。

昭和37年東北大学大学院文学研究科の修士課程を修了し、日本大学に3年、愛媛大学に6年半勤務した後、昭和46年10月に北海道大学に着任しました。そして平成11年3月に停年退職するまで27年余、一貫して教養課程の学生にドイツ語を教えてきました。なかなか取っ付き難いドイツ語の初歩の峠を、学生達にスムーズに通過してもらうために、自分なりの創意工夫をこらし、できうる限りの努力を尽くしてきたつもりです。しかし、外面的な諸般の事情と自分の非力のため、期待していた程の成果を最後まで上げることが出来ず、本当に残念であります。

17世紀のドイツ文学にあって、唯一現在も生命を保っているグリムメルスハウゼンという作家の研究をずっと続けてきました。この作家の前半生は丁度三十年戦争の真っただ

だ中にあたります。ドイツ全土が戦場となり、全人口の3分の1が失われ、国土は荒廃を極めました。このような状況下のため、彼の生涯の大部分は不明です。日記も書簡も肖像画1枚すらも残っていません。彼に関する資料も少なく、彼と私たちをつなぐ唯一のものは、残された彼の膨大な作品群しかありません。グリーンメルスハウゼンの全体像を解明するためには、彼の作品の中から彼の痕跡を丁寧に探し出し、それらを統合して新たに彼の全体像を、少しずつ構築して行く以外に方法はありません。1つ1つ作品を正確に読み解き、作品論を書き上げます。全ての作品の作品論を完成させることで、自ずからグリーンメルスハウゼンの全体像が明らかになり、ひいては彼の作家論が出来上がるはずですが、このような遠大な計画を立て実行に取り掛かり、この作業を大学院時代からずっと続けてきました。彼が使用しているドイツ語は、初期新高ドイツ語といわれるもので、ドイツ語学会で一番研究が遅れている分野でした。ドイツ本国にも初期新高ドイツ語の完全な辞書はありませんでした（近年やっと完璧な大辞典が完成したようです）。私が研究を行っていた頃は、実際に役に立つ実践的な辞書は皆無でした。仕方なく自分で1つ1つ語彙を蒐集して、帰納的にその用例を確定し、自分専用の単語集を作らなければなりません。作品の解読には必然的に膨大な時間が必要でした。絶対的な時間不足と自分自身の非力のために、彼の全作品を解読し、作品論を残らず完成させることは出来ませんでした。そのため残念ながら、グリーンメルスハウゼンの全体像を完全に解明するまでには至っていません。研究はいまだ途上にあり、未完成のままです。本当に悔い多い人生で、忸怩たるものがあります。

功績等

仲田和弘氏は、昭和10年12月15日に東京都品川区に生まれ、同34年3月愛媛大学文理学部を卒業し、同37年3月東北大学大学院文学研究科修士課程を修了されました。昭和37年4月に日本大学第二工学部講師に就任したのち、同40年4月に愛媛大学文理学部講師に転任、その後助教授に昇進されました。さらに昭和46年10月に北海道大学文学部助教授に転任し、同言語文化部助教授を経て、同56年10月に北海道大学教授に昇進されました。平成11年3月をもって停年退職されるまで一貫してドイツ文学の研究とドイツ語の教育に努め、同12年4月に北海道大学名誉教授になりました。

同氏の主たる研究対象は17世紀のドイツを代表する作家ハンス・ヤーコプ・クリストッフエル・フォン・グリーンメルスハウゼン（1622年頃-1676年）です。この詩人は当時のドイツを荒廃させた三十年戦争の渦中であって、自ら兵士かつ連隊付きの書記としてこの戦争に従軍していますが、肖像画も自筆書類もなく、かなり後の時代まで実名も不明でした。仲田氏は日本における数少ないグリーンメルスハウゼン研究家として、この謎に満ちた作家と作品の研究に取り組み、人物像や諸作品の構造に独自の光を当てて次々と新たな知見をもたらされました。同氏はいわばグリ

ンメルスハウゼン研究のパイオニアであり、その研究成果は後に続く研究者にも多大な影響を及ぼしています。

グリーンメルスハウゼンについては、日本でも仲田氏の研究以前に翻訳（望月市恵訳『阿呆物語』岩波書店1953/54年等）が存在していました。しかし、それにも関わらず研究が進まなかった理由は、17世紀のドイツ語で書かれているため本格的な解読が容易ではなかったこと、及び作品内に織り込まれた当時の実社会、とりわけ三十年戦争後のドイツの荒廃した状況の歴史的把握が極めて難しかったことにあります。仲田氏は1962年に書かれた最初の論文からこの困難な作家と作品に取り組み、本文の詳細かつ精緻な解読を進める一方、そこに描かれた様々な事象を綿密に考証する作業を一貫して進められました。

仲田氏が研究を始めた当時は、いわゆる作者論や作品の美的価値を論ずるのが文学研究の一般的傾向でした。17世紀のドイツを代表する作品と言われながら、日本での研究が遅れた背景には、グリーンメルスハウゼンの作品に先行する文芸作品や潮流に依拠した表現が頻出することから、いわゆるエピゴーネン（亜流）とみなす者が少なくなかったという事情もあります。しかし仲田氏はそうした状況にも関わらず、独自の判断と信念でこの難物と思われた作家を生涯の研究対象とされました。ここに仲田氏の先見の明があるといっても過言ではありません。

特筆すべきは仲田氏の研究姿勢です。同氏は、今日なら当然とされる実証的研究（客観的データを積み上げて証明する方法）に真摯に取り組み、数々の成果を上げられました。文学研究がしばしば文芸評論と同列とみなされていた時代にあっては、作品の優劣を主観的に論じる風潮さえありました。時代背景も文化的背景も大きく異なる作品を日本で研究する場合、仲田氏が用いた研究法こそが研究者のとるべき道であることは、今日なら誰でも納得するでしょう。同氏の功績では、数々の個別の実証例と並んで、研究のあり方を後の世代に伝えたことがまず大きいと言えます。

さらに個別の貢献にも数々の重要な知見があります。グリーンメルスハウゼンは、上述のように様々な作品から影響を受けていますが、決してそれらをそのまま取り入れたものではありません。幼時に拘束されて戦争に従軍することを余儀なくされた者であるがゆえの独自性が、作品の表現と構造やそれらの背後にある考え方に見られることを丹念に証明したことは、極めて大きな貢献と認められ、また今日なお評価されています。

一方ドイツ語教育においては、昭和37年4月以降、約37年の長きにわたって日本大学・愛媛大学・北海道大学に奉職され、人材の育成とドイツ語及びドイツ語圏の文化に関する知識の普及に尽力されました。特に北海道大学では約28年勤務する間、その誠実な人柄と強い責任感でドイツ語教育の普及と改善に大きな貢献をされました。一例として、学習者が習得すべき基礎語彙など文法項目の策定に尽力されました。研究や教育の他にも学内外で数々の公職を誠実に行われました。

以上のように、仲田氏はドイツ文学研究とドイツ語教育に極めて大きな貢献をしたものであり、その功績は誠に顕著であります。

略 歴

生 年 月 日 昭和10年12月15日
 昭和37年 4月 日本大学講師
 昭和40年 4月 愛媛大学文学部講師
 昭和43年 4月 愛媛大学教養部助教授
 昭和46年10月 北海道大学文学部助教授
 昭和56年 4月 北海道大学言語文化部助教授
 昭和56年10月 北海道大学言語文化部教授
 平成11年 3月 北海道大学停年退職
 平成12年 4月 北海道大学名誉教授

(国際広報メディア・観光学院, メディア・コミュニケーション研究院)



やまうち こうへい
山内 皓平 氏

感 想

このたび、叙勲の栄に浴しましたことは誠に光栄に存じます。叙勲に際し、ご高配を賜りました皆様方に厚く御礼を申し上げます。

また、学部・大学院時代を通じてご指導をいただきました恩師、故山本喜一郎先生をはじめ、高橋裕哉先生、高野和則先生には心から感謝申し上げます。

私が専攻した水産学の中の水産増殖学という分野は、私達の生活に有用な水産生物の資源を持続的に維持・利用する研究分野の総称です。その中で私は有用魚類の生殖生理学に関する研究を行ってきました。一般に生物は成長後、成熟の過程を経て産卵・受精をして子孫を残します。このような自然界で起きる生殖現象を人工飼育下で誘起して孵化稚魚を得、放流して増殖したり、稚魚をマーケットサイズまで養殖したりするのですが、有用魚種の中には人工飼育下では成熟しない魚種も出てきます。その典型がニホンウナギですが、有用魚種の成熟のメカニズムの解明は学問的に興味があるだけでなく、養殖産業上も喫緊の課題でした。その頃はその解決に必要な生殖生理学のデータが少なく、基礎研究が不可欠でした。

私が研究室に入った時期は、山本先生がそれまで行われていた研究に基礎研究を導入して先駆的に性分化や生殖腺成熟の機構を内分泌学的に解析し始めた頃でした。各院生は生殖現象に関与する内分泌器官を各々受け持って精力的に研究をしていました。研究室は活気に満ちていて、皆、一日の殆どを研究室で過ごしていました。私は、修士課程でサケやメダカの未成熟卵を生体外で成熟させる研究を行いましたが、博士課程に入ると山本先生からニホンウナギの人為催熟に関する研究を勧められました。幸いなことに、

博士課程の2年生の冬に世界で初めてウナギの成熟卵を得て、卵や孵化稚魚の発生を観察できました。この成果はそれまでに研究室に蓄積された基礎研究のバックグラウンドがあったから得られたのだと思います。北海道大学に奉職後もウナギの成熟機構の解明が研究の柱でした。

このようなニホンウナギの成熟機構に関する研究の他に、サケの銀化、母川記銘、降海行動などについても研究を行いました。それはサケのそれらの現象についても成熟機構に関与するホルモンが役割を果たしているからです。もう30年以上も前になりますが、アラスカ湾からCopper Riverに回帰し、遡上するベニザケを産卵場まで追いかけて資料を採取した光景が今でも思い出されます。

北海道大学退官後は、愛媛大学が地域貢献型のセンターとして海面養殖日本一の愛南町に設立した南予水産研究センターに勤務して、地域水産産業振興のために活動しています。

大学は新しい概念を導き出したり、新しい分野を切り拓いていく役割を担っています。世界で最初に水産学を開講した札幌農学校の遺伝子を受け継いだ北海道大学に学び、新しい水産学を模索しながら教育研究に携わってこれたことを誇りに思います。愛する北海道大学がこれまでも増してグローバルに社会貢献し続けていかれることを祈念して止みません。

功績等

山内皓平氏は永年にわたって、水産学の教育、研究に努められ、特に水産増養殖のための基礎研究を行い、それらの知見をもとに魚類の人工採苗法の確立に大いに貢献されました。またこれらの研究を通して、これまで多くの学士、修士及び博士等若手育成に努められ、水産学分野の進展に寄与されました。

これまで同氏は水産資源上重要な魚種で、人工飼育環境下で成熟を制御することが困難な魚種の資源維持や資源増大を目指して、その基礎となる魚類の配偶子形成（卵形成及び精子形成）の解析に努められ、得られた成果を人工採苗法の確立に応用されました。特にウナギの研究においては、世界で初めて人為催熟したウナギより孵化稚魚を得て以来、それらの配偶子形成機構の解析を行い、多くの新知見を見出して人工採苗法の開発に貢献されました。

また、ウナギの配偶子形成機構に関する研究成果を他魚種にも応用し、水産重要種であるマツカワガレイ等の性分化機構を明らかにすることにより、その種苗生産技術の確立、また、キャビアとして重宝される卵を有するチョウザメの人工採苗法の確立に寄与されました。さらに、サケマス類の回遊機構の解明による孵化・放流事業への応用等、水産増養殖分野の発展に貢献されました。

地域社会活動としては、北海道大学在職中には、農林水産技術会議専門委員、大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員、水産庁水産政策審議会委員、北海道水産産業漁村振興審議会委員、海洋科学創世研究会顧問、日本学術振興会21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会専門委員及び独立行政法人水産総合研究センター機関評価会

議外部委員等を、愛媛大学転任後は公益社団法人全日本地域研究交流協会評議員、岩手大学三陸復興推進機構客員教授を歴任され、水産学分野の振興と発展に大いに寄与されました。

これらの業績に対して、これまで日本水産学会進歩賞、日本動物学会論文賞、日本農学賞及び読売農学賞をそれぞれ受賞されています。これらの功績に対して、平成15年11月紫綬褒章を賜る栄誉に浴しています。その後も秋山財団賞、日本水産学会功績賞、日本水産増殖学会賞をそれぞれ受賞されています。

以上のように同氏は現在までの長きにわたり、北海道大学及び愛媛大学の教育研究はもとより、学界における学術の進展並びに地域産業の発展、振興に多大なる貢献を行っており、その功績は誠に顕著です。

略 歴

- 生 年 月 日 昭和17年 9月 4日
- 昭和51年 8月 北海道大学水産学部助手
- 平成元年 4月 北海道大学水産学部助教授
- 平成 6年 4月 北海道大学水産学部教授
- 平成 7年 4月 } 北海道大学水産学部長・評議員
- 平成11年 3月 }
- 平成11年 4月 } 北海道大学評議員
- 平成14年 3月 }
- 平成14年 4月 } 北海道大学大学院水産科学研究科長
- 平成18年 3月 }
- 平成17年 5月 } 北海道大学副理事
- 平成18年 3月 }
- 平成18年 3月 北海道大学停年退職
- 平成20年 4月 愛媛大学南予水産研究センター長
- 平成21年 4月 愛媛大学社会連携推進機構教授

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)



かまたき てつ や
鎌滝 哲也 氏

感 想

この度、秋の瑞宝中綬章を受章いたしました。これは私にとっては望外な喜びでした。我々の研究が瑞宝中綬章の受章の対象になるなどとは考えたこともありませんでした。この受章は北大での研究成果が評価されたことであり、日夜研究を共にした助教授以下の職員、大学院生、研究生、秘書さんたち、それに様々な場面で縁の下の力持ちになってくれた事務職員の皆様のお陰だと思っております。皆様と受章の喜びを共有したいと思います。

私は昭和60年秋まで慶応義塾大学医学部薬理学教室の助教授でした。医学部におりましたから、北大薬学部で薬品分析化学教室の教授を公募していることなどつゆ知りませ

んでした。北大では、選考の過程で薬品分析化学の研究室をどのような分野の研究を担う研究室にするか、薬学部の将来展望を含めて議論されたようです。その結果、薬物代謝が適当であろうということになり、北大の内部推薦で私の名前が挙がっていたようで、最終的に私が選考に残ったと聞いております。北大に着任してからは、前任の木村道也先生の築かれた研究室の良いところを残し、さらに発展するための方策を考えました。幸いにも、当時残っていた助教授以下の職員が快く新しい研究室の建設に協力してくれました。これを第一歩として、次々と登場してくれた職員が更に飛躍への道を切り拓いてくれました。また、新しく研究室のメンバーとして加わってくれた学生や研究生の人々は日夜を問わず研究に没頭してくれました。当時の研究室は夜遅くまで電灯がともし、まさに不夜城であったと思います。

このような研究室の雰囲気は助教授以下の職員が牽引し、学生や研究生達が作り上げたもので、私が作ったものではありません。彼らの努力の結果として、研究成果は徐々に積み重なり、気がついてみるとヒトの医療に役立つ大きな研究成果となっておりました。私の役割は皆さんの「舵取り」と「研究費稼ぎ」だけだったように思います。

私たちの研究室では、発がんのメカニズムや発がんの個体差、さらに薬の効き目の個体差の研究を中心に展開いたしました。中には一所懸命にやってもうまく成果が挙がらなかった研究、成果は挙がったものの世の中ではあまり目立たずに終わってしまったものなどがあります。目立った研究を行った学生は嬉しいでしょうが、目立たないまま論文だけは発表したというような研究を手がけた学生は可哀想に思います。しかし、研究室の研究のレベルアップに貢献したことは確かですから、やはり研究室では貢献者と言えるでしょう。

私を中心としたグループで一人前の研究が出来たのは、私自身が恩師に恵まれ、恩師から受けた教育を次の世代に申し送りしたのも一因かもしれません。

私たちが受けた勲章は他の研究室の皆様、特に若手に希望を与えるのではないかと期待しております。今後、北大の、特に若手の研究者が目標を高く持ち、北大が更なる飛躍を遂げられることを祈ってやみません。

功績等

鎌滝哲也氏は、永年にわたって、毒性学、薬物代謝学の教育・研究に努められました。ラットの肝ミクロゾームのチトクロームP450を世界に先駆けて精製純化することに成功し、これを用いて農薬パラチオンの代謝とそれに伴うS(イオウ)原子のチトクロームP450への共有結合を証明する等、特に、肝薬物代謝研究において一酸素添加酵素であるチトクロームP450の薬学的・毒性学的研究を進め、数多くの優れた業績を上げられました。

全世界約8,500種の学術雑誌に掲載された論文の引用文献を検索している米国の調査会社ISIによって、同氏は被引用文献数の高い研究者 (highly cited scientists, 全体の

0.5%以下)の一人とされており、同氏の研究の質、アクティビティーが際立っていることを物語っています。

以上の研究業績に対して、日本薬学会奨励賞、宮田専治学術賞、日本環境変異原学会奨励賞、望月喜多司記念業績賞、日本毒科学会田邊賞、日本薬物動態学会学会賞、日本薬学会賞、ISSX Scientific Achievement Award 2003 Asian Pacific Region、日本環境変異原学会学会賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、紫綬褒章が授与されました。

また、学界においては、10誌以上の国内外の学術誌のeditorial boardを務められ、薬物代謝の研究分野で最も権威のある“Intern. Symp. on Microsomes and Drug Oxidations”，日米合同の薬物動態学会を組織委員長（日本側代表）として開催するなど、多大な貢献をされました。さらに、国外においては、国際薬物動態学会理事、国内においては、日本薬物動態学会会長、副会長及び理事、日本トキシコロジー学会理事、日本環境変異原学会理事、日本分析化学会北海道支部長など多数の学会の役員を歴任されました。学外においては、厚生省中央薬事審議会臨時委員、文部省・文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員、厚生省薬剤師試験委員、日本学術会議・生物系薬学研究連絡委員会委員及びトキシコロジー研究連絡委員会委員などを務められ、研究分野における代表として行政に貢献されました。

近年は、6年制教育と改組された薬学部学生のための毒性学、薬物代謝学の平易な教科書や新たな薬学部の実態について、進学を希望する高校生や保護者向けに優しく解説する書籍の発行などを通し、教育面においても専門家の立場から尽力されました。

以上のように、同氏は我が国における毒性学、薬物代謝学の領域の指導者として数多くの業績を上げ、多数の人材を育成し、我が国の学術の進歩と産業の発展に貢献された功績は極めて顕著であります。

略 歴

生年月日	昭和17年10月6日
昭和42年4月	千葉大学薬学部副手
昭和42年6月	千葉大学薬学部教務員
昭和44年4月	千葉大学薬学部助手
昭和48年4月	} 米国バンダービルト大学医学部客員研究員
昭和50年12月	
昭和52年8月	慶應義塾大学医学部専任講師
昭和57年4月	慶應義塾大学医学部助教授
昭和60年10月	北海道大学薬学部教授
平成18年3月	北海道大学停年退職
平成18年4月	北海道大学名誉教授
平成18年4月	高崎健康福祉大学薬学部教授
平成19年3月	高崎健康福祉大学退職

(薬学研究院・薬学部)



よしかわ えつこ
吉川悦子氏

感 想

この度、平成27年秋の叙勲において瑞宝単光章を賜りましたことは、身に余る光栄でございます。

これはひとえに多くの皆様のご指導、ご尽力の賜物と心から感謝し、お礼申し上げます。

私は、昭和49年北海道大学医学部附属病院に就職し、平成25年3月の定年退職まで39年間勤務させていただきました。振り返ってみますと、当時は基準看護導入の混乱期で騒然としておりました。配属された第一外科は看護師半数が交替し、新スタッフの殆どが新人で、緊張と不安はありましたが活気と連帯感がある環境でした。中心静脈栄養の開始時期で、病棟内で濾紙を組み込んだ輸液ルートの作製や、また固定が難しい金属針の留置や糖濃度均一のためのボトル連結によって行動制限が生じた患者さんへのケア等、方法・用具・治療環境に検討を要することが多くありました。輸液ルート交換のたびに細菌検査を行い、長さ・材質・安全性等、試行錯誤を繰り返しました。患者さんの意見をもらいながら、フィルター付き輸液ルート・一包化の高カロリー輸液用バック・補液スタンドの改良等医療用具は進歩し、患者さんは少しずつではありますがその人らしい生活を過ごせるようになりました。患者さんの生活の質を大切に、安全安楽な治療環境を整える取り組みは貴重な体験で、その後の私の看護実践やチーム育成の重要な視点となりました。

あつという間の年月でしたが、病院移転、組織の変化、医療制度変遷に伴う課題への取り組み、看護業務の電子化、災害支援等、その時々のおねりにのみこまれそうになりながらも何とか大過なく職務を全うすることが出来ました。在職中に会った多くの患者さんとの関わり、優れた先輩・同僚・後輩の皆様、医療チームとして協働し支援していただいた多職種の皆様へ心から感謝申し上げます。今後はこの度の受章に恥じないよう過ごしてまいりたいと思います。

最後になりましたが、北海道大学、北海道大学病院、看護部の発展をご祈念申し上げ、お礼の言葉といたします。

功績等

吉川悦子氏は、昭和27年6月29日に北海道虻田郡真狩村に生まれ、同49年3月に国立北海道第二療養所附属高等看護学院を卒業後、同年4月北海道大学医学部附属病院に就職、同60年副看護婦長、平成10年看護婦長を歴任し、同25年3月に北海道大学病院を定年にて退職するまで勤務されました。

同人は当初勤務した第一外科・第一内科病棟では、手術を受ける患者の安全・安楽はもとより、常に患者の生活に視点を置いた看護実践を行い、周手術期看護の質向上に努められました。また、看護学生の実習指導係として指導に

当たり、学生や後輩スタッフにとってあこがれの看護師像として慕われていました。

副看護婦長時代は、第一外科病棟においてストーマ造設患者の補助装具の工夫や患者の苦痛の緩和、生活上の工夫をスタッフと共に取り組まれました。その先駆的な取り組みを北海道ストーマリハビリテーション学会で4年間にわたり毎年報告し、北海道内におけるストーマケアの普及に貢献されました。婦人科病棟においては、周手術期の看護や化学療法患者の看護、終末期ケアに取り組まれました。

婦人科病棟の看護婦長に昇任した後は、日本看護協会認定看護管理者制度セカンドレベル教育課程を受講し看護管理者としての資質の向上に努められ、その後整形外科・スポーツ医学診療科病棟、放射線診断科・放射線治療科・核医学・歯科病棟の看護師長を歴任されました。

臨床における質の高い看護ができる専門職業人を育成するため、看護記録の質の維持・向上にも取り組まれ、看護部記録検討委員会を4年間、継続教育を担う看護部教育委員を4年間継続されました。

また、患者・家族の意思を看護計画に反映させる「患者参加型看護」という新しい視点に立ち、日本看護学会（看護管理）における2度の学会発表やスタッフ指導を通してその普及に貢献されました。出版に尽力された「北海道大学病院看護部 患者参加型看護」は、「患者参加型看護」を基本方針に掲げる本院において必携の書となっています。

同人は、社会的活動も精力的に行い、北海道看護協会においては現任教育の講師や第4支部推薦委員を務め、北海道看護協会における継続教育に尽力されました。

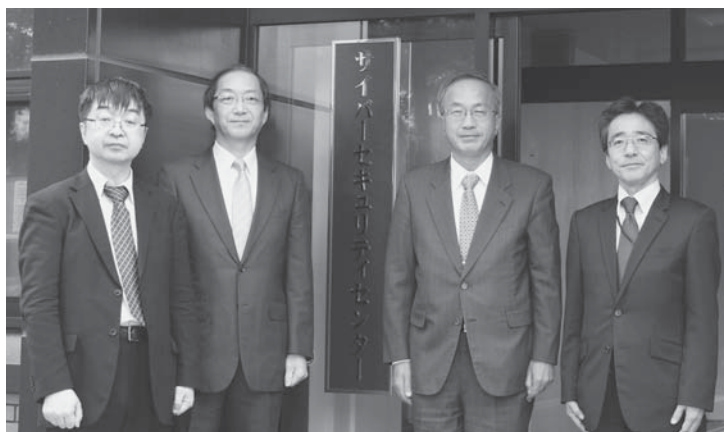
以上のように同人は、39年の永きに亘り看護の質の保証、患者サービスの質向上、看護管理・教育の充実に尽くされ、その功績は誠に顕著であると認められます。

略 歴

生 年 月 日 昭和27年 6月29日
昭和49年 4月 北海道大学医学部附属病院
昭和60年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長
平成10年 4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦長
平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院看護部看護師長
平成16年 4月 北海道大学病院看護部看護師長
平成25年 3月 北海道大学定年退職

(北海道大学病院)

サイバーセキュリティセンターを設置



(左から) 南CSCセンター長、高井情報基盤センター長、山口総長、菅野理事

10月1日(木)、情報基盤センターに平成26年11月に公布された「サイバーセキュリティ基本法」の理念を踏まえ、本学におけるサイバーセキュリティ強化を実践的に取り組む組織としてサイバーセキュリティセンター(CSC: Cyber Security Center)が設

置されました。

同センターは、サイバーセキュリティにかかるデータ分析や高度対策技法の実証的な研究・開発及び本学全構成員に向けたサイバーセキュリティ教育・研修・訓練等を進めていきます。

10月13日(火)には情報基盤セン

ター南館にて、山口佳三総長、菅野政利理事、高井昌彰情報基盤センター長、南 弘征CSCセンター長がCSCの銘板を掲げました。

(情報環境推進本部情報推進課)

イチョウ並木の一般開放を実施

10月25日(日)、観光客や市民の皆様が安全に黄葉を鑑賞できるように、北13条通りの車両通行を規制して「イチョウ並木の一般開放」を実施しました。

雪が舞い肌寒さを感じる一日となりましたが、約3,200名もの方々が訪れ、黄金色に輝くイチョウ並木を背景に写真撮影するなど、秋の一日を満喫していました。

また、10月24日(土)・25日(日)には、北大元気プロジェクト採択団体が、イチョウ並木のライトアップなどの「北大金葉祭」を実施し、黄葉の鑑賞を盛り上げました。

(総務企画部広報課)



北13条通りのイチョウ並木



イチョウのじゅうたんを楽しむ方々

「北海道大学進学相談会」を名古屋と大阪で開催

本学単独主催の大学進学希望者向け「北海道大学進学相談会」を8月の東京開催に続いて、10月10日（土）に名古屋で、翌11日（日）に大阪で開催しました。

各会場では山口佳三総長、新田孝彦理事・副学長をはじめ、各学部やアドミッションセンターの教職員、在学生等、合わせて約70名が高校生等やその保護者への説明・相談に当たりました。

全体説明では、冒頭で山口総長による挨拶があり、引き続き新田理事・副学長が本学の魅力について説明を行いました。その後は、喜多村昇アドミッションセンター副センター長による総合入試についての説明、山口淳二新渡戸カレッジ副校長による新渡戸カレッジについての説明等を行いました。また、それと並行して、全12学部の教職員・学生による相談ブースや、学生支

援相談ブース等において個別相談対応を行い、多くの高校生・保護者等が訪れていました。

来場者数は名古屋会場が319人、大阪会場が643人でした。8月22日（土）に開催した東京会場での来場者数は982人で、今年度は3会場合計で1,944人の来場となりました。

（アドミッションセンター）



全体説明で挨拶する山口総長



本学の魅力について説明する新田理事・副学長



全体説明を行う山口新渡戸カレッジ副校長



総長・副学長と話そうコーナーで対応する山口総長と新田理事・副学長



名古屋会場の様子



大阪会場の様子

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をする事としています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	17,574件	3,050,552,735円
基金累計額 (10月31日現在)	教職員の寄附率	35.7% (1,415件/3,962人)

10月のご寄附状況

法人等3社、個人65名の方々から9,146,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名 (法人等)

株式会社インホールディングス、栄研化学株式会社、北海道大学フロンティア応用科学研究棟記念会

寄附者ご芳名 (個人)

合川 正幸	浅野 賢二	石野 悟司	出淵 至毅	伊藤 俊治	入澤 秀次	遠藤 有人	岡本 英幸
小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	金川 眞行	河本 充司	菅野 三信	喜多 司郎	工藤 峰生
久保田高志	小菅 充	斉藤 久	桜井 謙介	佐藤 文昭	佐野 公昭	三升畑元基	三分一博基
設楽 雅代	清水 研一	清水 智之	白尾 誠二	白旗 修	須田 孝徳	瀬名波栄潤	辻 幸生
土家 琢磨	寺澤 睦	豊田 威信	長島 健一	逸見 勝亮	松浦 清	三浦 敏明	峰村 昭彦
安井 敬一	山内 隆嗣	山口 雅子	山下 謙二	山田佳世子	吉田 広志		

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

(個人)

長島 健一

(法人等)

株式会社インホールディングス、栄研化学株式会社、北海道大学フロンティア応用科学研究棟記念会

感謝状の贈呈

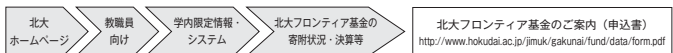


栄研化学株式会社 様 (平成27年11月12日)

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各局局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

④ クレジットカードでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ (<http://www.hokudai.ac.jp/fund/form.html>) のクレジットカード寄附申込フォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室 (事務局・学内電話 2017)

(総務企画部広報課)

平成27年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催



参加者集合写真

10月28日（水）・29日（木）、百年記念会館を会場に、平成27年度北海道地区SD研修「大学職員セミナー」を開催しました。本研修は、高等教育推進機構高等教育研修センター、教育学研究院、総務企画部人事課及び学務部学務企画課の主催によるものです。

本年度は「大学職員のキャリア形成と意識改革」のテーマのもと、本学職員7名を含む、道内の国公立大学、高等専門学校の職員37名が参加しました。

1日目は、新田孝彦理事・副学長から開催にあたっての挨拶があった後、一般社団法人国立大学協会の山本健慈専務理事から「これからの大学改革の課題と大学職員に期待される役割」と題し、大学職員の役割の変化等について、和歌山大学学長当時のお話を交えた講演がありました。引き続き、愛媛大学の吉田一恵教育学生支援部長から

「スタッフポートフォリオについて－愛媛大学の実践」と題した報告、北海道科学大学の石黒祐介総務課総務係長から「北海道科学大学におけるSDの取り組み」と題した報告が行われ、各大学の取り組み内容について受講者は熱心に耳を傾けていました。

その後、6つのグループに分かれワークショップを実施しました。ワークショップでは、（1）これまでの研修で自分はどのよう成長したか（2）役に立った研修、印象に残っている研修はどのような研修か（3）自分の経験を踏まえてどのような研修が大切だったかについて意見交換を行い、それらを踏まえて「大学職員を対象とする研修」を企画しました。

2日目は、木村 純高等教育推進機構特任教授、光本 滋教育学研究院准教授から「道内大学におけるSDの取り組みの現状と課題」についての報

告、細川敏幸高等教育推進機構教授から高等教育研修センターの概要について説明が行われ、1日目に引き続きワークショップを実施後、各グループからの発表を行い、発表の後には活発な質疑応答が行われました。

1日目の研修終了後に行った情報交換会には、講師の方々や徳久治彦理事・事務局長も参加し、当日の研修について意見が交わされる等、大いに盛り上がりました。

事後のアンケートでは、「講演・報告がどれも興味深かった」「国公立の職員と交流することで刺激を受けた」「ワークショップの中で他大学の取り組みについて知ることができ有意義だった」等の感想が寄せられました。

（学務部学務企画課）



山本国立大学協会専務理事による講演



ワークショップの様子



修了証書授与の様子

新渡戸カレッジ10月学内合宿を開催

新渡戸カレッジでは、高等教育推進機構及び国際本部の講義室を会場に本年度第2回目となる学内合宿を10月17日（土）・18日（日）に開催しました。本合宿は、日頃はそれぞれに分かれて学習するカレッジ生が一堂に集まり、多様な人々との協働を通して将来の「グローバルリーダー」に求められる資質を磨くことが目的です。

初日の午前10時30分に、全員が高等教育推進機構S2講義室に集合し、山口佳三校長から合宿の意義や目的の説明の後、「いつも以上に積極性をもって取り組んでください」という応援の言葉で合宿がスタートしました。また、来賓として、文部科学省から森田正信高等教育局高等教育企画課長と藤本佳奈国際企画室専門職がお越しになりました。森田課長からは「新渡戸カレッジは文部科学省が進める大学のグローバル化に対応する施策の中でも大変注目しており、今日は楽しみにしてきました。このようにフェローの方々がたくさん参画する取り組みは非常に有用であり、敬意を表する次第です。ぜひ尊敬する新渡戸先生のように、皆さん頑張ってください」とのご挨拶をいただきました。

引き続き午前中には、フェローと1・2年次新渡戸カレッジ生とのグループ・ミーティング並びに3年次新渡戸カレッジ生を対象としたフェローによる進路支援セミナーを実施しました。

午後からは、今回初の企画であるカレッジ生、フェロー、留学生、学部のカレッジ関係者が全員参加し、少人数グループを巡回しながらディスカッションを行う「ワールド・カフェ」形式の「新渡戸カフェ」を開催しました。留学生の中には日本語があまり得意でない人もいるため、状況に合わせて英語も使われていました。最初は少し戸惑う学生もいましたが、フェローが話題を盛り上げたり、留学生から意外な意見が出たり、それぞれの経験を踏まえた色々な意見が交換されるうち、

話し合いは次第に活発になりました。参加後、カレッジ生からは「思いがけない意見がたくさんあり刺激を受けた」「留学生の人とも積極的にディスカッションできた」といった声が聞かれ、留学生からも「また参加したい」といった感想が寄せられました。その後、学生企画行事、フェローと学生の懇談会が行われ、初日のプログラムを終了しました。

合宿2日目は、ディベート研修を行いました。ここでは、ディベートの準備から本番までの活動を通してチームワークを磨くこと、特に2・3年生はリーダーシップ力を磨くことが大きな目標です。さらに、公の場にふさわしい言葉づかいと態度で話す、論理的な思考を試みる、そして対戦を楽しむことにもチャレンジしました。

最初に、お手本としてフェロー6名による模擬ディベートが行われました。ディベートに参加するのが初めてのカレッジ生が多いなか、手順や雰囲気をつかむことができたほか、考え方の基本や話し方のコツなどについても具体的なアドバイスがありました。

次に、各グループに分かれ、リーダー、サブリーダーを中心に立論・質疑応答の準備が行われました。今回は「日本は裁判員制度を廃止すべきである－是か否か」をテーマとして行われ、あらかじめ下調べをしているカレッジ生が多く、立論の根拠は十分揃っているところが多かったようです。その上で、いかに効果的に論点を組み立てるか、どんな反論が予想されるか、それにどう対抗するか等、1時間15分をかけてじっくり話し合いを重ねました。

その後、ディベート本番は30分間と限られた中で、立論発表、作戦タイム、反対尋問、最終弁論と熱い議論が繰り広げられました。終了後、カレッジ生からは「上手く言葉にできなかった」「話が伝わっているか不安になった」「感情的になってしまった」など

の意見もありましたが、「他の人のサポートの大切さを実感した」「密度の濃い時間を過ごせて楽しかった」等の達成感を得ることができたという意見が多数聞かれました。また、今後どのような点に気をつけるべきか、どのような力が必要か、各自が発見する機会ともなりました。

(学務部教育推進課)



合宿を視察する森田課長と山口総長



「新渡戸カフェ」の様子



フェローによる模擬ディベート



ディベート本番での発表

「北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP)」、 「日本語・日本文化研修コース (日研コース)」 及び「日本語研修コース」 入学式を挙

本年10月入学の「北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP)」、 「日本語・日本文化研修コース (日研コース)」 及び「日本語研修コース」 の入学式を、10月2日 (金) 午前9時30分から学術交流会館において行いました。HUSTEPは、本学の協定校に在籍する留学生に対して原則として英語による授業を実施する1年または6か月間のプログラム、日研コースは、母国で日本語・日本文化に関する教育を行う学部在籍している留学生に対して日本語、日本文化、日本事情に関する教育を行う1年または6か月間の研修コース、そして日本語研修コースは、大学院進学前の大使館推薦の国費留学生、工学部進学前の日韓理工系プログラムの留学生、及び現代日本学プログラム課程進学前の留学生に対して開設

されている6か月間の日本語予備教育を行う研修コースです。

今回入学したのはHUSTEPに25か国85名、日研コースに21か国52名、日本語研修コースに12か国29名の33か国計166名です。

入学式では、最初に来賓の方々や教員の紹介が行われ、その後、留学生一人ひとりの名前が読み上げられました。学生は、一人ひとり起立し、来賓の方々や教員、学生に向かって一礼しました。笑顔で挨拶する学生が多く、緊張の中にも、お互いに親しみを感じる機会になったようです。その後、寺尾宏明留学生センター長からの祝辞、留学生代表スピーチが続きました。留学生代表スピーチでは、代表留学生が留学への意気込みや抱負について語りました。

引き続き10時45分より、同会場にて外国人留学生のためのオリエンテーションが行われました。大学での事務手続き等の説明の他、札幌北警察署や札幌国際プラザによる交通安全や札幌での生活についての案内、在学生による簡単な発表などがあり、学生たちは熱心に聞き入っていました。

(国際本部国際教務課)



寺尾留学生センター長による祝辞



短期プログラム (HUSTEP 1年コース) 留学生



短期プログラム (HUSTEP 半年コース) 留学生



日本語・日本語文化研修コース (日研コース) 留学生



現代日本学プログラム留学生 (日本語研修コース)



国費留学生・日韓理工系プログラム留学生 (日本語研修コース)

北海道大学総長奨励金給付証書並びに北海道大学私費外国人留学生特待プログラム留学生採用証書授与式を挙る



全員での記念撮影



山口総長から給付証書授与

北海道大学総長奨励金給付証書並びに北海道大学私費外国人留学生特待プログラム留学生採用証書授与式を、10月13日（火）に国際本部大会議室で行いました。

北海道大学総長奨励金は、留学生の質的向上及び受入れの拡充を図ることを目的として平成18年度に開始された制度です。修士課程、博士後期課程（医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科及び生命科学院臨床薬学専攻については博士課程）、専門職学位課程等に、協定校等から推薦された者を選考の上、受入れを行っています。

北海道大学私費外国人留学生特待プ

ログラムは、国際的な貢献に寄与する人材を育成することを目的とし、平成20年度に開始された制度です。博士後期課程（医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科及び生命科学院臨床薬学専攻については博士課程）、博士課程教育リーディングプログラムに選抜された修士課程と博士後期課程（獣医学研究科については博士課程）に入学する私費外国人留学生を対象としており、アドミッションポリシー、研究分野、研究の課題等を明確にしたプログラムに基づき受入れを行っています。

授与式には山口佳三総長、上田一郎国際本部長をはじめ、教育学研究院長

など関係者が出席し、北海道大学総長奨励金被給付留学生には給付証書、北海道大学私費外国人留学生特待プログラムに採用された留学生には採用証書が授与されました。山口総長より一人ひとりに証書が手渡された後、祝辞が述べられました。「あとに続く留学生の目標となり、これからの地球の将来を担うような成果を出していただくことを期待している」という山口総長の言葉を、留学生は真剣なまなざしで聞いていました。

（国際本部国際教務課）

南アフリカ共和国プレトリア大学で「日本留学フェア2015」を開催

本学は、文部科学省から受託した「留学コーディネーター配置事業」の平成27年度啓発活動第1弾として、9月17日（木）に南アフリカ共和国のプレトリア大学において、「日本留学フェア2015」を開催しました。

プレトリア大学は、2011年、ヨハネスブルグの附属ビジネススクールに日本研究センターを開設し、日本経済や日本の経営に関する研究や人的交流を行ってききましたが、今般、その研究対象を日本文化も含めたかたちで拡大し、人文学部のあるメインキャンパス（首都プレトリア市）へ移転することとなりました。日本留学フェアは、この日本研究センター移転の記念行事の一環として、本学と同センターにより共同で企画し、在南アフリカ共和国日本国大使館の全面的な協力を得て、現地大学生等を対象に開催したものです。

フェア前日の16日（水）夕刻、日本・南アフリカ双方の関係者列席のもと日本研究センターの移転・開所式典が行われました。廣木重之在南アフリカ共和国日本国大使、ムジュワラ南アフリカ共和国科学技術省事務次官に続いて、本学上田一郎理事・副学長が、日本からフェアに参加した8大学^{*1}を代表して祝辞を述べ、日本の大学の国際化への取り組みや本学のアフリカでの活動実績を紹介しました。

17日（木）午前には「学術交流のための合同ワークショップ」を実施しました。プレトリア大学、及び本学を含むフェア参加8大学から約60名の教職員が参加し、獣医学、工学、保健学等、

9つのグループに分かれ、研究紹介や今後の大学間交流に向けた話し合いが行われました。

日本留学フェアは、前日に学生デモ実施に関する情報が流れ、一時開催が危ぶまれましたが、そうした風評にも関わらず、開催時間前から大勢の学生たちが会場に詰め掛けました。デモは実際には行われず、無事フェアを開催することができました。フェア前半のセミナーでは、独立行政法人日本学生支援機構から日本留学に関する基本情報や奨学金の紹介、JICA南アフリカ共和国事務所からアフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ（ABEイニシアティブ）の概要説明、コマツ南アフリカ株式会社から社員を日本留学させた体験談と日本留学希望者への期待が述べられ、その後、フェア参加大学による大学紹介が行われました。

後半の個別相談会では、日本学生支援機構、JICA、及び参加大学がブースを出展し、日本留学に関心を持っている学生の相談に対応しました。また、資料参加した11大学^{*2}のパンフレットも陳列されました。さらに、日本大使館のご厚意で苺大福などの日本のお菓子が振舞われ、フェアに花が添えられました。

本フェアでは、最終的に300名を超える学生が来場し、準備していた資料・パンフレットは早々に無くなりました。個別相談者からは、希望する専門の内容や手続きなど、非常に積極的かつ具体的な質問がなされ、アフリカ

の学生の日本留学に対する関心やモチベーションの高さを感じられた1日でした。

18日（金）には本学を含む3大学でザンビア共和国を訪問し、ザンビア大学と在ザンビア共和国日本国大使館へ表敬訪問を行い、今後の大学間交流に関して意見交換を行いました。また、今回の上田理事・副学長の訪問にあわせて、北海道大学同窓会立上げに関する準備会合をザンビア大学獣医学部において開き、今後の計画について協議しました。

本学ではルサカオフィスを起点に、今後もアフリカ・サブサハラ地域の大学や関係機関との連携を拡大し、同地域において日本留学を促進するためのイベントや様々な活動を実施します。

※1 大阪大学、国際大学、筑波大学、東京外国語大学、東京農工大学、長崎大学、鳴門教育大学、北海道大学

※2 小樽商科大学、京都大学、慶應義塾大学、政策研究大学院大学、東京国際大学、東京大学、東北大学、文化ファッション大学院大学、三重大学、横浜国立大学、琉球大学

（国際本部国際連携課）



本学とプレトリア大学の教職員による双方の研究紹介（人獣共通感染症リサーチセンター 伊藤公人教授）



日本留学フェアのセミナーで熱心に耳を傾ける学生



プレトリア大学日本研究センター開所式典で祝辞を述べる上田理事・副学長



本学ブースでの個別相談の様子

北大インターナショナルハウス伏見がオープン

北大インターナショナルハウス伏見（中央区南15条西17丁目、南16条西17丁目）が設置され、9月29日（火）より入居開始となりました。この施設は職員宿舎（伏見住宅）の一部を転用し、3人1組のシェアルームとしてリノベーションしたものです。計87室の居室は平均9.49㎡の広さで、ベッド、机、椅子、ワードローブを備えています。

また、3人毎の共用スペースは、食卓テーブルを備えたリビング、IHクッキングヒーター、冷蔵庫、電子レンジ、食器棚を備えたキッチン、トイレ、シャワールームからなり、その他、洗濯機、乾燥機、インターネット（Wi-Fi）の設備があります。

この施設は本来、平成28年度から実施されるHokkaidoサマー・インス

ティテュート参加者及び外国人留学生のための施設ですが、空室がある場合は、外国人研究者も宿泊することができます。

本学では、今後も国際交流の促進のため、インターナショナルハウスの増加と改善に努めてまいります。

（国際本部国際交流課）



北大インターナショナルハウス伏見



居室



共用スペース（リビング）

インターナショナルハウスで消防避難訓練を実施

国際本部では、10月17日（土）に北大インターナショナルハウス北8条東、北大インターナショナルハウス北23条、北大インターナショナルハウス北8条の3か所で、消防避難訓練を実施しました。

当日は、穏やかな天候の下、留学生の在寮者合計120名が参加し、チュー

ターの協力を得て火元における初期消火から119番通報、避難誘導と続く火災発生時の手順を確認しました。

消防署員による講話では、火災発生時の通報及び避難方法に加え、地震が起きた時は慌てて建物の外に飛び出さないなどの自然災害時における注意点についても日本語及び英語で説明があ

りました。

また、訓練に引き続き、消火器を使った模擬消火体験を実施し、留学生は諸外国と異なる我が国の消火器の使用方法を体験しました。

（国際本部国際交流課）



階毎に点呼を受ける参加者
（北大インターナショナルハウス北8条東）



北消防署幌北出張所による講話
（北大インターナショナルハウス北23条）



模擬消火訓練
（北大インターナショナルハウス北8条）

新入留学生を対象に防災センター・開拓の村バスツアーを実施

10月に入学した留学生を対象として、10月18日（日）に防災センター・開拓の村バスツアーを実施しました。留学生に日本人学生及び市民ボランティアを加えた合計38人で札幌市白石区にある札幌市民防災センターを訪れ、消火体験、地震体験、暴風体験、煙避難体験を行いました。消火体験コーナーでは、消火器の使い方を習った後、画面に映し出されたてんぷら油からの火災を消す練習に臨みました。画面の火元を的確に狙えていなかった時には消火失敗という文字が映し出され、その反省を生かして無事に火を消すことができた際には、周囲から拍手がわきおこりました。

地震体験コーナーでは、留学生の多くは地震を体感したことがないため、身近にあるクッションで頭を守ることの大切さを学びました。参加者はリアルなシミュレーターを楽しみながら、また時には真剣に、災害時に自分の身を守る方法を学んでいました。

午後からは、北海道開拓の村を訪れ、秋の風景に彩られた古い町並みや竹馬などの遊びを楽しみました。留学生の一人は、自分が現在住んでいる「恵迪寮」の前身の建物を見つけ「こんなに

歴史のある北海道大学に入学でき、自分も歴史の一部となって続いていくことを光榮に思う」と感激していました。

（国際本部国際交流課）



はしご車前で記念撮影



消火体験コーナー



北海道開拓の村 旧札幌停車場（レプリカ）



旧札幌農学校寄宿舍

教育情報システム（ELMS）講習会を開催

高等教育推進機構高等教育研修センター及びオープンエデュケーションセンターでは、教職員に対するFDの一環として、10月9日（金）午後4時30分から同6時まで、教育情報システム（ELMS）講習会を実施しました。

本講習会は、平成26年度末に更新されたELMSの利用を促進するため、教職員を対象としてELMSの使い方や活用方法、活用事例等について解説・紹介すると同時に、実際にELMSを操作することにより、今後の授業における活用を推進するもので、本学教職員31名が参加しました。

開催にあたり、高等教育研修センター副センター長の細川敏幸教授から挨拶があった後、オープンエデュケー

ションセンター副センター長の重田勝介准教授を講師として「教育情報システム（ELMS）の活用方法」と題した講習が行われました。

講習後は、受講者と重田准教授によるELMSに関する活発な質疑応答が行われ、受講者はELMSについて理解を

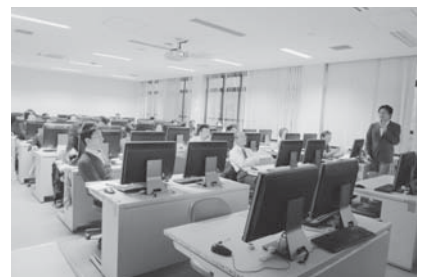
深める良い機会になりました。

高等教育研修センターでは、今後も既存のFDに加えて、新しい研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



講習を行う重田准教授



講習中の受講者の様子

「学生の主体的な学習を促す授業スキル」ワークショップを開催

高等教育推進機構高等教育研修センターでは、教職員に対するFDの一環として、10月14日（水）午後6時15分から同7時45分まで「学生の主体的な学習を促す授業スキル」ワークショップを実施しました。

本ワークショップは、身振り、表情、口頭などの非言語メッセージや授業の進め方、質問の投げかけ方、課題の出し方といった授業の組立てなどの授業スキルを理解し、身につけるためのもので、本学教員21名、道内他大学の教員14名の計35名が参加しました。

開催にあたり、細川敏幸副センター長から挨拶があった後、本センターの山本堅一特任准教授から「学生の主体的な学習を促す授業スキル～非言語メッセージ、授業の組立てを中心に～」

と題した研修が行われました。研修は、授業の始めと授業中に、学生の主体的な学習を促すことができる教員の説明方法や態度、学生とのやりとりの仕方等について、講師と参加者がインタラクティブに学んでいく形式で進められました。

事後アンケートでは、「講習（先生のすすめ方）自体が今日の学びと連動

していてわかりやすかった」「途中で近くの方と話が出来たのも良かった」等、多くの方にご好評をいただきました。

本センターでは、今後も既存のFDに加えて、新しい研修を開催する予定ですので、積極的にご参加願います。

（高等教育推進機構）



研修を行う山本特任准教授



研修中の受講者の様子

第11回「食と健康」研究会を開催

10月16日（金）医学部学友会館フラテ2階特別会議室において、産学・地域協働推進機構が主催する第11回「食と健康」研究会を開催しました。今回は食品に含まれる栄養素や香りが神経系に作用するメカニズムについて、株式会社ANBAS代表取締役社長であり、大阪大学名誉教授の永井克也先生と、京都大学大学院農学研究科准教授の大日向耕作先生より、最新の研究について講演いただきました。様々な研究成果から、「栄養素」や「香り」が神経系の働きと深く関わっていること

が示唆されました。これからは、自分や家族に合った食事や香りを処方することによって、心身ともに健康な生活を送れる時代が来るのかもしれない。

本研究会では、「食と健康」をテーマに学内外の講師や若手研究者が研究成果等を発表し、交流することを目的としています。この研究会は、安全・安心で高品質な「食」に恵まれた北海道において「食」「健康」「医療」分野のプロジェクト創成を目的とした、産学官のプラットフォームとして機能することを旨とし、定期的で開催して

います。

本研究会の事務局は産学・地域協働推進機構が担っていますが、今後も皆様の期待に応えられるよう、新たなプロジェクト形成に向けて、関係者のご協力を得ながら具体的な成果の創出を目指してまいります。

本研究会に興味のある学内研究者は、お気軽にお問い合わせください。

◆jigyo@mcip.hokudai.ac.jp

（産学・地域協働推進機構）



（株）ANBAS代表取締役社長／大阪大学名誉教授 永井先生



京都大学大学院農学研究科准教授 大日向先生



会場の様子

研究者のためのスキルアップセミナー⑥ 「その服装（かっこう）？それじゃ研究は伝わらない ー着こなしも、プレゼンスキルの一つですー」を開催

10月8日（木）、フロンティア応用科学研究棟1階セミナー室において、研究者のためのスキルアップセミナー⑥「その服装（かっこう）？それじゃ研究は伝わらないー着こなしも、プレゼンスキルの一つですー」を開催しました。

当セミナーは、研究大学強化促進事業の一環として、研究者が成果等を社会に発信する際に必要となるスキルの向上のために、平成25年度より実施しています。

第6弾となる今回は、TPOに合わせた服装の身だしなみ、表現力アップのための自分の演出方法について学ぶこ

とを目的として、「表現力アップのための魅せ力、着こなし術」をテーマに、スタイリストの石切山祥子氏にご講演いただきました。

セミナーの始めには、参加者同士で印象チェックを行い、また、講演中、石切山氏はマネキンを使用し、実際にコーディネートしながら説明するなど、セミナーは実例を交えて進みました。後半では、会場から選ばれた参加者がプラスアイテムで変身し、活発な質問がなされる中、時折笑顔もこぼれるなど、終始なごやかな雰囲気でした。

教職員・大学院生を中心に67名の参加があり、アンケートの結果、スキル

アップセミナーに参加するのが「はじめて」の方が5割以上でしたが、ほとんどが内容に「満足」「まあ満足」という回答であったほか、「面白い企画です」「これまでにない内容のセミナーだったので今後も期待しています」などの意見も数多く寄せられ、当セミナーへの関心の高さがうかがわれました。

大学力強化推進本部、創成研究機構では、これらの意見をもとに、今後の継続的なセミナー開催について検討していきたいと考えています。

（創成研究機構）



石切山氏による講演



実習の様子



会場の様子

「北大URAシンポジウム～北大URAが目指すもの～」を開催 100名を超える参加者を迎えての活発なディスカッション

大学力強化推進本部URAステーションでは、人材育成本部との共催で、10月6日（火）に「北大URAシンポジウム～北大URAが目指すもの～」をフード&メディカルイノベーション国際拠点の多目的ホールで開催しました。

近年、大学には新領域・融合分野など新たな研究領域の開拓や、産業界・地方公共団体等との幅広い協働によるイノベーションの創出が社会から求められており、新しい戦略的な研究マネジメントの職種として、URA（University Research Administrator）が大学等に配置され、活躍が期待されています。このような背景を受け、このシンポジウムをURAのあるべき姿・目指すものを考える場として、京都大学、名古屋大学のURAをお招きし、各大学でのURAの取組み・活動を紹介し、その役割について議論を行いました。

プログラムは、初めに川端和重理事・副学長が「北大URAが目指すもの」を全学的な視点から紹介し、本学URAの取組み事例として、田中晋吾主任URAより「どうすれば大学は世界の課題解決のために役立てるのか～北極域研究センターの挑戦～」、江端

新吾主任URAより「北海道大学の施設・設備の考え方を考える！～グローバルファシリティセンター構想～」、網塚 浩総長補佐・理学研究院教授より「北大のURA、ここがスゴイ!?」と題して紹介がありました。そして、本学以外の先進的なURAの活動事例紹介として、京都大学URAの白井哲哉氏より「京大のURAも、ここがスゴイ!?～京大URAのキセキ～」、名古屋大学URAの玉井克幸氏より「名古屋大学のURA考～URAのスペシャリティとは?～」をお話いただき、最後に、シンポジウムの総括として「URAが目指すもの」をテーマにパネルディスカッションを行い、会場の参加者の方々も交えて活発に議論しました。

当日は、全国から参加機関18機関、約100名の参加者をお迎えし、大学関係者はもとより、自治体や企業からも多数ご参加いただき、盛況のうちに終了しました。アンケートでは「URAの取組みや実績を理解できた」「各講演者の熱が伝わるシンポジウムだった」「企業にとっても大変参考になった」「URA職を自分の将来のキャリアパスとして検討したい」等、好評なご意見

を多数お寄せいただきました。URAステーションでは、いただいた意見をもとに、今後も本シンポジウムをURAの活動の発信やディスカッションの場として継続して実施していきたいと考えています。

なお、シンポジウムの講演資料は本学URAステーションのホームページで公開しています。URAとはどのような仕事をするのか、何を目指しているのか、URAで大学や研究環境はどう変わっていくのか等、ご関心のある方はぜひご覧ください。

最後に、運営にご協力いただきました皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

◆問い合わせ先

大学力強化推進本部 URAステーション
http://www.cris.hokudai.ac.jp/cris/ura/
E-mail : ura-seminar@cris.hokudai.ac.jp

*URAステーションは、平成24年10月に本学に誕生した組織で、全学的、部局横断的な研究戦略企画と研究推進支援、研究力強化とグローバル化を中心とした大学力強化のためのシステム改革に関する業務等を担当する部署です。

(大学力強化推進本部)



川端理事・副学長のオープニング講話



真剣な眼差しの参加者



京都大学URA白井氏（左）、
名古屋大学URA玉井氏（右）



本学の講演者・パネリスト



活発なパネルディスカッション



大いに盛り上がった情報交換会

人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPで 移転可能研究力強化セミナー（TSS）を開催

人材育成本部国際人材育成プログラムI-HoPでは、10月23日（金）に工学院B11教室にて、英語による移転可能研究力強化セミナー（TSS）を開催しました。

移転可能研究力強化セミナー（TSS）は、博士人材に求められる専門性以外の能力、即ちリーダーシップ、コミュニケーション力、プレゼンテーション力などを若手研究者たちが習得することを目的としています。人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicでは、日本人博士人材並びに日本語の得意な外国人博士人材を対象に、座学並びにワークショップ形式で、数多くの移転可能研究力強化のためのプログラムを実施していますが、研究活動をほ

ぼ英語だけで行う、いわゆる英語コースに所属する外国人DC・PDにとって、英語による移転可能研究力習得の機会は多くありません。そこで、I-HoPでは、英語による移転可能研究力獲得を目的とした講義、ワークショップの開発を行っています。今年度はこれまで既に博士課程卒業生OBによる講話、セルフブランディングのワークショップを実施済みですが、今年度3回目となる今回は、9月に本学工学院で博士号を取得し、日本企業への就職を果たしたジャスティン・シュレスタ氏、並びに国内で博士号を取得後、日本及び米国で研究機関や企業研究所でのキャリアを積んでいる金 英子氏と、外国人研究者に講話をお願いしま

した。本学卒業生のシュレスタ氏は、「I-HoPが実施している英語キャリアカウンセリングにより日本企業を知ることになり、自らの強みを客観的に分析することが出来たので、日本語力は不十分ながら日本企業への就職を果たすことが出来た」と語ってくれました。

今後とも、外国人若手研究者がキャリア形成をしていく上で、一人でも多く今回の講師のような成果に結びつくことが出来るよう、移転可能な研究力の強化を行っていく所存です。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



シュレスタ氏



アビームコンサルティング株式会社 金氏



セミナーの様子

■ 部局ニュース

触媒科学研究所（旧触媒化学研究センター）改組記念講演会・記念式典・祝賀会を開催



式典後の集合写真

旧触媒化学研究センターは、10月1日に触媒科学研究所へと改組し、ミッションである新たな触媒科学の創造と触媒分野の全国共同利用・共同研究拠点活動を開始しました。これを記念し、10月13日（火）午後2時から約200人の学内外及び海外の関係者の参列のもと、記念講演会・記念式典をフロンティア応用科学研究棟鈴木章ホールで開催しました。

記念講演会では、Fritz-Haber InstituteのDirector Hans-Joachim Freund教授に表面の原子レベル観測と触媒作用解明の研究について、諸熊奎治京都大学名誉教授に反応経路の理論探索の最前線について、最後に、堂

免一成東京大学教授に太陽光を用いた水分解触媒についての講演をいただきました。

引き続き開催した式典では、朝倉清高触媒科学研究所長が式辞を述べ、山口佳三総長の挨拶の後、牛尾則文科学省研究振興局学術機関課長及び永原肇触媒学会長から祝辞をいただきました。

式典終了後、会場をファカルティハウス「エンレイソウ」に移し祝賀会が行われました。長谷川淳也副所長の司会のもと、朝倉所長の挨拶ののち、国立研究開発法人物質・材料研究機構フェローの魚崎浩平本学名誉教授と Freund教授に祝辞をいただき、元触

媒化学研究センター長の東市郎本学名誉教授による祝辞と祝杯の音頭で懇談に移りました。

和やかな雰囲気の中、東北大学多元物質科学研究所長の村松淳司氏、Purdue大学Science学部長のJeffery Roberts氏、産業技術総合研究所触媒化学融合研究センター副センター長の浅川真澄氏、Xiamen大学PCSS国家重点研究所長のYe Wang氏、京都大学化学研究所の小澤文幸教授にスピーチをいただき、最後に福岡淳総長補佐が閉会の辞を述べた後、一本締めを行い、盛会のうちに終了しました。

（触媒科学研究所）



挨拶をする山口総長



祝辞を述べる牛尾文部科学省学術機関課長



スピーチする魚崎物質・材料研究機構フェロー

北方生物圏フィールド科学センターで 「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」 を開催

7月4日(土)～10月3日(土)に、中川研究林・天塩研究林、函館市国際水産・海洋総合研究センター、札幌キャンパス、忍路臨海実験所、白尻水産実験所及び七飯淡水実験所において、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を開催しました。

本事業は、小学校5・6年生、中学生、高校生を対象として、科学研究費助成事業の研究成果をもとに、最先端の研究成果について直に見て、聞いて、触れることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラムとして、独立行政法人日本学術振興会からの支援を受けて実施しています。

以下に今回実施された7件のプログラムを紹介します。

(北方生物圏フィールド科学センター)

オタマジャクシはすごい～実験でわかる動物たちの生き残り戦略～

7月4日(土)・5日(日)に「オタマジャクシはすごい～実験でわかる動物たちの生き残り戦略～」を開催しました。これは科学研究費補助金「基盤研究(B)：同所的種内変異が生み出す相互作用と群集レベルの効果」(研究代表者：岸田 治准教授)による研究成果をもとに、北海道の両生類の驚くべき生態とその研究方法について知ってもらうことを目的として企画しました。今回は小学5・6年生を対象に中川研究林・天塩研究林で実施しました。

道北各地の小学校から9名の児童の参加がありました。中川研究林の学生宿舎に集合し、開講式を行った後、バスで天塩研究林のフィールドへと向かいました。バスの中ではグループ対抗「生きものしりとり」をして楽しみましたが、自然が大好きな小学生が次から次へと生きもの名前を挙げ、その知識量にスタッフ一同圧倒されました。天塩研究林のフィールドでは3つの池を回り、エゾサンショウウオ幼生、エゾアカガエルのオタマジャクシ

をはじめとする様々な池の動物たちを採集しました。大きなサンショウウオの幼生やヤゴ、ゲンゴロウモドキなどを捕まえる度に大きな歓声があがり、大変な盛り上がりでした。また地域の哺乳類を調べるために池の近くに2週間前から設置してあった自動撮影カメラの回収も行いました。その後、中川研究林の学生宿舎に戻り、夕食後、夜のプログラムを行いました。

夜のプログラムでは、昼間自分たちが採集した水生動物や、外敵がいる状況とない状況で育ったオタマジャクシを観察しました。育った環境によって異なるオタマジャクシの形に注目し、形の機能について仮説を立て検証する実験も行いました。実験は参加者が考えた2つの方法で行い、その結果を皆で議論しました。実験の方法まで自分たちで考えたことで科学とは何かを身をもって味わってもらおうことができたと思います。

2日目は、まずオタマジャクシの行動を観察し、行動データの取り方やグラフの描き方を考え、学びました。続

いて、オタマジャクシの形に注目したプログラムを行いました。エゾアカガエルのオタマジャクシは外敵がいると頭を膨らませます。その形の違いを体感してもらうために、膨らんでいるオタマジャクシと膨らんでいないオタマジャクシの両方を用意し、子供たちに目隠しをしてもらい手で触った感触だけでどちらのオタマジャクシかを当てるゲームをしました。見事、子供たち



池で生物採集



実験の結果を議論



目隠しをしてオタマジャクシの形を当てる



自動カメラで撮影されたヒグマ

は全員正解しました。次にノギスを使ってオタマジャクシの形態計測をし、形の違いをグラフ上に描きました。その後、学術論文のグラフも見せ、自分たちが描いたグラフが研究者たちの描いたグラフと本質的に同じであることを知ってもらいました。最後に、前日、回収した自動撮影カメラの

上映会も行いました。キツネやタヌキだけでなく、大きなヒグマが映っており皆、感激でした。子供たちには驚きと喜びを通して北海道の自然の素晴らしさを知ってもらえたのではないかと思います。

プログラム準備や運営は大変でしたが、スタッフもまた子供たちとの触れ

合いを通じて自分たちの研究活動がどういったものかを知ることができました。本プログラムを実施するにあたり、研究林の教職員並びに環境科学院の大学院生には惜しめない協力をいただきました。心より感謝いたします。

水中の動物はどうやって動いてる？～装着型記録計による行動計測をしてみよう！～



「未来博士号」を持って記念撮影

7月20日（月・祝）の海の日「水中の動物はどうやって動いてる？～装着型記録計による行動計測をしてみよう！～」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究（B）：高次捕食者をモデルとした北方海洋生態系多次元モニタリングネットワークの構築」、「基盤研究（A）：設置型モニタリングシステムを用いたミナミマグロ幼魚の回遊経路の解明」、「萌芽研究：多次元定量計測技術を用いた絶滅危惧種イトウの行動生態の解明」（以上、研究代表者：宮下和士教授）による成果をもとに、体験的なプログラムで最先端の研究に触れてもらう企画です。

中高生を対象に募集し、中学生12名・高校生3名の計15名の参加がありました。本プログラムでは、函館市国際水産・海洋総合研究センター（海洋センター）の大型水槽（600t）で記録計（ロガー）による魚類の行動計測とGPSを使った移動軌跡の可視化と移動速度の解析を実施しました。開講式の後に、宮下教授による「行動を可視化」とは」の講義ではバイオロギング

を使った最先端の行動研究の紹介と本プログラムの予備知識を説明しました。その後、受講者はカップと長靴に着替えて実際に魚にロガーの装着を行い、大型水槽へ放流しました。放流後は、ROV（水中カメラロボット）を操作して行動観察を行いました。

ランチタイムでは、受講者と実施者が同じテーブルでお弁当を食べて、身近な話題から大学生活、研究者への道など受講者の進路相談まで話が弾みました。午後は、受講者がGPSロガーを持ち海洋センターの周りを散策してGPS移動計測を行いました。その後は実施分担者の三谷曜子准教授による「海棲哺乳類のバイオロギング」の講義の後に、パソコンを使った遊泳行動のデータ解析とGPSデータの可視化演習及び移動速度の解析を行いました。最後に受講者に「未来博士号」を授与して記念撮影を行って終了しました。

本プログラムを実施するにあたり、中学生と高校生それぞれの学習レベルに応じた解析課題を提供することで参加者が飽きないように心がけました。また、受講者3人と大学院生の4名一



宮下教授による講義



エイの行動計測



パソコンによる解析

組のチームで実験及びランチタイムを含めて終始一緒に行動し、一人で参加した受講生も寂しい思いをしないように心がけました。その甲斐あって受講者の様子・アンケート結果からも、満足度が高いプログラムであったと実感しています。

最後になりますが本プログラムの開催にあたり、終始ご協力いただいた教職員・学生諸氏、中学校・高等学校にポスター掲示やチラシ配布等のご協力をいただいた一般財団法人函館国際水産・海洋都市推進機構に深く感謝いたします。

体験！ベリー研究の最前線 “君も育種家になろう！”

7月25日（土）に「体験！ベリー研究の最前線 “君も育種家になろう！”」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究（C）：胚乳の植物体再生系を利用した新規倍数性育種法の開発」、「基盤研究（B）：ユーラシア・北米のハスカップ野生遺伝資源の多様性解析と評価に関する研究」（以上、研究代表者：星野洋一郎准教授）による成果をもとに、体験的なプログラムで大学の最先端の科学に触れてもらう企画です。北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場で実施しました。中学生を対象に募集し、23名の参加がありました。

午前は、様々なベリーをクイズ形式で紹介し、オリジナルテキストを使いながら多様なベリーについてそれらの

特徴を学びました。さらに、北大農場産のハスカップ、ラズベリー、カシス、シーベリー、レッドカーランツなどの食べ比べを行い、その違いを体験しました。ハスカップについては、野生系統の苦味が強い果実、選抜された良食味の果実の食味の違いを体感してもらいました。参加者はその味の違いに驚いていたようです。

午後は、育種の基礎となる3つの実験「生きた花粉が伸びる様子をとらえよう」「果実の糖度、pHを調べてみよう」「パラピン紙で交配袋を作ってみよう」を行いました。ローテーションで全員が全ての実験を行いました。パラピン紙で作った交配袋は持ち帰ってもらい、夏休みの自由研究で植物の交配実験に挑戦してくれることに

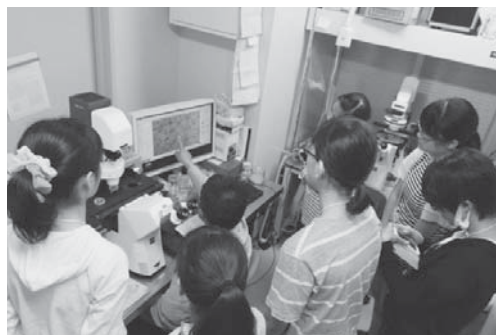
なっています。

全ての実験が終わった後に、クッキータイム（おやつ時間）とフリートークの時間をもちました。スタッフ手作りのラズベリーソース、ハスカップソースでアイスクリームを楽しみました。最後に「未来博士号」の授与式を行い、閉会となりました。このイベントが科学への扉を開き、背中を押すことができれば大きな喜びです。参加者の皆さん、ありがとうございました。

本事業の開催には入念な準備を行いました。細やかに各参加者と連絡を取るなど準備段階から支えてくれた事務職員の皆さん、圃場の管理などにご協力いただいた技術職員の皆さん、研究室の大学院生・学生諸氏のご協力に深く感謝いたします。



北大産ベリーの食べ比べ



花粉管が伸びる様子を顕微鏡で観察



果実の糖度を測定



交配袋作り

海の森の調査隊～おしよろの“こんぶ”を守るには!?～

7月25日(土)に「海の森の調査隊～おしよろの“こんぶ”を守るには!?～」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究(B)：北太平洋西部沿岸におけるコンブ類の種多様性と其の由来の解明」(研究代表者：四ツ倉典滋准教授)の成果をもとに、大学で取り組んでいる研究の一端に触れてもらうという児童・生徒へ向けた体験型プログラムです。今回は小学5・6年生を対象に、忍路臨海実験所で実施しました。

当日は小樽市と札幌市から9名の小学生が集まりました。参加者は集合場所からバスで実験所に移動し、開講式の自己紹介では受講生全員が“プログラムへの参加理由”と“今日一日の目標(+a)”を発表しました。次いで、実施代表者が「おしよろの“こんぶ”を守るには!?」と題して多様なコンブとそれらが作り出す海中の森について、大学で行っている研究を紹介しながら講義をしました。受講生は各自、

現状と課題を整理した後、フィールドへ出て、(1)前浜の磯歩きによるコンブとその他海藻の採集、(2)水中カメラや箱メガネを用いて磯船の船上から“コンブの森”の観察、(3)多項目水質計を使った水質調査、を行いました。モニターやガラス越しに見られるコンブがウニによる食害を受けながらも群落を維持している様子を目の当たりにし、受講生は野生のコンブのたくましさを実感するとともに、これらのコンブを守らなくてはという思いを一層強くしたようです。

午後からは、午前中の磯歩きで採集したコンブやその他海藻の同定と押葉標本づくりを行いました。短時間かつ限られた場所での採集でしたが、31種の海藻が同定され、磯焼け地帯のわずかなコンブの森の中にこれほど多くの海藻が暮らしていることに受講生一同驚いた様子でした。なお、採集海藻は丁寧に押し葉標本にされ、夏休みの自由研究用として全員が持ち帰っていき

ました。次いで、実施分担者が“コンブの森の環境と、そこに見られる海藻類”について解説しました。改めて本プログラムのテーマについて各自が考えをまとめた後、実験所で培養保存されているコンブの培養株を高分子ゲルに混ぜ込み、その種苗を海中へ投入する実習を行いました。一般的に馴染みの薄い“コンブの森づくり”ですが、簡単な作業を通して子供たちには自分たちにも何かができるということを感じ取ってもらえたように思います。終了式で参加小学生一人ひとりが「未来博士号」を手渡された時の晴れやかな笑顔が印象的でした。

忍路臨海実験所で開催されるこのプログラムは今年で5回目となりますが、毎回主催関係者の強いチームワークのもとで実施されています。今回も当日の円滑な進行と安全の確保にご尽力いただいた教職員、及び大学院生諸氏に感謝いたします。



コンブの葉の特徴は？



コンブの森の中にウニが！

のぞいてみよう海の底、北海道の魚たちをまるごとリサーチ

白尻水産実験所（函館市白尻町）では、8月1日（土）・2日（日）に「のぞいてみよう海の底、北海道の魚たちをまるごとリサーチ」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究（B）：親潮流路にある島嶼生物の側所的進化と適応放散－極東域生物相形成史の解明を目指して」（研究代表者：宗原弘幸准教授）の成果によるものです。遠くは広島県、旭川市、札幌市から訪れた中学生と小学生15名が未来の北大生として参加し、大学で行う実習さながらに野外観察、標本採集、室内実験に取り組みました。本プログラムの開催は2年連続5回目、「ひらめき☆ときめきサイエンス」の常連になってきたこともあって、日本学術振興会のホームページからの申し込みで定員となりました。

最初に、白尻実験所前浜の生物相の特徴とよく見られる生物の生態について、「北大元気プロジェクト2012」で作成した『白尻、海の生き物図鑑』などを使い説明しました。その知識を実践するためには、正しいシュノーケリ

ング技術が必要です。まずは、実験所にある大きな水槽をプールに仕立てて練習しました。シュノーケルクリアーとフィンワークをマスターして、いよいよ海中観察です。白尻はマコンプの海です。学生たちの解説を聞きながら、コンプの海中林とそこに群れる魚たちなどの生物観察をしました。昨年までは、2日目に行う地引き網の後、それらの種名を調べてDNAで確認する実験にも挑戦してもらいましたが、盛り込み過ぎたという反省から、今年は海中観察に多くの時間を使いました。水温が高かったこともあって、2日間たっぷり3時間、磯場の生物多様性を体感することができました。

また、もう一つ昨年と変えたことは、沖合を回遊する魚の実習で使う魚をクロマグロからブリに変えたことです。20キロ近いマグロとは言え、クロマグロでは成魚ではありません。若魚の資源を保護しようという国際的な協定を意識しました。それでも7キロのブリ2個体を回遊に適応した紡錘形の体や鱗の構造を観察した後、解剖後、

皆で味わう楽しさは、マグロの時と変わりありませんでした。指導に当たった大学院生・学部生たちと楽しく会話しながら、全員でやり遂げた達成感と実験の楽しさを味わい、「北海道の魚たちをまるごとリサーチ」することができました。

海で行うフィールドワークは、準備と安全管理が大変です。神経を使う作業でしたが、2日間は、参加者にとっても学生たちにとっても楽しい一時でした。しかし決して楽しいだけでなく、学生たちが子どもたちに教える過程は、自然や生命の尊さを再認識し、自動の実験機器で行われている化学反応の原理を確認するなど、学生生活を総括し、自分たちの研究意義をも問い質す機会になりました。

このように、教わる側にも教える側にも、それぞれの目標に向かう確かなモチベーションを提供し、本実習が無事終了しました。実習の夏が終わると、研究の秋となります。学生たちの成長が楽しみです。



みんなで地引き網を引こう



側線の数で種類が違うんだよ



海の底に何かいる

有機農業の入り口・肥料がなくても野菜は育つ

8月19日（水）に「有機農業の入り口・肥料がなくても野菜は育つ」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究（B）：カバークロープの導入による省資源・温暖化ガス抑制型の有機栽培の確立」（研究代表者：荒木 肇教授）の成果によるものです。本プログラムでは、食べ物に関心を持ちだし、農作物に関する教育が開始される中学生を対象に、北大農場を活用して有機農業の知見を提供しました。当日欠席もあり、参加者は4名でした。

簡単な講義の後、北大農場内にあらかじめ設置した有機質資材施用圃場（堆肥・メタン発酵消化液・マメ科緑肥・化学肥料）で、トマトやレタスの生育調査を中学生自らが行いました。すると堆肥施用畝で化学肥料と同等以上の生育が見られ、有機質資材も肥料の代替となるデータを得られました。その後、農場内の作物や牛の放牧を見ながら牛舎に行き、舎内での飼養や給餌施設、バイオガス施設を観察しました。堆肥は別舎に堆積してありました。ローダーで攪拌すると湯気が舞い

上がり、受講生は驚いていました。堆肥の中に手を入れ、おそろおそろ触ってみると、「熱い」との歓声が起きました。堆肥の原料は乳牛糞尿と敷きわらの混合物で、微生物が増殖して有機物（糞尿と敷きわら）が分解すること、分解時には熱が発生することを実感できました。庁舎近くで、害虫食害が発生しないキク科野菜のトレビスやリーフチコリーを食べてみましたが、大変苦く、これなら虫も寄り付かないことに受講生は納得顔でした。午後には、有機質資材を施用した圃場の土壌

分析を行い、受講生が比色の操作をしました。堆肥を施用した畝の窒素量は他より大きく、土壌中の窒素量が野菜

発育に関連するデータも得ることができました。学内にある北大農場を活用して作物や家畜に触れることで農業科

学に関心を持つ機会となったと思います。



有機質資材施用圃場でのトマトの生育調査



湯気を出している堆肥に驚く受講生

挑戦！イクラをさかなにしてみよう！

七飯淡水実験所（亀田郡七飯町）では、10月3日（土）に「挑戦！イクラをさかなにしてみよう！」を開催しました。これは、科学研究費補助金「挑戦的萌芽研究：魚類の分離胚細胞からの個体再生に関わる発生工学的研究」（研究代表者：山羽悦郎教授）の成果をもとに、大学で取り組んでいる研究の一端を、小学5・6年生と中学生に触れてもらうという企画です。七飯淡水実験所の新研究棟が昨年11月に竣工したことを受けて、今年度初めて企画されました。

当日の午前中は小雨でしたが、午後には晴れ間が広がりました。今回の企画には、七飯町と近隣の函館市、北斗市に加え、札幌や八雲からの小中学生、合わせて11名が七飯淡水実験所に集まりました。開講式では、日本学術振興会の職員から「ひらめき☆ときめきサイエンス」の趣旨の説明を受けました。

この体験実習のメインは、この時期に産卵するサクラマスからの採卵と採

精、受精です。受講者はそれぞれ、成熟した雌雄個体から卵・精子を採取し、精子に水をかけると泳ぎ始めることを顕微鏡で確認し、その精子を使って受精を行いました。

昼ご飯は、塩焼き、お刺身、イクラご飯、押し鮭とサケマス三味のメニューでした。受講者はそれぞれ一匹のさかなをもらい、自分で内蔵を取り除いた後、塩を付けてコンロで塩焼きにしました。イクラは、排卵したサクラマスの卵、卵巣から取り出したブラウトラウトやアメマスの卵からあらかじめ作っておき、それぞれの違いを舌で区別してもらいました。プチプチした食感のサクラマスの卵の人气が一番ありました。

午後の実習は解剖です。最初に魚からの採血の仕方を体験し、顕微鏡で血液を観察しました。塩焼きで残した骨で血管の位置を確認してから実際の魚から血を抜きます。受講者は注射針を扱ったのは初めてでしたが、上手に採血できました。その後、スライドで手

順を確認しながら、内蔵の種類、形、つながり、心臓の構造と血の流れ、目の構造と脳とのつながりを調べました。最後には、水晶体の透明さに驚いていました。

おやつクッキータイムでは、受講者は濁水で午前中には見られなかった巨大なチョウザメを見つけて興奮していました。おやつ後は、孵化稚魚の顕微鏡観察をし、血液がからだの中を循環する様子を確認しました。ここで、体験教室は終了し、最後に、自分たちが受精した卵、2週間前と1ヶ月前に受精した卵を各家庭に持ち帰り、孵化までを観察してもらうことにしました。

今回のプログラムでは、事務の皆さん、実験所の職員の方、そして指導の補助をしていただいた学生さんにお世話になりました。子供たちが主役でしたが、主役をもり立てていただきありがとうございました。



オリエンテーション



受講者が飼育魚を捕獲

北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭を挙行

北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場では、10月23日（金）午後1時から、アグリフードセンター傍に位置する畜魂碑前において、教育・研究に供された家畜の供養のために畜魂祭を執り行いました。さわやかな秋晴れの中、山田敏彦農場長をはじめとする本センターの教職員、本センターを利用する農学部教員、畜産科学科の学生など約70名の関係者が参列しました。

本センター生物生産研究農場では、自給飼料を主体とする物質循環型の持続的な家畜生産を継続して行っており、様々な教育・研究に用いられています。また、家畜用飼料作物の生産から、それらを利用した家畜生産を行

い、得られた生産物を加工して製品を製造するという一連の流れを教育の中心としています。これらの教育・研究活動に対して、多大な貢献をした家畜・家禽に感謝し、その御霊を供養するために毎年畜魂祭を行っています。

はじめに山田農場長の挨拶の後、参列者全員で畜魂碑に拝礼しました。その後、中小家畜生産研究施設、酪農生産研究施設及び畜産製造施設より、家畜・家禽の飼養頭数や利用実績等の報告があり、最後に山田農場長から、世界的には人口増加や経済発展に伴って肉需要が急増している中で、自然環境破壊、水資源不足、土壌・水質汚染など多くの環境問題に今後直面していかなければならないことや、北海道では

酪農家の離農も増加していることなど紹介があり、参列者一同による、持続的な畜産生産システムや高付加価値生産システムの構築に向けて、教育・研究の推進や技術の向上が不可欠であるという思いを新たにしました。

（北方生物圏フィールド科学センター）



畜魂碑



畜魂碑に御神酒を捧げる山田農場長



拝礼する職員



利用実績等の報告をする職員

歯学研究科で全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携25周年記念交流行事を開催



調印後の記念撮影



協定調印式

歯学研究科と大韓民国全北大学校歯医学専門大学院との姉妹校提携は、平成2年に創始され、現在までに5年ごとの記念行事を含めて活発な交流が行われています。

このたび、10月19日（月）に全北大学校歯医学専門大学院から、Lee,

Kwang Won大学院長はじめ15名の教員等が来学され、両校の教育及び学術研究に関して、今後さらに協力関係を発展させるべく姉妹校関係を継続する旨の協定調印式を執り行いました。

引き続き行われた共同学術シンポジウムでは、最新の研究成果についての

発表及び質疑応答が活発に行われ、両校にとって有意義な交流となりました。

これにより今後、両校の学術交流が一層推進されるものと期待されます。

（歯学研究科・歯学部）

経済学部で第2回プレゼン大会を開催

10月17日（土）に経済学部主催「第2回プレゼン大会」を開催しました。一昨年までの「プレゼン・ディベート大会」からの通算で12回目となる本大会には、総勢9チームが参加しました。昨年よりも参加チーム数は増えており、リニューアル後の大会が学生に浸透し始めているものと思われます。

当日は、本年度のテーマである「新幹線、北海道にどう活かす!?」に沿って、各チームによって、多様な視点に基づく独創的な発表が行われました。また、各チームの発表に対して、参加学生からの確かな質問が多数なされました。3時間超にわたって緊張感を維持した発表と論戦が繰り広げられ、質問・議論の時間が短く感じられるほど、充実した内容でした。また、メディアからの取材もあり、学生にとっては、準備に時間をかけたプレゼンのしがいのある大会になったものと思われます。

参加チームからは「他チームの独創的な発表を聞くことができ良かった」

「他チームのプレゼンや質疑応答を見て刺激になった」という意見や、今後に向けて「質問時間をもう少し長くしてほしい」という感想が寄せられました。来年3月に開業する北海道新幹線の活用法を模索しながら、参加した学生たちは新幹線開通が北海道にもたらす様々な影響、北海道の現状及び将来について、理解を深めていったものと思います。各チームの発表が事前の予測を大きく上回る秀逸さであったため、レフェリー間での審査も熱のこもったものとなりました。最終的には以下の3チームが表彰対象となりました。

優勝チーム「和田ハウスプレゼン部」は2年生チームながら、プレゼンに関するスキルの高さ、内容の完成度でレフェリーからの高い評価を集めました。話し方も聴衆を引き付けるように、多くの工夫がなされていました。提案の内容も、新幹線で貨物と乗客を輸送する貨客混載という従来では実現できなかったプランをデータに基づい

て提示するという、極めて野心的な内容でした。準優勝チーム「吉見ゼミ」は、北海道新幹線の道内最初の駅である木古内町において、万北博覧会という、北海道内の多くの地域による常設博覧会を設け、道内全体に新幹線による波及効果をもたらす計画が提案されました。同チームのデータに裏打ちされた手堅いプレゼンも高い評価を受けました。3位チーム「らぶりーあいかわ（高井ゼミ）」は、八雲駅付近に全天候型観光施設としてカジノ・リゾートを作り、全シーズンで新幹線の利用者数を増やすというアイデアが評価されました。

なお、参加学生や観覧者総勢で60人ほどの来場者があり、大会終了後の茶話会も含めて、盛況のうちに大会を終えることができました。参加した学生の皆さん、来場者の皆様にお礼申し上げます。

（経済学研究科・経済学部）



プレゼンの様子

経済学研究科・経済学部で「学部生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催

経済学研究科・経済学部では、10月29日（木）に、「学部生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催しました。本研究科教員2名から、経済学研究科（現代経済経営専攻・会計情報専攻）の特色や入学試験制度などについての説明が行われました。その後、現役大学院生4名から、大学院の魅力や院生生活の紹介が行われ、最後に質疑応答という順でガイダンスが進められました。経済学部所属の学生、他学部生、他大学生など、計8名の出席者がありました。熱心に内容に耳を傾けていました。

本ガイダンスは、会社説明会などの

開始時期が早まったことを鑑み、学部生の就職活動スタート目前に実施するようにし、学部卒業後の進路が就職だけではなく、大学院進学も一つの選択肢であることを知ってもらうことを目的としています。

大学院生と学部生が同一の環境で研究活動を行う機会のある理系の学生と比較すると、文系学部生の多くにとって大学院は必ずしも身近な存在ではないことから、大学院がどのようなところなのかについての具体的なイメージが持ちにくい状況にあります。そこで、本ガイダンスでは、経済学研究科の特徴や、大学院生の研究活動や生活

について、教員と大学院生の双方の視点から情報提供を行いました。出席者からは、修士課程が1年で修了可能となる学部生の大学院授業の早期履修制度などについて質問が出され、大学院への関心の高さをうかがうことができ、有意義な場となったと考えています。

学生が卒業後の進路をより多面的に考える機会が得られるよう、経済学研究科・経済学部では今後もこうしたガイダンスを定期的に開催していく予定です。

（経済学研究科・経済学部）



大学院生による「大学院への道」紹介



ガイダンスの様子

経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催



集合写真



親睦を深める参加者たち

経済学研究科・経済学部では10月29日（木）午後6時から、研究棟3階会議室において、平成27年度外国人留学生懇親会を開催しました。

本研究科・学部では、外国人留学生が年々増加しており、特に大学院修士課程（現代経済経営専攻）においては、在籍する学生の半数を占めています。このような状況の下、留学生、日

本人学生、教職員が相互に理解と親睦を深め、交流を通して生まれた絆が留学生の生活適応や日本人学生の国際経験に資することを目的とし、本懇親会を開催しています。

8回目の開催となる今回は、司会進行とゲームの企画を修士課程1年の日本人学生と中国からの留学生、学部4年の日本人学生の3名が務め、本研究

科・学部等に在籍する留学生や、そのチューター・サポーター、そして国際交流に関心のある日本人学生と関係教職員など約60名が参加しました。参加者は軽食を取りながら、歓談やゲームへの参加を通して互いに親交を深め、盛況のうちに閉会しました。

（経済学研究科・経済学部）

工学研究院で寄附分野「エコセーフエネルギー分野」閉講式並びに「循環・エネルギー技術システム分野」開設式を開催

10月27日（火）、百年記念会館大会議室において、工学研究院に9月30日まで開設されていた寄附分野「エコセーフエネルギー分野」の閉講式並びに10月1日に新たに開設された「循環・エネルギー技術システム分野」の開設式を開催しました。

エコセーフエネルギー分野は、平成24年10月に工学研究院環境創生工学部門に3年間の寄附分野として設置され、次世代に向けた安全・安心な再生可能エネルギーの普及促進のために、バイオマス（廃棄物系、未利用、資源作物）利活用を中心とした、技術、環境、経済、社会を考慮した実行可能な技術・システム及び事業展開の提案を行うことを目的に活動してきました。閉講式では、名和豊春工学研究院長からの開会の辞の後、山口佳三総長から挨拶があり、続いて山口総長より寄附会社の代表者へ感謝状が贈呈されました。その後、寄附会社を代表して日立造船株式会社常務取締役環境事業本部長の三野貞夫氏よりご挨拶をいただき、

エコセーフエネルギー分野の藤山淳史特任助教が3年間の活動報告を行いました。最後に、エコセーフエネルギー分野の古市 徹客員教授から閉講にあたっての挨拶がありました。

循環・エネルギー技術システム分野は、いであ株式会社、岩田地崎建設株式会社、有限会社エネルギーシステム研究所、応用地質株式会社、小川建設工業株式会社、鹿島建設株式会社、大成建設株式会社、日立造船株式会社、八千代エンジニアリング株式会社、以上9社からの寄附金により工学研究院に新たに設置された寄附分野です。開設期間は10月1日から平成30年9月30日までの3年間で、その間、社会問題を解決して社会に貢献する社会技術として、バイオマス（廃棄物系、未利用、資源作物）を中心とした安全・安心な再生可能エネルギーの普及化促進技術システムと、廃棄物のリサイクル・処理技術の効率化と採算性向上を目指した技術システムの研究開発をすることとなっています。寄附分野教員

として、古市客員教授、藤山特任助教が就任し、研究の推進及び大学院生の指導にあたっています。開設式では、古市客員教授、山口総長から挨拶があり、続いて山口総長より寄附会社の代表者に感謝状が贈呈されました。その後、北海道環境生活部環境局長の築地原康志氏より来賓のご挨拶をいただきました。次いで寄附分野の世話役である循環計画システム研究室の石井一英准教授より寄附分野の紹介があった後、各寄附会社の代表者より今後の抱負についてご挨拶がありました。最後に、名和工学研究院長から改めてご寄附をいただいた関係者の皆様に御礼の挨拶がありました。

閉講式及び開設式終了後は、京王プラザホテルにて懇親会が開催され、名和工学研究院長をはじめ学内外の多くの関係者が参加し、今後の寄附分野の発展を祈念しました。

（工学院・工学研究院・工学部）



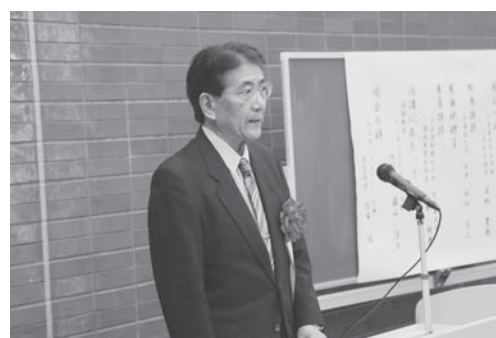
山口総長の挨拶



名和工学研究院長の挨拶



築地原局長の来賓挨拶



古市客員教授の挨拶

消防訓練の実施

薬学研究院・薬学部

薬学研究院・薬学部では、10月15日（木）午後2時30分に、総合研究棟2階学生実習室から出火したとの想定で、消防訓練を実施しました。

当日は通報連絡係、避難誘導係、消火係、応急救護係に加え、教員も避難誘導を担当し、南 雅文薬学研究院長を隊長とした自衛消防隊を組織して訓練が行われました。

今回は所属する学生・教職員の全構

成員が参加する訓練としました。自衛消防隊との連携により、すべての構成員が速やかに避難を完了するなど、訓練参加者の防災意識の高さが確認できました。

訓練は札幌市北消防署の協力を得て、一連の進行状況を確認してもらい、最後に講評をいただきました。全体的には、概ね良好との内容でした。

その後、南研究院長から構成員の防

災意識を啓蒙する挨拶があり、全体での消防訓練は終了しました。

消防訓練終了後は、防災設備業者の指導の下、消火器の使用体験並びに布担架の使用法の指導が行われ、参加者及び見学者からの好評を得る訓練となりました。

（薬学研究院・薬学部）



初期消火活動の様子



消火器の使用訓練



布担架の使用訓練

工学系部局（工学院・工学研究院・工学部、情報科学研究科、量子集積エレクトロニクスセンター）

工学系部局では、10月22日（木）に消防訓練を実施しました。

工学系部局は、国際本部と合同で自衛消防組織を構成しています。今回は火災発生時において取るべき行動を体験し、心構えを再認識することにより、実際の火災が発生した際の被害を最小限に食い止めることを目的に、フロンティア応用科学研究棟からの出火を想定して実施しました。

当日は午前11時30分にフロンティア応用科学研究棟4階から出火したとの想定で、火災報知器発報を受け、出火場所の捜索・確認から、自衛消防隊長の指揮による北消防署への訓練通報、避難誘導、初期消火、防護措置、負傷者の救護という一連の訓練内容で実施しました。

訓練終了後、札幌市北消防署予防課の浅井 稔係長から、「訓練の基本を押さえることが重要だが、その点はよくできていた」との講評がありました。また、名和豊春工学研究院長から

は「自衛消防隊の行動も迅速であったが、皆さんの避難も速やかに行われており、全般によくできていた」との挨拶

がありました。

（工学院・工学研究院・工学部）



防災センターで無線による指示を発する多谷 司事務部長（自衛消防隊長）と消防署への通報や板書記録を行う自衛消防隊通報連絡班



出火場所へ消火器を向ける自衛消防隊初期消火班



訓練終了後に挨拶する名和工学研究院長



水消火器による消火訓練を行う学生

理学研究院

理学研究院では、10月23日（金）に札幌市北消防署の立ち会いのもと、消防訓練を実施しました。

当日は、12時10分に3号館2階の2-01室から出火したとの想定で、石森浩一郎理学研究院長を隊長とする事務部で構成された自衛消防隊による通報連絡、非常放送、初期消火、避難誘導、救護等の総合的な訓練を、教職員・学生約100名が参加し実施しました。

訓練終了後には、石森研究院長から訓練参加者及び協力者への慰労の辞と、日頃からの防災に対する意識を啓

蒙する挨拶があり、続いて北消防署予防課の職員の方から、訓練はよく練られたシナリオに基づいたもので概ね良好であったとの講評をいただいたほ

か、今後も常に防災意識を持って訓練を続けてほしいとの要請がありました。

（理学院・理学研究院・理学部）



初期消火訓練の様子



石森研究院長の挨拶

医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター

医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター合同で10月23日（金）午後2時25分、医学研究科南研究棟3階皮膚科学分野研究室から出火したとの想定で、消防訓練を実施しました。

出火時の初動体制を確立するために、自衛消防班が直ちに活動し、出火場所に対応して各職務分担の任務（通報連絡・避難誘導・消火・防護措置・救護）を行い、被害を最小限に食い止める訓練を実施しました。

終わりには笠原正典医学研究科長から、訓練を通し、火災時の避難や自衛消防の手順について理解を深めることの重要性や日頃の防火に対する心構え

について話があり、参加した約120名の教職員・学生は防災意識を改めて見直す機会となりました。

総合訓練に続いて、消火器を使った消火訓練を防災設備業者指導のもと実

施し、使用方法について理解を深め、一連の消防訓練を無事に終えることができました。

（医学研究科・医学部）



初期消火活動の様子



消火訓練の様子

歯学研究科

歯学研究科では10月29日（木）に消防訓練を実施しました。

今回の訓練は、C棟3階ポリクリ室から出火したとの想定で、自衛消防隊長である横山敦郎歯学研究科長の指揮により、通報連絡班、避難誘導班、消火班、救護班、防護措置班の各担当に分かれ、現場の確認、消防署への通報、非常放送、避難者誘導、消火活動等の訓練を実施し、学生・職員（大学病院職員を含む）等約60名が参加しました。

訓練終了後、横山研究科長から「今回の訓練は順調に実施できた。災害時

にはこの訓練を思い出して行動してほしい」との講評がありました。

（歯学研究科・歯学部）



消火器操作訓練の様子



救助袋を使用した避難訓練

函館キャンパスで「秋のキャンパス一斉清掃」を実施

11月4日（水）に、函館キャンパスにおいて「秋のキャンパス一斉清掃」を実施しました。当日は晴天にも恵まれ、絶好の清掃日和となり、函館キャンパス構内とその周辺の清掃を行うことができ、大変きれいになりました。

参加人数は、学生・教職員及び総合博物館水産分館新営工事の施工業者を合わせて約160名となり、多くの方に参加いただきました。収集されたごみは、一般ごみ、産業廃棄物（金属やプラスチックの混合物）、木の枝等を合わせて約4 m³となりました。

函館キャンパスでは毎年、春と秋に年2回、「キャンパス一斉清掃」を行っており、次回は来年の5月下旬を予定しています。

これからも環境美化活動を推進し、きれいなキャンパスを目指します。

（水産科学院・水産科学研究所・水産学部）



清掃作業を行う学生



協力し合いながらの清掃作業



清掃作業に協力する施工業者の方たち

北海道大学病院指導医ワークショップを開催（医科・歯科）

医科

北海道大学病院卒後臨床研修センターでは、9月26日（土）、10月17日（土）、北海道大学病院会議室棟症例検討室にて、第12回北海道大学病院指導医のための教育ワークショップ（指

導医講習会）を開催し、道内の臨床研修施設から46名の指導医が参加しました。

新医師臨床研修制度が導入された平成16年度以降、研修医を指導する医師

の役割はますます重要になっており、本院では毎年、北海道内の教育病院における指導医の資質向上と、適切な指導体制の確立を目的として、このワークショップを開催しています。



参加者全員での集合写真



真剣にグループワークを行う参加者

今年度は学外より宮田靖志先生（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター）、安井浩樹先生（名古屋大学）、川口篤也先生（公益社団法人北海道勤労者医療協会勤医協中央病院）、岸田直樹先生（一般社団法人Sapporo Medical Academy）を講師として招聘し、6名の学内講師及び13名のタスクフォース（世話人）の協力を得て開催しました。

本ワークショップは10のトピックスに焦点を当てたセッションに分かれており、各セッションでは「研修医のメンタルヘルス」「プロフェッショナルリズム」等をテーマとした講義の後、グループ討論・ロールプレイ・全体発表等を通して、参加者同士が互いに学び合い考えを深めました。

全日程終了後、平野 聡卒後臨床研修センター長より、参加者代表として

医学教育推進センターの小野澤真弘先生へ修了証が手渡されました。

計16時間にわたる濃厚な講習会を修了した参加者からは「普段意識していなかった指導方法・評価について見つめ直す機会となった」「従来考えていた指導・教育のイメージとは異なる考え方や手法の必要性がわかり学ぶことができた」等の感想が寄せられ、実りある講習会となりました。

歯科

10月31日（土）・11月1日（日）の日程で、第6回指導歯科医講習会を開催しました。本講習会は研修医の指導にあたる中堅・ベテラン層の歯科医師を対象に、指導的資質の向上を目的として、小グループでのワークショップを行いました。院内から11名、院外から21名の歯科医師が参加しました。

本学の研修プログラムをサンプルに、現状の歯科臨床研修の問題は何か、どのようにその問題を解決していくか、より洗練された解決案の策定を

テーマにワークショップを行いました。同じ歯科診療を行う人間がグループを作っているにも関わらず、道内外の様々な地域から、病院勤務医・開業医など異なったバックグラウンドを持った歯科医師が集まっているため、議論も多角的なものになりました。2日間連続・計16時間というハードな日程でしたが、大学関係者は教育やその業績評価等に目を向け、開業医が経営的な視点から鋭い指摘を行うなど、終始活発なディスカッションが行われ、真

剣ながらも楽しそうな雰囲気で行われました。

全プログラムの修了後には、井上 哲 歯科卒後臨床研修部門長より、参加者代表の山本大輔氏（神奈川県）に修了証の授与が行われました。修了後の参加者からは、「今後の臨床教育の場でこの経験を活かしていきたい」等の意見が寄せられ、有意義な講習会となりました。

（北海道大学病院）



歯学部玄関前での集合写真



グループワークでの一幕



プレゼンテーションの様子



修了証の授与

平成27年度北海道地区大学図書館職員 フレッシュ・パーソン・セミナーを開催

9月17日（木）・18日（金）の2日間、平成27年度北海道地区大学図書館職員フレッシュ・パーソン・セミナーが附属図書館大会議室において開催され、道内の国公私立大学図書館職員22名が参加しました。

このセミナーは、北海道地区の大学図書館に新規に採用・配属された図書館職員に対し、大学図書館の現状と課題、及び業務遂行に必要な基礎的知識の習得を目的とする研修を行うと共に、同世代職員との情報交換・交流の機会を設けることにより、人的ネットワークの形成を促し、地区内の図書館の活性化と若手職員の育成に資することを目的として、国立大学図書館協会北海道地区協会と北海道地区大学図書館協議会の共催により隔年で開催しているものです。今回は2回目の開催となります。

初日は、富田健市事務部長による講義「大学図書館を取り巻く環境」のほか、酪農学園大学附属図書館の頭川恵子事務課長による資料収集と管理に関する講義、札幌医科大学附属総合情報センターの今野 穂主任司書による研究支援と情報発信に関する講義が行われました。次いで、所属大学図書館を3分間で紹介することをテーマとした

プレゼンテーション実習が行われました。

2日目は、小樽商科大学附属図書館の結城憲司学術情報課長による大学図書館の社会貢献に関する講義、野中雄司学習支援担当係長による学習支援の講義の後、NPO法人大学図書館支援機構の高野真理子氏による「学習支援とインストラクショナルデザイン：アクティブラーニングの技法」の講義を踏まえて、参加者がグループに分かれて学習支援を企画し、発表する「グループ討議」が行われました。

全てのプログラム終了後、富田事務部長から参加者に修了証書が交付され、セミナーは終了となりましたが、参加者からは「全体的なスキルを身につける為の大変良いセミナーを受けることができた」「自分の考えや他の人の考えを短時間でまとめることの難しさや楽しさを改めて知ることができた」「グループ演習は難しかったが、非常に勉強になった」「他館の活動を知ることによって今後の実務につなげたい」等の感想が多く寄せられ、大変有意義なセミナーとなりました。

（附属図書館）



講義の様子



グループ討議の様子



グループ討議・発表の様子

故高嶋英雄氏撮影写真等の資料を大学文書館で受贈

10月23日（金）及び30日（金）に、大学文書館では、高橋英樹総合博物館教授のご仲介を得て、故高嶋英雄氏（1930-2015年）が撮影された写真等の資料を、ご夫人の栄子氏からご寄贈いただきました。

高嶋英雄氏は、1948（昭和23）年北海道大学医学部附属病院に職員として就職されました。1959（昭和34）年の附属病院中央検査室（後の検査部）フォトセンターの設置と共にその技術員となり、1963（昭和38）年にはフォトセンター技官に昇任し、1991（平成3）年に退職されるまで勤められました。附属病院検査部フォトセンターは、医療や医学研究・教育に関わる

写真撮影や資料画像作成を行う部署です。

また、高嶋氏は風景写真の撮影を趣味とされ、特に本学構内の写真を撮り続け、退職後も頻繁にキャンパスを訪れて撮影をされていました。本学が創基100周年を記念して刊行した『写真集 北大百年』（1976年）を編纂する際にも、構内の現況写真撮影に協力されたほか、1991年には『写真集 北大の四季』（北海道大学図書刊行会）を出版されました。また、絵ハガキや大学刊行物にも写真を提供されています。

今回、ご寄贈いただいた写真資料は、ほとんどがマウント付きカラーポ

ジ写真を一定数まとめて専用ケースに収納する形で整理されており、各専用ケースには「北大の自然」、「エルムの学園」などの撮影テーマを表題として付してあります。専用ケースの数は約200冊に及びます。1970年半ば以降の大学構内の風景写真が多くを占めますが、他に旅行先の風景写真や、エキノコックスに関する資料写真などもあります。

今後は、大学文書館において大切に保管し、展示や刊行物掲載などの利用を通じて、広く写真を紹介してまいります。

（大学文書館）



原生林内のエンレイソウ



モデルバーン



第一農場

北海道大学サマーインスティテュート・トライアル 「課題解決の手法を学ぶ2+2日間 (part2)」を開催



欧州、アフリカ、札幌、沖縄など多様な参加者

平成27年度北海道大学サマーインスティテュート・トライアル「課題解決の手法を学ぶ2+2日間」(担当教員参加部局:理学研究院, 農学研究院, 先端生命科学研究院, 保健科学研究院, 高等教育推進機構)は2部から構成され, 8月22・23日にPart1:解決すべき課題の芯をつかむ(ケーススタディーとリサーチ演習)を実施しましたが, 今回, Part2:課題解決のデザイン・サービスデザイン・ワークショップを10月10日(土)・11日(日)に高等教育推進機構S棟1階で開催し, 21名(学内教員・学生17名, 学外4名)が参加しました。

本ワークショップでは大学間交流協定校であるフィンランド・ラップランド大学サービスデザイン大学院の研究者2名(Essi Kuure, Hanna-Riina Vuontisjärvi)に講師として来日いただき, 様々な課題解決手法の中でも特に欧州で開発され, 日本でも最近各方面で注目されているサービスデザインの手法を学ぶワークショップを企画し

ました。サービスデザインとは, デザイン思考を使い(デザインはアート作品など限定的なプロダクトというイメージがありますが, ここでは「インタangible」な社会・分野の課題やプロセスの解決も含まれ, より良い方向へ導く価値のある・効果的な思考法), 目に見えないサービスを利用者の立場に立って可視化し, 問題を洗い出し, 課題解決の方法を具体化していく手法です。今回のワークショップでは世界的イベントであるTokyo Olympic 2020を題材とし, 私たちにとって良いイベントに育てていけるか, また東京五輪を楽しむために札幌人ができる地方在住者の参加のあり方について, サービスデザインの実践をわかりやすく学ぶことができました。

「北海道大学近未来戦略150」にあるように, 知の拠点である大学は, 「イノベーションを創出し, 社会の改革と世界の課題解決を主導する人材」を育成することによって, この国と世界の持続的発展に貢献しなければなり

ません。ワークショップ参加者からは, 「本学が目指す人材育成の手法にサービスデザイン思考が学際領域や産業社会・地域コミュニティの研究にどのように活用できるか今後も試行したい」「大学の理系・文系の基礎教育や新渡戸スクールなど学際領域を能動的に学ばせる教育技法として, このアクティブラーニングを取り入れたい」という感想も寄せられました。

今回ラップランド大学講師によるサービスデザインの講演は複数実施され, 滞在中に, 学内外から延べ100名余に参加いただきました。来年度はラップランド大学によるサービスデザインを, 大学院共通授業科目として開講することを計画しています。

なお, 今回のワークショップの様子は, 理学研究院アクティブラーニング推進室ホームページにも掲載します。

◆<http://www.sci.hokudai.ac.jp/active-learning/>

(生命科学院・先端生命科学研究院)



ラップランド大学から来日した講師



サービスデザインのプロセスの一場面

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成27年10月9日）

- 議案・平成27年度部局評価に基づく資源の再配分事業について
- ・主要取引銀行等の選定について
- 協議事項・「大学教員任期法等の改正に伴う対応」の一部改正について
- ・部局長以外の教育研究組織の長について
 - ・資金運用利息の取扱いについて
 - ・諸規則の一部改正について
 - ・就業規則関連規程の制定及び一部改正について
- 報告事項・北海道大学ホームカミングデー2015の実施報告について
- ・ディスティングイッシュトプロフェッサーの称号付与について
-

教育研究評議会（平成27年10月20日）

- 議題・「大学教員任期法等の改正に伴う対応」の一部改正について
- ・部局長以外の教育研究組織の長について
 - ・年俸制教員に係る業績評価について
 - ・北大発ベンチャー認定制度について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・全学運用教員の措置について
- ・北海道大学ホームカミングデー2015の実施報告について
 - ・大学間交流協定の新規締結について
 - ・サステナビリティ・ウィーク2015への協力依頼について
 - ・ディスティングイッシュトプロフェッサーの称号付与について
 - ・第17回九大・北大合同フロンティア・セミナーについて
 - ・平成27年度運営費交付金の追加配分について
 - ・平成26事業年度財務諸表の承認について
 - ・「女性研究者研究活動支援事業（拠点型）」シンポジウムについて
 - ・学生の懲戒について
-

役員会（平成27年10月26日）

- 議案・年俸制教員に係る業績評価について
- ・北大発ベンチャー認定制度について
 - ・「大学教員任期法等の改正に伴う対応」の一部改正について
 - ・部局長以外の教育研究組織の長について
 - ・資金運用利息の取扱いについて
 - ・諸規則の一部改正について
 - ・就業規則関連規程の制定及び一部改正について
- 報告事項・平成27年度北海道大学進学相談会の開催結果について
- ・共同利用・共同研究拠点の認定結果等について
 - ・超過勤務実績について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

北海道大学社会科学実験研究センター規程の一部を改正する規程

(平成27年10月9日海大達第256号)

センターの兼務教員の要件を改めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学教育研究組織の長の任命等に関する規程の一部を改正する規程

(平成27年10月30日海大達第257号)

部局長以外の教育研究組織の長の任命要件を改めることに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学役職員倫理規程の一部を改正する規程

(平成27年10月30日海大達第258号)

平成27年1月1日付けで教員の年俸制が導入されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学年俸制教員の業績評価の実施に関する規程

(平成27年10月30日海大達第259号)

平成27年11月1日付けで、年俸制の適用を受ける教員を対象とした業績評価制度を導入することに伴い、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学宿舍貸与規程の一部を改正する規程

(平成27年10月30日海大達第260号)

平成27年4月1日付けで研究戦略企画及び研究推進支援業務を職務とするURR職が創設されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学国際本部規程の一部を改正する規程

(平成27年11月1日海大達第261号)

平成27年11月1日付けで、国際本部にグローバルリレーション室を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における北大発ベンチャー称号授与規程

(平成27年11月1日海大達第262号)

本学の研究成果又は人的資源を活用した企業に対し、北大発ベンチャーの称号を授与する制度を設けることに伴い、所要の定めを行ったものです。

国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程

(平成27年11月1日海大達第263号)

国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程

(平成27年11月1日海大達第264号)

1年単位の変形労働時間制を新設することに伴い、所要の改正を行ったものです。

■表敬訪問

国内

年月日	来訪者
27.11.10	株式会社日本政策投資銀行 代表取締役社長 柳 正憲 氏, 代表取締役副社長 渡辺 一 氏



株式会社日本政策投資銀行
代表取締役社長 柳 正憲 氏 (右側),
代表取締役副社長 渡辺 一 氏 (左側)

(総務企画部広報課)

海外

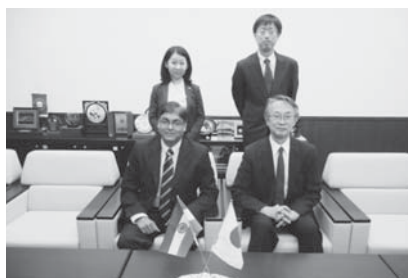
年月日	来訪者	来訪目的
27.10.7	カントー大学 (ベトナム) Le Viet Dung 副学長	両大学の交流に関する懇談
27.10.19	全北大学校 (韓国) Kwang Won Lee 歯医学専門大学院長	歯学研究科との協定調印式等
27.10.23	駐日インド大使館 Amit Kumar 主席公使	両国の交流に関する懇談
27.10.27	四川大学 (中国) Yan Shijing 副学長	両大学の交流に関する懇談



カントー大学 (ベトナム)
Le Viet Dung 副学長 (前列左)



全北大学校 (韓国)
Kwang Won Lee 歯医学専門大学院長 (前列左から2人目)



駐日インド大使館
Amit Kumar 主席公使 (前列左)



四川大学 (中国)
Yan Shijing 副学長 (前列左)

(国際本部国際連携課)

■ 人事

平成27年10月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 国際連携研究教育局助教	MARTINELLI AXEL	採用

平成27年10月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (辞職)	井 川 恵 介	北海道大学病院薬剤部薬剤師

平成27年11月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【部局長・施設長等】 遺伝子病制御研究所附属動物実験施設長 (期間：平成29年10月31日まで)	清 野 研一郎	遺伝子病制御研究所教授
【教授】 (転出) 熊本大学大学院生命科学研究部教授	押 海 裕 之	国際連携研究教育局・人獣共通感染症リサーチセンター准教授
【准教授】 大学院薬学研究院准教授 大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター准教授	小 林 正 紀 能 村 貴 宏	大学院薬学研究院講師 採用
【助教】 大学院獣医学研究科助教 大学院理学研究院助教 大学院先端生命科学研究院助教 遺伝子病制御研究所助教 国際連携研究教育局助教	青 島 圭 佑 劉 成 偉 KING DANIEL RUDOLF 丸 山 剛 崔 一	採用 採用 採用 採用 採用
【技術職員等】 北海道大学病院薬剤部薬剤師 北海道大学病院看護部看護師	巽 道 代 岡 香 澄	採用 採用

訃報

名誉教授 やすだ ひさかず 安田 壽一 氏
(享年87歳)



名誉教授 安田壽一先生は、平成27年7月24日安らかに享年87歳の生涯を閉じられました。

安田先生は、昭和2年東京のお生まれで、同27年に東京大学医学部医学科を卒業され、同大学医学部第二内科に入局されました。昭和35年から約2年間米国オハイオ州クリーブランドクリニック研究所に留学され、高血圧の成因に関する研究に取り組みました。昭和46年には東京大学医学部第二内科の助教授に昇任されました。北海道大学大学院循環病態内科学（当時は北海

道大学循環器内科）は、国立大学で最初の循環器病学を専門とする内科学講座として昭和48年4月に設置が認められ発足しましたが、その初代教授として安田先生が任命され、ご就任になりました。当初、第一内科、第二内科、第三内科、薬理学教室より十数名が集まり活動が開始され、翌昭和49年からは外来・病棟における循環器診療が開始されました。全くのゼロからのスタートであり、大変なご苦労をされたことと拝察します。北海道大学に留まらず北海道における循環器診療の礎を築かれたのは安田先生であることは間違いありません。先生は心血管造影装置をはじめ各種診断装置の導入や診療体制の充実を図りながら、一方で精力的に臨床研究と基礎研究に取り組みました。難治性心不全に対する血管拡張薬や利尿薬による減負荷療法に関する研究を、第5回世界心臓学会のシンポジウム「心不全の予防と管理」において「利尿薬による近代的心不全治

療」として報告されました。また、昭和54年から文部科学省特定研究「心臓機能不全の機序」の研究班の班長をお務めになりました。さらに、昭和62年には厚生省特定疾患「特発性心筋症調査研究班」の班長に就任され、それ以降現在に至るまで心筋症に関する研究が講座の中心的な研究課題となりました。平成元年に行われた第11回日本臨床薬理学会学術集會では会長を務められ、約1,400名の参加者を集めました。若手医師の教育・指導にも熱心に当たられ、平成3年までの19年の在任期間で、医局員数は111名、同門会員も53名にも上り、教室を大きく発展されました。

安田先生が北海道大学の発展のために尽くされたご努力に改めて感謝するとともに、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(医学研究科・医学部)

名誉教授 なんぶ さとる 南部 悟 氏
(享年86歳)



名誉教授 南部 悟氏は平成27年10月3日、膵癌のため86歳で逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和3年12月18日札幌市に生まれ、同28年3月北海道大学農学部農業物理学科を卒業し、同33年3月北海道大学大学院研究奨学生修了後、同年4月農学部助手となり、同39年4月同助教授に昇任されました。昭和45年

4月帯広畜産大学教授に転任、同55年4月北海道大学農学部教授に任ぜられ、農業工学科農業機械学講座を担当し、教育・研究に従事されました。平成4年3月北海道大学を停年退職、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

同氏の活動範囲は農業機械学を中心に極めて多岐に亘っており、なかでも昭和30年代後半から始められた土層改良用機械（石礫除去）の開発研究は、各地の多様な土壌・作物条件に適合する作土層確保に寄与するものとして高く評価され、その成果は、昭和59年に策定された農林水産省「土地改良事業計画設計基準（土層改良）」等多くの行政施策に活用されています。

国際貢献にも積極的に取り組み、昭和40年代後半からは海外の職業・技術教育プロジェクトに参画し、イランな

どの農業技術に関わる人材育成に尽力され、平成3年にはそれらの功績により国際協力事業団国際協力功労者表彰を受賞されました。

退職後も、教育・研究の意欲は衰えず、平成6年にはインドネシア国立農科大学農業工学部客員教授に就任されました。また、多くの要職を歴任する傍ら、平成18年には研究論文「農用トラクタの開発と工業デザイナーによる機能的形状（北海道の農業機械46）」を執筆されるなど、晩年まで学術の発展に貢献されました。

同氏の永きにわたる後進の啓発と斯界の発展に尽くした功績は誠に大きく、ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

(農学院・農学研究院・農学部)

名誉教授 ふかせ ただかず 深瀬 忠一 氏
(享年88歳)



名誉教授 深瀬忠一先生は、平成27年10月5日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和2年3月1日に高知県で生まれ、同28年3月に東京大学法学部法律学科を卒業、同年6月に北海道大学法経学部助手に任命されました。その後、昭和31年4月法学部助教授、

同39年2月法学部教授に昇任され、平成2年3月に定年退官されました。この間、先生は、専門教育課程の憲法第1部、第2部、一般教育課程の日本国憲法、法学、総合講義（「平和の学際的研究」）を担当され、法学教育の充実に努められました。また、学内では学部内外の諸委員を務められたほか、昭和53年12月から同55年12月まで法学部長・法学研究科長を務められ、大学行政の運営に貢献されました。北海道大学を定年退官後は、平成9年3月まで北星学園大学で教鞭を執られました。

深瀬先生の専攻は憲法学ですが、その主要な研究業績は次の3つの分野に分けることができます。まず第1の分野は、博士論文となった「衆議院の解散」に代表される議会政の比較憲法史的研究とそれを踏まえた日本の議会制

度・立法過程に関する理論的・実証的研究です。第2の分野は、パリ大学等への留学とその後の客員教授の経験に基づいた詳細な日仏比較憲法研究です。そして第3の分野は、「平和的生存権論」と「立憲民主平和主義論」に代表される憲法の平和主義に関する思想的・理論的研究です。なお、先生の研究活動について特筆すべきこととして、熱心に取り組みされた国際的な学術交流があります。その功績により、昭和56年にポワチエ大学から名誉博士号、同58年にはフランス政府から文化功労賞を授与されています。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(法学研究科・法学部)

名誉教授 ながおか しんきち 長岡 新吉 氏
(享年86歳)



名誉教授 長岡新吉氏は、平成27年11月1日にご逝去されました。ここに、同氏の生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和5年4月19日、岩手県盛岡市に生まれ、同28年3月東京大学経済学部卒業、同33年3月東京大学大学院社会科学部理論経済学・経済史学専攻博士課程単位取得退学、弘前大学文理学部講師、同助教授を経て、同38年4月北海道大学経済学部初代学部長山口和雄教授の後任（日本経済史担当）助教授として着任、同45年教授に昇進されました。爾来、平成6年3月の退官まで、30年にわたり経済学部・経済学研究科において日本経済史

の研究と教育に携わり、数多くの優れた卒業生を社会に送り出し、大学院門下から優秀な研究者を輩出されました。この間、評議員（2期4年）、経済学部長・経済学研究科長など種々の要職を歴任され、本学の発展のために尽くされました。こうした同氏の研究・教育・大学運営への功労を称えて、平成21年春の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。

同氏は本学において、農学校以来集積されてきた膨大な稀覯史料を駆使し日本資本主義確立期の研究に取り組み、その成果は『明治恐慌史序説』（東京大学出版会、1971年）として纏められ、これによって東京大学経済学研究科より経済学博士の学位を授与されました。その後、研究領域は日本経済史の境界を超え、日本の近代化や日本資本主義成立に関する理論的・歴史的分析の枠組みに関する日本資本主義論争そのものへと広がり、『日本資本主義論争の群像』（ミネルヴァ書房1984年）として上梓され、極めて高い評価を受け続けています。また、旧日本帝国の植民地・中国占領地のみならず、

新しいヨーロッパ経済史の研究成果をも取り入れた東アジア経済史研究に挑戦され、『世界経済史入門－欧米とアジア』（共編著、ミネルヴァ書房、1992年）を土台に『日本経済と東アジア－戦時と戦後の経済史－』（ミネルヴァ書房、1995年）として結実しました。

同氏は、その学識のみならず包容力とお人柄をもって、良き指導者として常に本学のみならず北海道全体の多くの後進の研究者育成に尽力され、本学退官後も北海学園大学経済学部教授として後進を支えてこられました。また、学会でも、昭和52年1月から平成9年12月に亘り、社会経済史学会理事として重要な役割を果たされ、わが国の社会経済史学の全国的リーダーの一人として大きな足跡を残されました。

同氏の長年にわたるご貢献に改めて感謝し、ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(経済学研究科・経済学部)

資料

役 職 員 数

平成27年10月1日現在

部 局 等	職 種	総 長	理 事	監 事	小 計	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手	小 計	URA職	専門職	事務職員	技術職員	合 計
役 員		1人	7人	2人	10人											10人
監査室															7	7
事務局	総務企画部														74	74
	財務部														79	79
	学務部														66	66
	研究推進部														31	1 32
	施設部														8	25 33
附属図書館														90		90
文学研究科・文学部						53	38		9		100	3		16		119
法学研究科・法学部						34	14	4	12	3	67		2	21		90
経済学研究科・経済学部						22	18		4		44		2	8		54
医学研究科・医学部						40	29	20	64	3	156					12 168
医学系事務部														44	2	46
歯学研究科・歯学部						19	15	4	49		87			10	5	102
獣医学研究科・獣医学部						17	15	5	14		51			14	3	68
情報科学研究科						39	34		20		93					93
水産科学院・水産科学研究院・水産学部						29	37	1	14		81				40	121
函館キャンパス事務部														23	4	27
環境科学院・地球環境科学研究院						20	27		6	1	54					54
環境科学事務部														11		11
理学院・理学研究院・理学部						72	73	8	48	2	203		2		19	224
理学・生命科学事務部														42	2	44
薬学研究院・薬学部						16	8	7	25		56				3	59
薬学事務部														10		10
農学院・農学研究科・農学部						46	40	26	14		126				11	137
農学事務部														25	2	27
生命科学院・先端生命科学研究院						11	6	2	10		29					29
教育学院・教育学研究院・教育学部						15	24		4	1	44					44
教育学事務部														7		7
国際広報メディア・観光学院・メディア・コミュニケーション研究院						25	24		3		52					52
メディア・観光学事務部														10		10
保健科学院・保健科学研究院						28	13	7	29		77					77
工学院・工学研究院・工学部						97	94	2	87	1	281				51	332
工学系事務部														66	3	69
総合化学院																
公共政策学教育部・公共政策学連携研究部						12	6	3			21					21
北海道大学病院						4	19	54	80		157			117	664	938
低温科学研究所						14	12	1	21		48			8	9	65
電子科学研究所						14	14		18		46				10	56
遺伝子病制御研究所						8	4	4	14		30				7	37
触媒科学研究所						9	8		6		23				6	29
スラブ・ユーラシア研究センター						8	4		2	1	15					15
情報基盤センター						7	4		3		14					14
人獣共通感染症リサーチセンター						6	5	2	4		17				2	19
アイソトープ総合センター						1		1	1		3				2	5
量子集積エレクトロニクス研究センター						3	3				6					6
北方生物圏フィールド科学センター						16	16		11		43			18	72	133
観光学高等研究センター						3	1		4		4					4
アイヌ・先住民研究センター						1	6				7					7
社会科学実験研究センター									1		1					1
環境健康科学研究教育センター							1				1					1
北極域研究センター						1					1					1
脳科学研究教育センター																
外国語教育センター																
サステイナビリティ学教育研究センター							1				1					1
総合博物館						2	3	2	2		9					9
大学図書館							1				1				1	2
保健センター						1		2			3				9	12
埋蔵文化財調査センター									2		2					2
国際連携研究教育局						5 (12)	(9)	(2)	3		8					8
技術支援本部																
情報環境推進本部													1	13	13	27
アドミッションセンター																
人材育成本部																
創成研究機構							1		1		2		1		8	11
国際本部						5	11	5			21		4	34		59
高等教育推進機構						3	7				10				4	14
サステイナブルキャンパス推進本部																
安全衛生本部						1	1				2		1			3
大学力強化推進本部												9				9
産学・地域協働推進機構													7			7
総合IR室																
北キャンパス合同事務部														14		14
合 計		1	7	2	10	707	637	160	581	12	2,097	12	20	866	990	3,995

※国際連携研究教育局の教職員数の()内は、北海道大学ユニットの本務者数で内数。当該教職員は、原籍組織の教職員数に計上。
 (医学研究科：2名、獣医学研究科：3名、農学研究院：2名、保健科学研究院：1名、工学研究院：2名、北海道大学病院：2名、人獣共通感染症リサーチセンター：11名)

(総務企画部人事課)

在籍学生数（平成27年10月1日現在）

- (注) 1 () 内は女子の内数, < > 内は女子の比率。
 2 [] 内は2年次編入学定員で外数。
 3 [] 内は3年次編入学定員で外数（工学部は高専卒業者の受入れ）。
 4 以下の表は、すべて外国人留学生数を含む。

■学部

学部等名	入学定員	在籍者数							聴講生	科目等履修生	研究生	特別聴講学生	合計
		1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計					
文学部	185人 [人]	人	187人	199人	247人	一人	一人	633人 (304(48.0%))	6人	13人	42人	84人	778人 (402(51.7%))
教育学部	50 [10]		54	67	68	—	—	189 (91(48.1))	2	11	22	3	227 (115(50.7))
法学部	200 [10][10]		218	219	241	—	—	678 (227(33.5))	5	3		12	698 (238(34.1))
経済学部	190		194	199	238	—	—	631 (159(25.2))			24	10	665 (185(27.8))
理学部	300		313	310	353	—	—	976 (236(24.2))		2	1	12	991 (240(24.2))
医学部	287 [5][20]		306	312	327	106	107	1,158 (515(44.5))				4	1,162 (516(44.4))
歯学部	53		60	47	58	40	56	261 (100(38.3))			2		263 (100(38.0))
薬学部	80		83	80	90	30	30	313 (125(39.9))		4			317 (125(39.4))
工学部	670 [10]		708	723	858	—	—	2,289 (319(13.9))	2			40	2,331 (327(14.0))
農学部	215		227	231	245	—	—	703 (248(35.3))	1	2		10	716 (256(35.8))
獣医学部	40		41	46	39	41	43	210 (83(39.5))				20	230 (99(43.0))
水産学部	215		249	207	206	—	—	662 (164(24.8))			5	9	676 (174(25.7))
総合教育部	—	2,667	—	—	—	—	—	2,667 (785(29.4))				67	2,734 (825(30.2))
合計	2,485 [15][50]	2,667	2,640	2,640	2,970	217	236	11,370 (3,356(29.5))	16	35	96	271	11,788 (3,602(30.6))

※学部の入学定員は、学生が第2年次に進級した場合の入学定員である。

■研究所等

研究所等名	研究生	特別研究学生	日本語・日本文化 研修生	日本語研修生	合計
低温科学研究所	2人	人	一人	一人	2人(2(100.0%))
電子科学研究所	3		—	—	3(1(33.3))
遺伝子病制御研究所	1		—	—	1(0(0.0))
触媒科学研究所	2		—	—	2(1(50.0))
スラブ・ユーラシア研究センター	1		—	—	1(0(0.0))
情報基盤センター	1		—	—	1(0(0.0))
国際本部	3		52	29	84(62(73.8))
高等教育推進機構	1		—	—	1(0(0.0))
総合博物館	1		—	—	1(1(100.0))
北方生物圏フィールド科学センター	2		—	—	2(2(100.0))
観光学高等研究センター	2		—	—	2(1(50.0))
合計	19	0	52	29	100(70(70.0))

(注) 法学研究科の専門職学位課程の上段は3年課程、下段は2年課程の学生数。

また、生命科学学院の博士課程の上段は3年制博士後期課程、下段は4年制博士課程の学生数。

■大学院

研究科等名	修士課程 (博士前期)				専門職学位課程				博士課程 (博士後期及び博士一貫)					聴講生	科目等履修生	研究生	特別聴講学生	特別研究学生	合計		
	入学定員	在籍者数			入学定員	在籍者数			入学定員	在籍者数											
		1年次	2年次	小計		1年次	2年次	3年次		小計	1年次	2年次	3年次							4年次	小計
文学研究科	90人	81人	114人	195人 (97(49.7%))	—	—	—	—	—	35人	27人	31人	130人	—	188人 (98(52.1%))	2人	3人	13人	18人	4人	423人 (221(52.2%))
法学研究科	20	14	21	35 (13(37.1))	50	23	14	22	121 (27(22.3))	15	9	7	31	—	47 (15(31.9))		2	11	10	3	229 (70(30.6))
経済学研究科	30	36	35	71 (35(49.3))	20	13	16	—	29 (5(17.2))	15	2	8	11	—	21 (8(38.1))		1	1	1	1	125 (51(40.8))
医学研究科	30	16	25	41 (23(56.1))	—	—	—	—	—	100	90	89	89	157	425 (104(24.5))	2		8		3	479 (131(27.3))
歯学研究科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	42	35	34	24	37	130 (49(37.7))			12			142 (52(36.6))
獣医学研究科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	24	20	30	22	20	92 (40(43.5))			4		1	97 (43(44.3))
情報科学研究科	177	186	200	386 (35(9.1))	—	—	—	—	—	42	28	48	71	—	147 (19(12.9))			16	3	3	555 (57(10.3))
水産科学院	90	97	114	211 (61(28.9))	—	—	—	—	—	35	15	16	28	—	59 (15(25.4))				4	3	277 (81(29.2))
水産科学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			7			7 (1(0.0))
環境科学院	159	165	145	310 (111(35.8))	—	—	—	—	—	63	48	35	86	—	169 (60(35.5))				7	3	489 (179(36.6))
地球環境科学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			34			34 (22(64.7))
理学院	129	127	153	280 (45(16.1))	—	—	—	—	—	56	49	37	54	—	140 (27(19.3))					1	421 (72(17.1))
理学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			10			10 (1(10.0))
薬学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—						0 (0(0.0))
農学院	150	159	175	334 (113(33.8))	—	—	—	—	—	50	45	43	66	—	154 (47(30.5))				6		494 (162(32.8))
農学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			15			15 (6(40.0))
生命科学学院	132	135	115	250 (75(30.0))	—	—	—	—	—	46	37	39	54	—	152 (44(28.9))					4	406 (123(30.3))
先端生命科学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	7	6	4	5	—						1 (0(0.0))
教育学院	45	43	68	111 (70(63.1))	—	—	—	—	—	21	14	10	60	—	84 (40(47.6))				2	1	198 (112(56.6))
教育学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			6			6 (4(66.7))
国際広報メディア・観光学院	42	47	57	104 (72(69.2))	—	—	—	—	—	17	13	11	51	—	75 (40(53.3))						179 (112(62.6))
メディア・コミュニケーション研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			24			24 (21(87.5))
保健科学院	26	57	43	100 (48(48.0))	—	—	—	—	—	8	12	10	18	—	40 (19(47.5))					1	141 (68(48.2))
保健科学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			8			8 (5(62.5))
工学院	326	360	341	701 (93(13.3))	—	—	—	—	—	69	45	48	69	—	162 (22(13.6))				20	7	890 (125(14.0))
工学研究所	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			28			28 (4(14.3))
工学研究科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	8 (1(12.5))						8 (1(12.5))
総合化学院	129	154	154	308 (55(17.9))	—	—	—	—	—	38	44	48	60	—	152 (39(25.7))					2	462 (95(20.6))
公共政策学教育部	—	—	—	—	30	41	29	—	70 (24(34.3))	—	—	—	—	—	—		4				74 (24(32.4))
公共政策学連携研究部	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			7			7 (5(71.4))
合計	1,575	1,677	1,760	3,437 (946(27.5))	100	110	88	22	220 (56(25.5))	680	540	550	936	219	2,245 (687(30.6))	4	10	205	71	37	6,229 (1,848(29.7))

(学務部学務企画課)

広 報 誌 等 一 覧

平成27年10月調査

部 局 名	広 報 誌 等 名	発行回数	最 新 版 発行年月	掲 載 内 容 等
企画課	北海道大学近未来戦略150	不定期	H26年4月	北海道大学創基150年に向けた近未来戦略
	北海道大学近未来戦略150（英語・日本語併記版）	不定期	H26年8月	北海道大学創基150年に向けた近未来戦略
広報課	北海道大学読本	不定期	H26年11月	「北大を知るならまずここから」をコンセプトに、本学をコンパクトにわかりやすく紹介
	ビジュアルブック	不定期	H27年3月	色彩豊かで伝統と趣のあるキャンパス風景を四季ごとに紹介
	北海道大学概要	年1回	H27年度版	本学の沿革、組織、職員数等、大学の概要を掲載
	北海道大学職員録	年1回	H27年度版	職員の所属や内線電話番号を掲載
	リテラポプリ	年2回	H27年3月	北海道大学の新たなプロジェクトや変革、教育研究、及び緑豊かなキャンパス等を紹介
	北大時報	月1回	H27年10月	その月の大学や部局のニュース、お知らせ等を掲載
	キャンパスガイドマップ	不定期	H27年4月	札幌キャンパスのマップと主な施設等を紹介
主計課財務管理室	財務レポート	年1回	H27年10月	財務諸表では伝わりにくい財務情報をわかりやすく分析し、併せて本学の活動のうち特徴的なものを財務情報を交えて紹介
	財務レポート（リーフレット版）	年1回	H27年10月	財務レポートの簡略版として、携帯や配布がしやすいようにリーフレット版としたもの
学務企画課	平成27年度大学院理工系専門基礎科目・大学院共通授業科目 履修案内	年1回	H27年3月	大学院理工系専門基礎科目と大学院共通授業科目の授業内容と時間割
教育推進課	北海道大学全学教育科目実施の手引（教職員用）	年1回	H27年4月	教職員向けに全学教育科目実施のための関係資料を掲載
	北海道大学全学教育科目実施の手引（非常勤講師の方々へ）	年1回	H27年4月	上記手引の別冊、非常勤講師の発令や授業実施関係等を掲載
	北海道大学の全学教育－コアカリキュラムと基礎科目からのメッセージ	不定期	H27年4月	北海道大学の教養教育の内容について、コアカリキュラムを中心に解説（日本語）
	総合教育部便覧	年1回	H27年4月	1年次学生に対する履修方法の周知及び学生生活全般の案内
	総合教育部シラバス（第1学期・第2学期）	年2回	H27年9月	全学教育科目の講義内容・評価方法等の案内
	新渡戸カレッジ履修の手引き	年1回	H26年3月	新渡戸カレッジ生に対する学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	新渡戸カレッジパンフレット	年1回	H26年3月	新渡戸カレッジの概要を掲載
	新渡戸カレッジフェローパンフレット	不定期	H26年3月	新渡戸カレッジフェロー制度の概要を掲載
学生支援課	新渡戸カレッジパンフレット（企業向け）	不定期	H27年9月	新渡戸カレッジの概要を掲載
	えるむ	年3回	H27年8月	学生向けに学内行事・ニュース・お知らせ等を掲載
	北大元気プロジェクト実施報告書	年1回	H27年4月	北大元気プロジェクトの活動報告を掲載
	学生生活の案内	年1回	H27年4月	学部学生向けの学生生活案内
	学生相談室 広報用カード	不定期	H27年3月	学生相談室の概要
	特別修学支援室リーフレット	不定期	H27年7月	特別修学支援室の概要
	とって北大生	4年に1回	H26年8月	学生生活実態調査の結果を元に北大生の学生生活を紹介
	北海道大学学生寮入寮案内－恵迪寮－	年1回	H27年1月	学生寮（恵迪寮）の概要・入寮出願手続き等を掲載
北海道大学学生寮入寮案内－霜星寮－	年1回	H27年1月	学生寮（霜星寮）の概要・入寮出願手続き等を掲載	
入試課	北海道大学学生寮入寮案内－北大インターナショナルハウス北23条2号棟－	年1回	H27年1月	学生寮（北大インターナショナルハウス北23条2号棟）の概要・入寮出願手続き等を掲載
	大滝セミナーハウスリーフレット	不定期	H26年4月	大滝セミナーハウスの施設紹介
	Be ambitious（大学案内）	年1回	H27年6月	学部等の紹介、修学コースマップ、入試・教育・学生生活の紹介
	オープンキャンパス	年1回	H27年5月	オープンキャンパスの実施内容を掲載
	AO入試案内	年1回	H27年5月	AO入試の概要について掲載
	入学者選抜要項	年1回	H27年7月	平成28年度入学者選抜に関する概要
	北大キャンパスビジットプロジェクト 北大ぐるぶらマップ	不定期	H26年3月	北大キャンパスビジットプロジェクト概要紹介、キャンパス案内
	知のフロンティア－北海道大学の研究者は、いま－	不定期	H26年10月	本学教員の研究内容紹介
キャリアセンター	就職活動のためのキャリアハンドブック	年1回	H27年9月	（就職希望学生向け）各種就職関連情報等を掲載
	キャリア通信	年4回	H27年9月	（学生・教職員向け）キャリアセンター利用案内、各種就職ガイダンス・セミナー情報、主な就職先等を掲載（発行時期により内容は異なる）
	外国人留学生のためのキャリアハンドブック（日本語・英語併記版）（日本語・中国語併記版）	年1回	H27年9月	（日本での就職を希望する外国人留学生向け）日本独自の慣習や就職活動の流れ等を掲載
施設企画課	北海道大学キャンパスマスタープラン 2006	不定期	H19年10月	21世紀に向けた大学の未来像を現実化するために、教育研究内容に相応しい長期的観点に立ち、将来構想を踏まえた施設整備の基本方針を定めたキャンパス計画
	北海道大学キャンパスマスタープラン 2006リーフレット	不定期	H19年10月	キャンパスマスタープラン2006の概要を掲載

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
附属図書館	北海道大学附属図書館概要	年1回	H27年7月	附属図書館のサービス、沿革、イベント等の概要を掲載
	北海道大学附属図書館年報	年1回	H27年8月	附属図書館の活動のトピックス紹介、統計、組織、人事往来等を掲載
	北海道大学附属図書館本館利用案内（リーフレット）日本語版	年1回	H27年4月	附属図書館本館の利用に関する案内等を掲載
	Hokkaido University Library Guide（リーフレット）英語版	年1回	H27年4月	
	北海道大学附属図書館北図書館利用案内（リーフレット）日本語版	年1回	H27年4月	附属図書館北図書館の利用に関する案内等を掲載
	北海道大学附属図書館北方資料概要	不定期	H25年3月	附属図書館所蔵北方資料の利用に関する案内等を掲載
	楡蔭（北海道大学附属図書館報）	年4回	H27年10月	学生向けに附属図書館のサービス紹介、ニュース等を掲載
	HUSCAPレター	不定期	H26年3月	北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）取載文献の紹介記事等を掲載
	北海道大学学術成果コレクション（リーフレット）	不定期	H20年3月	北海道大学学術成果コレクション（HUSCAP）の概要及び運用の紹介
文学研究科・文学部	北海道大学大学院文学研究科・文学部概要	年1回	H27年6月	文学部の沿革、歴代学部長、組織運営等の概要を掲載
	文学研究科・文学部ニュース	年1回	H27年6月	委員会からの報告、研究成果、公開講座のお知らせ、人事等、学部内の状況を掲載
	北海道大学大学院文学研究科案内	年1回	H27年6月	研究科の担当教員や専攻・専修紹介、学生生活、授業内容、入試情報、進路・就職情報等を掲載
	北海道大学文学部案内	年1回	H27年7月	学部の担当教員や履修コース紹介、学生生活、授業内容、留学情報、入試情報、進路・就職情報等を掲載
	北海道大学文学部教育研究年報	不定期	H8-10年版	教育研究活動等を掲載
	北海道大学文学部学外評価委員会報告書	不定期	H10年3月	外部評価報告書
	北海道大学文学研究科紀要	年3回	H27年7月	文学研究科専任教員の研究成果を論文として掲載
	学生便覧（文学部）	年1回	H27年4月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	学生便覧（文学研究科）	年1回	H27年4月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	専門科目シラバス	年1回	H27年4月	文学部専門科目の開講科目一覧、シラバスを掲載
	Syllabus	年1回	H27年4月	大学院（修士課程）科目の開講科目一覧、シラバスを掲載
	北海道大学大学院文学研究科研究論集	年1回	H26年12月	文学研究科大学院学生の研究成果を論文として掲載
	北海道大学大学院文学研究科研究叢書	年1～3回	H26年7月	文学研究科専任教員の研究成果や共同研究の公表
	Journal of the Graduate School of Letters	年1回	H27年3月	文学研究科教員及び大学院学生の研究成果を英文論文として掲載
	北海道大学大学院文学研究科ライブラリ	年2回	H27年8月	文学研究科専任教員の研究成果や共同研究の成果、公開講座のテキストを掲載
	北海道大学文学部リーフレット	不定期	H23年7月	受験生、一般市民向けに文学部の概要を紹介するリーフレット
	文学研究科紹介DVD	年1回	H27年5月	文学研究科の研究教育システム、各専修の紹介、進路情報などをまとめた映像、約8分、大学院進学説明会にて上映
	文学部紹介DVD	年1回	H27年7月	文学部の教育システム、各コースの紹介、進路情報などをまとめた映像、約20分、オープンキャンパスにて上映
	文学研究科大学院進学説明会配付資料	年1回	H27年6月	文学研究科の入試情報、カリキュラム、支援情報、進路情報、学位論文題目などを掲載
	Graduate School of Letters / Faculty of Letters	不定期	H26年2月	文学研究科・文学部の海外向け英文パンフレット、文学研究科・文学部の概要をコンパクトにまとめて掲載
法学研究科・法学部	法学部案内 Be Ambitious	不定期	H27年6月	法学部での学生生活、学修内容や教員等の紹介
	北大法学論集	年6回	H27年9月	文献の論説、資料の紹介及び判例研究を掲載
	北大法政ジャーナル	年1回	H25年12月	法学研究科修士論文の「優」に相当する論文及びリサーチペーパー
	法学研究科学生便覧・講義要領	年1回	H27年3月	授業日程、開講科目一覧、科目内容説明、学内規程や履修方法の周知及び学生生活全般の案内
	学生便覧・講義要領（法科大学院）	年1回	H27年3月	授業日程、開講科目一覧、科目内容説明、学内規程や履修方法の周知及び学生生活全般の案内
	授業科目要覧（SYLLABUS）2～4年生用（法学部）	年1回	H27年3月	学部専門科目の授業内容、教材・評価方法等の案内
	法学部学生便覧	年1回	H27年3月	規程関係、授業の履修方法及び卒業要件、学生生活の案内
	附属高等法政教育研究センターNewsLetter j-mail	不定期	H27年8月	主催シンポジウムの報告、所属教員・研究会の研究内容等を掲載
	大志ある法曹をめざして（法科大学院パンフレット）	年1回	H27年6月	法科大学院の教育プログラム、教員の紹介、入試制度等を掲載
	自己点検評価・外部評価報告書	不定期	H26年11月	法学研究科・法学部の自己点検・評価報告書 法学研究科・法学部の外部評価報告書
	自己点検・評価報告書評価資料集	不定期	H26年11月	法学研究科・法学部の自己点検・評価に関する資料集
	知的財産法政策学研究	不定期	H27年5月	知的財産法政策学研究に関する研究報告
経済学研究科・経済学部	北海道大学大学院経済学研究科・経済学部概要	隔年	H27年4月	経済学研究科・経済学部の沿革、組織、学生数、職員数等の概要を掲載
	北海道大学大学院経済学研究科（紹介パンフレット）	不定期	H25年4月	経済学研究科への入学を目指す方を対象に、研究科の構成、入試情報、研究内容等を紹介

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
経済学研究科・経済学部	北海道大学アカウンティングスクール（紹介パンフレット）	不定期	H26年4月	経済学研究科専門職学位課程への入学を目指す方を対象に、入試情報、講義科目等を紹介
	経済学部のすべて（紹介パンフレット）	不定期	H26年4月	経済学部への入学を目指す方を対象に、学部の構成、授業科目、入試情報、学生生活等を紹介
	北海道大学経済学部点検評価報告書	4年に1回	H25年11月	学部の研究活動状況、教育活動状況等を自己点検したものを掲載
	北海道大学経済学部外部評価報告書	不定期	H26年12月	学部の研究活動状況、教育活動状況等に係る第三者評価結果を掲載
	北海道大学経済学部外部評価資料	不定期	H26年12月	学部の研究活動状況、教育活動状況等に係る第三者評価を受けるための基礎資料
	経済学部学生便覧	年1回	H27年3月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	講義要領（学部2～4年生用）	年1回	H27年3月	全学教育科目2年次及び経済学部専門科目の開講科目、講義内容等を掲載
	経済学研究科学生便覧	年1回	H27年3月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	経済学研究科講義要領	年1回	H27年3月	経済学研究科修士課程及び博士後期課程の開講科目、講義内容等を掲載
	経済学研究科会計情報専攻講義要領	年1回	H27年3月	経済学研究科専門職学位課程の開講科目、講義内容等を掲載
	経済学研究（邦文紀要）	年2回	H27年6月	経済学研究科所属の教員・大学院生の研究論文（和文）を掲載
	Economic Journal of Hokkaido University（欧文紀要）	年1回	H23年12月	経済学研究科所属の教員・大学院生の研究論文（欧文）を掲載
	地域経済・経営ネットワーク研究センター年報	年1回	H27年3月	地域経済・経営ネットワーク研究センター及び経済学研究科の研究成果を発信
	医学研究科・医学部	北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科概要（日本語版）	年1回	H27年9月
北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科概要（英語版）		年1回	H26年11月	医学研究科・医学部の沿革、組織、職員数、学生数等の概要を掲載（英文）
北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科広報		年4回	H27年9月	医学研究科・医学部医学科のニュース、トピックス、お知らせ等を掲載
北海道大学大学院医学研究科・医学部活動報告書		不定期	H16年版	点検評価（研究活動の状況、研究実績等）を掲載
北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科紹介DVD		年1回	H27年7月	入学志願者、一般向けにカリキュラム、医学研究科・医学部医学科の特色等を紹介
北海道大学大学院医学研究科博士課程案内（日本語版）		年1回	H27年5月	入学志願者、一般向け医学研究科博士課程案内
北海道大学大学院医学研究科博士課程案内（英語版）		年1回	H27年8月	入学志願者、一般向け医学研究科博士課程案内（英文）
北海道大学大学院医学研究科修士課程案内（日本語版）		年1回	H27年5月	入学志願者、一般向け医学研究科修士課程案内
北海道大学大学院医学研究科修士課程案内（英語版）		年1回	H27年8月	入学志願者、一般向け医学研究科修士課程案内（英文）
医学研究科医科学専攻修士課程授業要項		年1回	H27年度版	修士課程シラバス
医学研究科博士課程授業要項		年1回	H27年度版	博士課程シラバス
大学院医学研究科（修士課程・博士課程）学生便覧		年1回	H27年度版	医学研究科学生便覧、規定等を掲載
北海道大学医学部医学科案内		年1回	H27年7月	入学志願者、一般向け医学科案内
医学とともに歩む		年1回	H27年度版	医学科専門科目シラバス
医学とともにある学生生活		年1回	H27年度版	医学科学生便覧、規程等を掲載
VIS-Voice of the International Students- 国際連携室だより（英日バイリンガル版）		年数回程度	H27年6月	留学生（大学院生・交換留学生）、医学科学生の意見、北大と関係がある国際交流イベントの紹介・参加者の感想等を掲載
北海道大学医学部保健学科案内		年1回	H27年度版	受験生向け保健学科案内
医学部保健学科学生便覧		年1回	H27年度版	保健学科学生便覧、規程等を掲載
医学部保健学科授業概要（シラバス）		年1回	H27年度版	専門科目シラバス
早期臨床体験実習 要領・資料集		年1回	H27年度版	学部2年次生を対象とした早期臨床体験実習の実習要領・領域ガイダンス資料
歯学研究科・歯学部	北海道大学大学院歯学研究科・歯学部概要	年1回	H27年8月	沿革、組織等、研究科・学部の概要を掲載
	北海道大学大学院歯学研究科・歯学部・歯科診療センター広報	年1回	H27年8月	行事紹介、研究活動紹介、新任教員紹介、歯科治療の紹介、学生ニュース等を掲載
	北海道大学歯学部学部紹介	年1回	H27年度版	歯学部を志願する高校生向けの学部案内
	北海道大学大学院歯学研究科紹介	年1回	H27年度版	歯学研究科の志願者向けの研究科案内
	Syllabus（専門科目）	年1回	H27年度版	歯学部専門科目の各科目、授業内容等を解説
	Syllabus（大学院授業科目）	年1回	H27年度版	大学院授業科目、授業内容等を解説
	平成27年度歯学部学部別入試入学者諸君へ	年1回	H27年3月	歯学部新入生に対する学生生活等の案内
	学生便覧（歯学部・歯学研究科）	年1回	H26年3月	学部・大学院学生に対する修学・厚生補導・関連規程等を掲載
	学生便覧（大学院歯学研究科）	年1回	H27年3月	大学院学生に対する修学・厚生補導・関連規程等を掲載

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
獣医学研究科・獣医学部	光れる北を	不定期	H27年3月	獣医学部案内
	The Japanese Journal of Veterinary Research	年4回	H27年8月	欧文による研究論文の発表、広報
	北海道大学 獣医学研究科 獣医学部 概要	不定期	H26年4月	獣医学研究科・獣医学部の沿革・組織・職員数等の概要を掲載
	獣医学部附属動物病院	不定期	H27年10月	動物病院の施設・設備等診療案内
	外部評価報告書	4年に1回	H27年6月	外部評価委員による、獣医学研究科・獣医学部の施設・設備等の評価を公表
	自己点検評価報告書	4年に1回	H27年6月	獣医学研究科・獣医学部の点検・評価事項を公表
	便覧・シラバス	年1回	H27年3月	獣医学研究科に係る修学・学生生活について、開講授業科目の内容を掲載
	学生便覧・シラバス	年1回	H27年3月	獣医学部に係る修学・学生生活について、開講授業科目の内容を掲載
	News Letter One World - One Health 1つの世界, 1つの健康の実現に向けて	年1~2回	H27年8月	リーディングプログラム広報
情報科学研究科	北海道大学大学院情報科学研究科	年1回	H27年4月	情報科学研究科の研究内容等に関する紹介
	北海道大学大学院情報科学研究科(日本語版リーフレット)	年1回	H27年4月	情報科学研究科の紹介
	北海道大学大学院情報科学研究科(英語版リーフレット)	年1回	H27年4月	情報科学研究科の紹介
	IST NEWS	年4回	H27年10月	情報科学研究科のニュースを掲載
	北海道大学大学院情報科学研究科学生便覧	年1回	H27年3月	情報科学研究科学生用の学生便覧(学修及び学生生活に必要な事項を掲載)
水産科学院・水産科学研究院・水産学部	北海道大学大学院水産科学研究院・水産科学院・水産学部概要	年1回	H27年度版	沿革、組織、講座等の紹介(一般向け)
	北海道大学水産学部 PR誌 aQua	不定期	H27年7月	学部、学院、各学科及び各専攻の紹介(学生向け)
	北海道大学水産学部附属練習船おしよろ丸	不定期	H27年1月	附属練習船おしよろ丸の概要紹介
	北海道大学水産学部附属練習船うしお丸	不定期	H14年3月	附属練習船うしお丸の概要紹介
	北海道大学水産科学研究彙報(Bulletin of Fisheries Sciences, Hokkaido University)	年3回	H27年8月	英文・和文で書かれた報文、短報等をまとめたもの
	Memoirs of the Faculty of Fisheries Sciences, Hokkaido University(北海道大学大学院水産科学研究院紀要)	年2回	H26年12月	学術的価値を有し、まとまった研究成果を公表する報文、特定分野に従来の研究を総合的にまとめた総合論文(レビュー)等を掲載
	Data Record of Oceanographic Observations and Exploratory Fishing(海洋調査漁業試験要報)	年1回	H27年3月	本学部練習船を用いて行った海洋観測、生物調査、漁業試験結果の紹介
	北海道大学水産科学研究科・水産学部の現状と課題-自己点検評価報告書-	不定期	H20年3月	水産学部の現状と今後の課題をまとめたもの
	北海道大学水産科学研究科・水産学部の現状と課題-外部点検評価報告書-	不定期	H20年4月	水産学部の現状と今後の課題をまとめたもの
	学生寮入寮案内-北晨寮	不定期	H27年7月	学生寮(北晨寮)の概要・入寮手続き等を掲載(WEB版)
	水産学部学生便覧	年1回	H27年4月	水産学部における学修及び学生生活に必要な事項を掲載
大学院水産科学院学生便覧	年1回	H27年4月	水産科学院における学修及び学生生活に必要な事項を掲載	
環境科学院・地球環境科学研究院	北海道大学大学院環境科学院の紹介	年1回	H27年度版	学院の組織、各専攻の紹介等、環境科学院の概要を掲載
	学生便覧	年1回	H27年度版	環境科学院の教育・研究内容、授業科目の概要、規程関係、行事予定表、授業時間割、建物配置図等を掲載
	授業計画(Syllabus)	年1回	H27年度版	環境科学院の開講科目、講義内容等を掲載
	英文リーフレット	不定期	H27年度版	学院の組織、各専攻の紹介等、環境科学院の概要を掲載
理学院・理学研究院・理学部	北海道大学大学院理学研究院・理学院・理学部概要	年1回	H23年度版	沿革、組織、職員数、学生数、建物案内、附属施設等の紹介
	北海道大学大学院理学研究院・理学院・理学部広報	年4回	H24年7月	研究活動・行事・シンポジウム等により、新任教員紹介、受賞関係、外国人研究者等受入関係、人事異動、教務関係行事予定等を掲載(HPにて公開)
	外部評価資料(数学・物理学・化学・生物科学・地球惑星科学専攻)	1回	H8-10年	大学院重点化に係る点検評価資料
	外部評価(数学・物理学・化学・生物科学・地球惑星科学専攻)	1回	H9-11年	大学院重点化に係る外部評価委員の評価及び提言
	北海道大学大学院理学研究院・理学部・理学院 外部評価委員会 評価報告書	不定期	H26年4月	外部評価意見書、自己点検評価書・別添資料、概要説明資料等、第二中期目標・中期計画
	理学部 学部案内	年1回	H27年度版	理学部各専攻の概要や附属施設の紹介及び卒業生の進路、意見等を掲載
	理学部学生便覧	年1回	H27年度版	学修及び学生生活に関する規程及び手続方法を掲載
	大学院学生便覧	年1回	H27年度版	学修及び学生生活に関する規程及び手続方法を掲載
	北海道大学大学院理学院数学専攻	年1回	H27年6月	数学専攻スタッフ一覧、専門紹介、修士課程の履修について掲載
	Hokkaido Mathematical Journal(紀要)	年3回	H27年10月	研究論文
	数学科目ガイド	不定期	H25年4月	数学科の学部学生向け科目案内(全学教育科目、専門科目)
	Hokkaido University Preprint Series in Mathematics	不定期	H27年10月	研究論文速報(HPにて公開)

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
理学院・理学研究院・理学部	Hokkaido University Technical Report Series in Mathematics	不定期	H27年8月	研究会、特別講演等、本学で講演されたもののアブストラクト集
	北海道大学理学部数学科ガイド	年1回	H27年6月	新1年生向け数学科の案内
	北海道大学理学部化学科パンフレット	不定期	H27年6月	化学科の研究室・研究内容等の紹介
	Annual Report 2014 (化学専攻)	年1回	H27年7月	各研究室の研究業績・外部資金獲得状況等の紹介、各種大学院教育プログラム実績の紹介
	物理学部門年次報告書	年1回	H26年10月	部門の活動一覧、各研究グループの成果報告
	北海道大学理学部生物科学科(生物学)学科案内	年1回	H27年7月	高校生・一般向け講座紹介、入学から卒業までの過程、授業内容、高校生一日入学紹介、教員名簿、卒業後の進路(過去3年間)を掲載
	北海道大学理学部生物科学科(生物学)広報	年1回(漸次更新)	H27年6月	高校生・一般向け講座紹介、教員紹介、各種お知らせ、いきものがたり、生物学者列伝、入学から卒業までの過程、授業内容等を掲載(HPにて公開)
	北海道大学理学部生物科学科(高分子機能学)パンフレット	年1回	H26年7月	学科内容、研究室等の紹介
	北海道大学大学院理学院宇宙理学専攻専攻案内パンフレット	不定期	H25年6月	専攻内容及び各研究室研究内容メンバーの紹介
	北海道大学大学院理学院自然史科学専攻概要	年1回	H27年6月	専攻の組織、カリキュラム、講座紹介・教員紹介等を掲載
	北海道大学理学部地球惑星科学科パンフレット	不定期	H27年2月	学科内容の紹介、教員紹介
	北海道大学地球物理学研究報告	年1回以上	H27年3月	研究論文の発表
	北海道大学大学院理学院自然史科学専攻地球惑星ダイナミクス講座	不定期	H27年3月	ダイナミクス講座の研究教育活動及び構成員名簿を掲載
	International Graduate Program in the Natural History Sciences (I-NHS)	不定期	H26年4月	理学院自然史科学専攻における地球惑星ダイナミクス講座、地球惑星システム講座、地震火山学講座、多様性生物学講座の国際プログラムの募集案内
	北海道大学大学院理学院自然史科学専攻地球惑星システム科学分野	不定期	H24年6月	システム科学講座の研究教育活動及び構成員名簿を掲載
	北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター	不定期	H24年3月	学部学生を対象として、沿革、分野の紹介等、センターの概要を掲載
	The Institute of Seismology and Volcanology Faculty of Science, Hokkaido University	不定期	H24年3月	外国人研究者及び留学生等を対象として、沿革、分野の紹介等、センターの概要を掲載
北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター年報	年1回	H26年10月	センターとしての活動・研究活動・教育活動及び構成員名簿を掲載	
薬学研究院・薬学部	生命科学の最先端へ	年1回	H27年7月	学部紹介パンフレット
	北海道大学薬学部学生便覧	年1回	H27年度版	学修及び学生生活に必要な事項を掲載(H27年度学科分属者用及び学部移行者用)
	北海道大学薬学部講義要項(専門科目)	年1回	H27年度版	専門科目の授業内容を掲載(H27年度学科分属者用及び学部移行者用)
	北海道大学大学院薬学研究科・薬学部外部点検評価報告書	不定期	H26年3月	点検評価
	北海道大学大学院薬学研究院・薬学部自己点検評価報告書	不定期	H25年10月	点検評価
農学院・農学研究院・農学部	北海道大学大学院農学研究院・大学院農学院・農学部概要	年1回	H27年度版	農学研究院・農学院・農学部の沿革等の概要を掲載(和文・英文併記)
	北海道大学大学院農学研究院・農学部広報	不定期	H22年3月	農学研究院・農学部のニュース、お知らせ等を掲載
	北海道大学大学院農学研究院邦文紀要	年2回	H26年6月	農学研究院・農学部の学術研究論文誌
	Journal of the Research Faculty of Agriculture, Hokkaido University (北海道大学大学院農学研究院欧文紀要)	年1回	H23年2月	農学研究院・農学部の学術研究論文誌
	北海道大学大学院農学研究院邦文紀要別冊「農経論叢」	年1回	H25年4月	農業経済に関する学術研究論文誌
	Insecta Matsumurana	年1回	H26年10月	昆虫学に関する学術研究論文誌
	北海道大学大学院農学院学生便覧	年1回	H27年4月	大学院生の授業・学生生活に関する説明
	北海道大学農学部学生便覧(2年次進級者用)	年1回	H27年4月	学部生の授業・学生生活に関する説明
	農学部授業要綱集(専門科目)	年1回	H27年4月	学部専門科目の紹介
	農学院授業要綱集	年1回	H27年4月	大学院授業科目の紹介
SCHOOL OF AGRICULTURE	不定期	H27年7月	各学科・附属施設の内容紹介(冊子)	
生命科学院・先端生命科学研究院	北海道大学大学院先端生命科学研究院・生命科学院概要	年1回	H23年度版	沿革、組織、職員数、学生数、外部資金等を掲載
	北海道大学大学院生命科学院 平成21年度外部評価委員会評価報告	不定期	H22年3月	中期計画期間終了に伴う自己点検評価及び外部評価
	北海道大学大学院先端生命科学研究院外部評価委員会 評価報告書	不定期	H26年4月	第2期中期目標・中期計画における自己点検評価及び外部評価
	北海道大学大学院生命科学院外部評価委員会 評価報告書	不定期	H26年4月	第2期中期目標・中期計画における自己点検評価及び外部評価
	北海道大学大学院先端生命科学研究院パンフレット	不定期	H26年3月	構成、研究活動、連携、支援体制、人材育成、研究室紹介
	次世代ポストゲノム研究センター	不定期	H19年9月	構成、沿革、関連研究室紹介、研究機器の説明等を掲載

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
生命科学院・ 先端生命科学研究院	次世代ポストゲノム研究センター Annual Report 2014年度	年1回	H27年7月	研究活動、研究業績、研究資金等を掲載
	生命科学院学生便覧	年1回	H27年度版	学修及び学生生活に関する規程及び手続方法等を掲載
	北海道大学大学院生命科学院パンフレット	年1回	H27年度版	大学院受験生への学院紹介、研究概要、入試概要、施設・設備紹介
	北海道大学 大学院生命科学院 生命医薬科学コース	年1回	H27年度版	コース概要 (2015-2016)
	北海道大学 大学院生命科学院 生命融合科学コース パンフレット	年1回	H24年5月	コース概要
	北海道大学 大学院生命科学院 生命システム科学コース	年1回	H27年度版	コース概要
教育学院・ 教育学研究院・ 教育学部	北海道大学教育学部案内	年1回	H27年度版	各研究グループの紹介、開講科目一覧、学生の声、卒業生の声、国際交流状況等を掲載
	北海道大学大学院教育学院入学案内	年1回	H27年度版	各研究グループを紹介
	北海道大学教育学部・北海道大学大学院教育学院便覧	年1回	H27年度版	履修上の注意、学生生活上の注意、その他学生として知っておかなければならない事項を掲載
	北海道大学教育学部有識者懇談会報告書 －第三者点検評価報告書－	不定期	H16年2月	研究・教育・管理運営面について、各界の有識者と教員との意見交換の内容を掲載
	自己点検評価報告書 平成22年度～平成24年度	不定期	H26年3月	研究・教育・管理運営面について、教員間の意見交換の内容を掲載
	外部評価結果報告書	不定期	H26年12月	研究・教育・管理運営面について、外部からの有識者からの意見交換を交えた内容を掲載
	北海道大学大学院教育学研究院紀要	年2回	H26年6月	研究の成果を論文として掲載
北海道大学教職課程年報	年1回	H27年3月	北海道大学教職課程に関連した調査研究及び授業実践等に関する論文や各種資料を掲載	
国際広報メディア・観光学院 メディア・コミュニケーション研究院	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院概要	年1回	H27年4月	学院の沿革、組織、職員数等の概要を掲載
	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院概要 英語版	年1回	H27年4月	学院の沿革、組織、職員数等の概要を掲載 (英語版)
	国際広報メディア・観光学ジャーナル	年2回	H27年9月	教員の教育・研究成果の公表、博士後期課程学生の研究発表
	学生便覧	年1回	H27年度版	履修及び学生生活に必要な事項
	シラバス (マスター)	年1回	H27年度版	授業内容の詳細
	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻	不定期	H22年4月	観光創造専攻の紹介
	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 国際広報メディア専攻 観光創造専攻 (リーフレット)	年1回	H27年度版	学院の紹介、入試日程概要
	北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 国際広報メディア専攻 観光創造専攻 (リーフレット) 中国語版	年1回	H27年度版	学院の紹介、入試日程概要 (中国語版)
	メディア・コミュニケーション研究	年2回	H27年3月	教員の研究報告
	大学院メディア・コミュニケーション研究院 研究叢書	年2回	H20年3月	教員の研究報告
保健科学院・ 保健科学研究院	北海道大学大学院保健科学研究院・大学院保健科学院・医学部保健学科概要	年1回	H27年度版	保健科学研究院・保健科学院・医学部保健学科の沿革、組織、職員数、学生数等の概要を掲載 (英文併記)
	北海道大学大学院保健科学研究院広報「ブラテュス」	年2回	H27年9月	保健科学研究院・保健科学院・医学部保健学科のニュース、トピックス、お知らせ等を掲載
	北海道大学大学院保健科学院保健科学専攻案内	隔年	H26年度版	受験生向け専攻案内
	北海道大学大学院保健科学院学生便覧	年1回	H27年度版	保健科学院院生便覧、規程等を掲載
	北海道大学大学院保健科学院授業概要 (シラバス)	年1回	H27年度版	保健科学院専攻共通基礎科目及びコース別専門科目シラバス
	北海道大学大学院保健科学院・医学部保健学科FDワークショップ報告書	年1回	H27年3月	保健科学院・医学部保健学科で実施したFDワークショップの報告書 (メール配信)
	北海道大学大学院保健科学研究院・大学院保健科学院 (医学部保健学科) 年報	年1回	H25年10月	沿革、組織、研究活動、教育活動等を掲載 (CD-ROM)
	北海道大学医学部保健学科・大学院保健科学院・大学院保健科学研究院フロアガイド	不定期	H27年6月	北海道大学医学部保健学科・大学院保健科学院・大学院保健科学研究院フロアガイド (日本語版、英語版)
工学院・工学研究院・工学部	北海道大学大学院工学研究院・工学院・工学部概要 (和文・英文)	年1回	H27年度版	沿革、組織、職員数等、工学研究院・工学院・工学部の概要を掲載
	北海道大学大学院工学研究院・工学院広報誌「えんじにあRing」	年4回	H27年10月	工学研究院・工学院の研究紹介、ニュース等を掲載
	北海道大学工学系教育研究センター平成26年度活動報告書および外部評価報告書	隔年	H27年3月	工学系教育研究センターの報告書 (活動、外部評価)
	北海道大学工学系教育研究センター平成25年度活動報告書	隔年	H26年3月	工学系教育研究センターの報告書 (活動)
	北海道大学総合若手人材育成事業 平成25年度活動報告書および外部評価報告書	隔年	H26年3月	人材育成本部と実施している総合若手人材育成事業の報告書 (活動、外部評価)
	北海道大学工学系教育研究センターリーフレット (和文/英文併記)	不定期	H26年7月	工学系教育研究センターの紹介

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
工学院・工学研究院・工学部	北大CEED（工学系教育研究センター）eラーニングのご案内（和文・英文）	不定期	H27年3月	工学系教育研究センターeラーニングシステム開発部で提供しているeラーニングに関する紹介、視聴方法等案内、多言語化への取組
	北海道大学大学院工学院学生便覧	年1回	H27年4月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	北海道大学大学院工学院授業計画（シラバス）	年1回	H27年4月	大学院学生用のシラバス
	北大工学部のすべて（学部紹介パンフレット）	隔年	H27年4月	工学部への入学を目指す高校生を対象に、工学部の概要、特に4学科15コースの内容を中心に紹介
	Girls, Be ambitious!	不定期	H23年4月	工学部への入学を目指す女子学生を対象に、工学部を紹介するパンフレット
	「想像を超えた未来を創造する」（学部紹介リーフレット）	不定期	H23年3月	工学部への入学を目指す高校生を対象に、工学部の4学科の概要・研究紹介を掲載したリーフレット
	就職に強い！工学部	不定期	H27年9月	工学部・工学系大学院の就職状況を紹介
	北海道大学工学部学生便覧	年1回	H27年4月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
	北海道大学工学院英語特別コースパンフレット（英文）	不定期	H27年8月	工学分野リーダー育成英語特別コース（e3）の概要紹介
	北海道大学工学部 情報エレクトロニクス学科（パンフレット）	年1回	H27年4月	工学部情報エレクトロニクス学科の紹介
	北海道大学大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センターパンフレット（和文・英文）	隔年	H26年9月	センターの沿革、組織、研究内容、業績等統計を掲載
	北海道大学大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センター年報	年1回	H27年10月	センターの機構・組織、研究内容、研究成果を掲載
	北海道大学大学院工学研究院附属エネルギー・マテリアル融合領域研究センターマルチビーム超高圧電子顕微鏡室（パンフレット）	不定期	H27年7月	超高圧電子顕微鏡及び周辺機器の仕様、研究例、沿革等を掲載
総合化学院	北海道大学大学院総合化学院概要（英語併記）	不定期	H26年8月	沿革、組織、総合化学院の概要、研究室紹介等を掲載
	北海道大学大学院総合化学院自己点検評価書	不定期	H26年11月	総合化学院創設から5年間の自己点検評価を掲載
	北海道大学大学院総合化学院外部点検評価書	不定期	H27年2月	H27年2月開催の外部中間評価概要、評価資料、外部委員による評価
	学生便覧	年1回	H27年度版	総合化学院の行事予定、履修・学位取得・学生生活に関する事項、規程関係等を掲載
	授業計画（シラバス）	年1回	H27年度版	開講科目、実行教育課程表、授業の目標、到達目標、授業計画、成績評価の基準と方法を掲載
	年次報告書（アニュアルレポート）	年1回	H27年度版	総合化学院の特色ある教育活動、学生状況、分野（研究室）の教育研究活動を掲載
	北海道大学大学院総合化学院紹介ポスター（パネル）	不定期	H27年4月	総合化学院の概要等を紹介
公共政策学教育部・公共政策学連携研究部	学生便覧（公共政策大学院）	年1回	H27年3月	授業日程、学内規程や履修方法の周知及び学生生活全般の案内
	講義要領（公共政策大学院）	年1回	H27年3月	開講科目一覧、授業内容、教材・評価方法等の案内
	Hokkaido University Public Policy School	年1回	H27年4月	公共政策大学院の教育プログラム、教員の紹介、入試制度等を掲載
	外部評価委員会評価報告書	不定期	H26年3月	公共政策学連携研究部・教育部の外部評価報告書
北海道大学病院	北海道大学病院概要	年1回	H27年度版	診療実績等の概要を掲載
	北海道大学医学部附属病院自己点検・評価報告書	不定期	H13年3月	新しい世紀に向けた、1998～2000年における報告書
	北海道大学病院 初期医師臨床研修プログラム	年1回	H27年度版	医師臨床研修プログラムを掲載（H18年度版よりパンフレット形式）
	北海道大学病院 歯科医師臨床研修プログラム	年1回	H27年度版	歯科医師臨床研修プログラムを掲載
	北海道大学病院 地域医療連携福祉センター ニュースレター	年2回	H27年5月	各診療科外来診療等紹介や院内の最新情報等を掲載
	北海道大学 卒後臨床研修センター Resident NEWS letter「AMBITION」	年4回	H27年9月	当院医師臨床研修に係る最新情報を掲載
低温科学研究所	北海道大学低温科学研究所概要	隔年	H26年7月	研究所の沿革、組織、職員数等の概要を掲載
	北海道大学低温科学研究所紹介DVD（日本語版・英語版）	1回	H12年3月	研究所の研究内容等を紹介
	北海道大学低温科学研究所年次自己点検評価報告書-年報-	年1回	H27年8月	研究所の活動状況、研究成果、自己点検評価の結果を掲載（年報）
	北海道大学低温科学研究所外部点検評価報告書	不定期	H25年3月	研究所の組織及び運営、教員人事、研究活動、大学院教育及び社会教育等の外部評価を掲載
	低温研ニュース	年2回	H27年6月	研究紹介、シンポジウム報告、共同研究、人事異動等を掲載
	環オホーツク観測研究センターリーフレット（日本語版・英語版）	不定期	H26年9月	環オホーツク観測研究センターの研究内容を紹介
	研究所で学びたい学生のための低温科学研究ガイド【分野別ピックアップ】	不定期	H23年7月	研究所の研究内容を紹介

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
低温科学研究所	北海道大学低温科学研究所 [ダイジェストガイド]	不定期	H23年11月	研究所の歴史、最新の研究内容、組織を紹介
電子科学研究所	北海道大学電子科学研究所 (概要)	隔年	H24年7月	研究所の沿革、組織、職員数等の概要を掲載
	北海道大学電子科学研究所 (パンフレット)	不定期	H25年3月	学生向け研究所案内
	研究活動-点検評価報告書-	年1回	H27年7月	研究所の研究成果・活動、国際交流、教育活動を掲載
遺伝子病制御研究所	北海道大学遺伝子病制御研究所概要	隔年	H26年12月	目的と使命、沿革、歴代所長・施設長及び名誉教授、機構、職員・学生、研究活動、附属施設、教育活動、代表論文、北海道大学配置図を掲載
	北海道大学遺伝子病制御研究所年報	年1回	H27年1月	総論、機構、管理運営、社会貢献、附属施設、予算規模等、研究成果、教育活動、共同利用・共同研究拠点、研究活動、施設・設備、各種委員会等を掲載
	北海道大学遺伝子病制御研究所外部評価報告書	不定期	H26年8月	理念・目標、沿革、研究体制と将来構想、中期目標・中期計画、研究、教育、社会貢献活動、国際交流、管理運営等、施設、共同利用・共同研究拠点、附属施設、各分野における研究概要と成果等を掲載
	IGM News Letter	年3回	H26年10月	トピックス、お知らせ、研究業績紹介、新任教員紹介、新講座開設等を掲載
触媒科学研究所	触媒化学研究センター外部点検評価報告書	不定期	H25年3月	センター外の委員で組織された委員会による点検評価報告
	触媒科学研究所概要	年1回	H27年10月	研究所の沿革、組織、研究概要を掲載 (英文併記)
	触媒化学研究センター年報	年1回	H27年7月	沿革、組織、研究活動状況、教育活動状況を掲載
スラブ・ユーラシア研究センター	SLAVIC RESEARCH CENTER HOKKAIDO UNIVERSITY (概要)	不定期	H27年5月	センターの沿革、組織、職員紹介、研究活動を掲載
	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターニュース	年4回	H27年9月	センターの最新の研究・行事・人事等の活動状況を掲載
	スラブ・ユーラシア研究センターを研究する (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター点検評価報告書)	3年に1回	H26年8月	センターの自己点検評価報告、外部評価報告、活動記録報告
	ACTA SLAVICA IAPONICA (欧文学術雑誌)	年2回	H27年7月	投稿論文を欧文で掲載 (レフェリー制)
	スラヴ研究 (和文学術雑誌)	年1回	H27年7月	投稿論文を和文で掲載 (レフェリー制)
	スラブ・ユーラシア研究報告集	不定期	H27年3月	研究報告会等での報告抄録等を掲載
	Slavic Research Center News	年1回	H27年3月	センターの研究・行事・人事等の活動状況を欧文で掲載
	Slavic Eurasian Studies (欧文論集)	不定期	H27年7月	シンポジウムのペーパー等を欧文で掲載
	比較地域大国論集	不定期	H26年3月	新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」に関する報告抄録等を掲載
	Eurasia Border Review	年2回	H26年11月	グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する報告抄録等を掲載
	境界研究	年1回	H27年3月	グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する投稿論文を和文で掲載 (レフェリー制)
	スラブ研究センター・レポート	不定期	H23年3月	研究報告会等での報告抄録等を掲載 (WEB版)
	スラブ・ユーラシア研究者名簿	不定期	H24年3月	スラブ・ユーラシア地域研究者の名簿
	スラブ・ユーラシア研究センター (SRC) メールマガジン	月1回	H27年10月	センターの行事や研究会の予定、募集等について掲載
情報基盤センター	情報基盤センター外部評価報告書	不定期	H27年3月	センター外の委員で組織された委員会による点検評価報告
	情報基盤センター概要	年1回	H26年9月	センターの沿革、組織、研究概要を掲載
	情報基盤センター概要 (英語版)	隔年	H26年11月	センターの沿革、組織、研究概要を英文で掲載
	情報基盤センター年報	年1回	H26年11月	センターの沿革、組織、研究活動状況、教育活動状況を掲載
	大型計算機システム (iic-HPC) ニュース HINES-WORLD	年4回 不定期	H27年10月 H25年4月	大型計算機システムに関する情報提供 情報ネットワーク利用案内
人獣共通感染症リサーチセンター	北海道大学 人獣共通感染症リサーチセンター (日本語・英語版)	年1回以上	H27年10月	人獣共通感染症リサーチセンターの概要を掲載
	人獣共通感染症リサーチセンター年報	年1回	H27年3月	センターの概要、組織、研究活動、教育活動を掲載
	外部評価報告書	6年に1回	H27年3月	外部評価委員による、人獣共通感染症リサーチセンターの研究業績・施設・設備等の評価を公表
	自己点検評価報告書	6年に1回	H27年3月	人獣共通感染症リサーチセンターの点検・評価事項を公表
アイソトープ総合センター	センター概要	不定期	H25年11月	センターの施設案内、沿革等を掲載
	アイソトープ総合センター利用案内	隔年	H27年3月	センターの利用に関する規程等、利用に関する情報をわかりやすく掲載
	北海道大学アイソトープ総合センター自己点検・評価報告書	年1回	H27年7月	センターの利用状況、共同研究一覧、活動報告等を掲載
	センターニュース (CIS NEWS)	年1回	H27年3月	センターの最新機器の紹介、講義、講習会のお知らせ等のニュースを掲載
量子集積エレクトロニクス研究センター	北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター (概要・和文)	不定期	H24年10月	センターの目的、組織、研究内容等を掲載
	北海道大学量子集積エレクトロニクス研究センター (概要・英文)	不定期	H24年10月	センターの目的、組織、研究内容等を掲載

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等	
量子集積エレクトロニクス研究センター	量子集積エレクトロニクス研究(研究報告)	年1回	H27年6月第14巻	センターの研究目的、組織、研究内容、施設・設備と、研究活動及び研究成果の報告	
	量子集積エレクトロニクス研究センター国際セミナー予稿集	隔年	H24年3月	センター主催で開催する国際セミナー論文集	
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター概要	不定期	H27年2月	沿革、組織、研究内容等の概要を掲載	
	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター年報	年1回	H27年2月	各施設の教育・研究動向、職員の研究業績一覧、施設の利用状況等を掲載	
	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター News Letter	年複数回	H27年8月	センターの活動紹介、イベントなどのお知らせ、ショートエッセイ等を掲載	
	森林圏ステーション	演習林研究報告	年2回	H27年3月	森林科学関連分野及び森林圏ステーション関連の研究論文(和文)を掲載。国内外の関係機関等にも送付
		Eurasian Journal of Forest Research	年2回	H26年8月	「演習林研究報告」の英語論文分冊。国内外の関係機関等にも送付
		森林圏ステーション年度報告	年1回	H27年3月	森林圏ステーション管理面の資料を掲載
		北方森林保全技術	年1回	H27年3月	森林圏ステーション技術系職員が試験年報報告会で発表した論文等を掲載。国内の関係機関等にも送付
	耕地圏ステーション	森林圏ステーション概要	不定期	H16年9月	施設の紹介
		北海道大学生物生産研究農場概要	不定期	H14年9月	農場の沿革、部門紹介、組織等の概要を掲載
		北海道大学生物生産研究農場研究報告	隔年	H17年12月	農場を利用した研究の報告
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション生物生産研究農場(概要パンフレット)	不定期	H14年3月	農場の沿革、組織等の概要を掲載
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション生物生産研究農場余市果樹園(リーフレット)	不定期	H16年1月	余市果樹園の解説
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告	年1回	H21年3月	農場における圃場管理や家畜飼養に関する技術業務を掲載
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園(概要パンフレット)英語併記	不定期	H27年2月	植物園の沿革、組織等の概要を掲載
		植物園だより(リーフレット)	年6回	H27年10月	園内植物の解説
		北海道大学植物園(リーフレット)	年1回	H27年4月	植物園内の解説
		北海道大学植物園(リーフレット)英語版	年1回	H27年4月	植物園内の解説
		北海道大学植物園(リーフレット)中国語版	年1回	H27年4月	植物園内の解説
		北海道大学植物園(リーフレット)韓国語版	年1回	H27年4月	植物園内の解説
		北大植物園技術報告・年次報告	年1回	H27年3月	植物園の活動内容
		MIYABEA sive Illustrated Flora of Hokkaido	不定期	H11年10月	研究報告
		北大植物園研究紀要	年1回	H26年12月	研究報告
		北大植物園資料目録	不定期	H25年8月	資料目録
	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター静内研究牧場研究報告	不定期	H13年3月	牧場を利用した研究の報告	
	水圏ステーション	全国大学水産実験所要覧	不定期	H18年10月	施設の概要、地域の環境、教育・研究活動、交通、職員、利用手続きを掲載
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション室蘭臨海実験所概要	不定期	H11年4月	施設の概要(施設紹介、沿革、利用方法、所在地、研究内容等)
		北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション室蘭臨海実験所要覧	不定期	H19年4月	施設の要覧(施設紹介、沿革、研究内容、所員名、出版物、施設設備、利用方法等)
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション厚岸臨海実験所報告		不定期	H19年3月	所員及び研究目録、業績目録、科学研究費等補助金、利用者リスト及び研究、利用状況、利用者業績目録、教育・社会教育活動、気象・海洋観測データ(各内容を英語及び日本語で掲載)	
観光学高等研究センター	観光学高等研究センター	不定期	H27年4月	観光学高等研究センターの紹介	
アイヌ・先住民研究センター	アイヌ・先住民研究センター案内(パンフレット)	不定期	H27年10月	アイヌ・先住民研究センターの役割、特徴及び同センターで実施するプロジェクトを紹介	
	北海道大学アイヌ・先住民研究センターニューズレター	不定期	H24年6月	アイヌ・先住民研究センターが実施した講演会等の内容、各研究事業の成果及び今後のイベント等を紹介	
	富田友子採録・採譜・解説 西平ウメ伝承 トンコリ楽曲集	不定期	H24年3月	アイヌの伝統楽器トンコリ(五弦琴)の教則本としても使えるよう、伝承曲を楽譜にして紹介	
	アイヌと境界(パンフレット)	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターの「博物館プロジェクト」が2011年に主催した博物館展示の内容を紹介	
	北米先住民ヤキの世界(パンフレット)	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターの「博物館プロジェクト」が2011年に主催した博物館展示の内容を紹介	
	日本国憲法と先住民民族であるアイヌの人びと(北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット1号)	不定期	H25年2月	アイヌ・先住民研究センターが2011年10月に主催した講演会の講演内容を紹介	
	トンコリの世界(北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット2号)	不定期	H26年3月	アイヌの伝統的楽器トンコリ伝承者の富田友子氏に対するインタビューをまとめて楽曲だけでなくトンコリの作り方なども紹介	

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
アイヌ・先住民研究センター	The Ainu : Indigenous People of Japan (北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット3号)	不定期	H26年6月	ワシントンD.C.での国際シンポジウムにおける報告をまとめ、現代のアイヌ民族の活動等を海外に向けて英文で紹介
	花とイナウー世界の中のアイヌ文化ー(北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット4号)	不定期	H27年3月	アイヌ民族の信仰や儀式等において用いられるイナウの意味や特徴を各国のイナウとも比較しながら紹介
	台湾の原住民族政策ー民族認定と博物館ー(北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット5号)	不定期	H27年4月	アイヌ・先住民研究センターが2012年と2014年に主催した台湾の原住民族政策に関するシンポジウムの講演内容を紹介します
	2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 現代アイヌの生活と意識	不定期	H22年3月	アイヌ・先住民研究センターが2008年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査(アンケート調査)に関する報告書
	2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2009年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査(インタビュー調査)に関する報告書
	2008年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 現代アイヌの生活と意識の多様性	不定期	H26年3月	アイヌ・先住民研究センターが2008年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査の結果を再分析した報告書
	2014年アイヌ民族多住地域住民調査報告書 地域住民のアイヌ政策への評価とアイヌの人々との社会関係	不定期	H27年9月	アイヌ・先住民研究センターが2014年に札幌市とむかわ町で実施したアイヌ民族多住地域住民調査の結果に関する報告書
	Report on the 2008 Hokkaido Ainu Living Conditions Survey	不定期	H22年3月	アイヌ・先住民研究センターが2008年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査に関する報告書の英語版
	Report on the 2009 Hokkaido Ainu Living Conditions Survey	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2009年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査に関する報告書の英語版
	Report on the 2008 Hokkaido Ainu Living Conditions Survey	不定期	H26年3月	アイヌ・先住民研究センターが2008年に実施した北海道アイヌ民族生活実態調査の結果を再分析した報告書の英語版
	沖縄におけるガイドツアーの運営実態に関する事例調査	不定期	H23年3月	アイヌ・先住民研究センターがエコツーリズム・プロジェクトの一環として実施した事例調査の報告書
	現代アイヌの生活の歩みと意識の変容	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2009年に実施したインタビュー調査に関する報告書
	新しいアイヌ史の構築 先史編 古代編 中世編	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2011年に実施した「アイヌ史プロジェクト」の研究成果に関する報告書
	世界のなかのアイヌ・アート	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2011年に実施した「先住民民族アートプロジェクト」の研究成果に関する報告書
	先住民文化遺産とツーリズムーアイヌ民族における文化遺産活用の理論と実践	不定期	H24年3月	アイヌ・先住民研究センターが2011年に実施した「先住民文化遺産とツーリズムプロジェクト」の研究成果に関する報告書
	にかほ市象潟郷土資料館所蔵森家旧蔵「蝦夷方言藻汐草 全」翻刻・解題	不定期	H25年3月	アイヌ・先住民研究センターが2012年に実施した「古文書プロジェクト」の研究成果に関する報告書
	藤山ハル口述・村崎恭子採録・著 樺太アイヌ語例文集(1)	不定期	H25年3月	アイヌ・先住民研究センターが2012年に実施した「アイヌ・先住民言語アーカイブプロジェクト」の研究成果に関する報告書
	和田文治郎 樺太アイヌ説話集1	不定期	H25年3月	アイヌ・先住民研究センターが2012年に実施した「アイヌ・先住民言語アーカイブプロジェクト」の研究成果に関する報告書
アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究(2)	不定期	H25年3月	アイヌ・先住民研究センターが2012年に実施した「アイヌ・先住民言語アーカイブプロジェクト」の研究成果に関する報告書	
社会科学実験研究センター	北海道大学社会科学実験研究センター自己点検評価	年1回	H27年3月	社会科学実験研究センターの概要、教育研究活動の実績、組織構成を掲載(HPよりダウンロード可能)
	北海道大学社会科学実験研究センター案内(パンフレット)	不定期	H22年3月	社会科学実験研究センターの概要、実験室等の研究設備とその利用状況、研究成果を紹介
	北海道大学社会科学実験研究センター案内(パンフレット)英語版	不定期	H27年8月	社会科学実験研究センターの概要、実験室等の研究設備とその利用状況、研究成果を紹介
脳科学研究教育センター	北海道大学脳科学研究教育センター概要	年1回	H27年3月	センターの組織、発達脳科学専攻(バーチャル専攻)の概要等を掲載
	脳科学研究教育センター発達脳科学専攻教育プログラム概要・授業要項(シラバス)	年1回	H27年3月	発達脳科学専攻の概要、授業要項等を掲載
外国語教育センター	HOKKAIDO UNIVERSITY CENTER FOR LANGUAGE LEARNING	不定期	H21年4月	外国語教育センターの紹介
総合博物館	第1期学術資料展示パンフレット(アイランド・アーク)	1回	H14年3月	第1期学術資料展示の概要及び展示学術標本資料を詳細に紹介
	重要文化財札幌農学校第2農場パンフレット(見学者配付用資料)	1回	H27年度	重要文化財札幌農学校第2農場を見学者に紹介
	Where northern land and ocean meet Island Arc -Rocks, Minerals, Ore Deposits, Fossils, Strata, and Their History-	1回	H16年3月	第1期学術資料展示パンフレット(アイランド・アーク)の英語版
	総合博物館展示リーフレット(見学者配付用資料)	1回	H25年6月	総合博物館常設展示の各展示ゾーン紹介・利用案内を見学者に紹介
	An Introduction to The Hokkaido University Museum	1回	H25年9月	総合博物館常設展示の各展示ゾーン紹介・利用案内を見学者に紹介(リーフレット)
	北海道大学総合博物館概要	年1回	H24年度版	博物館の目的・沿革・組織・教育研究活動内容等を掲載

部局名	広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
総合博物館	北大歴史展示概要（英語版・中国語版・韓国語版）	1回	H15年度	北大歴史展示の概要
	北海道大学総合博物館外部点検評価報告書（2010）	不定期	H23年3月	外部点検評価委員会による総合博物館の評価
	北海道大学総合博物館点検評価報告書（2004-2006年度）	1回	H19年7月	北海道大学総合博物館点検評価委員会委員による総合博物館の評価
	北海道大学総合博物館研究報告	年1回	H26年3月	研究報告 No1（2003.3）, No2（2004）, No3（2006）, No4（2008.3）, No5（2009.12）, No6（2013.3）, No7（2014.3）
	北海道大学総合博物館年報	年1回	H24年1月	博物館及び博物館教員の活動記録 H16年度（2004.1.31） H18・19年度（2006.12.1） H20・21年度（2012.3.1） H22・23年度（2013.1.1）
	北海道大学総合博物館ニュース	年2回	H27年6月	博物館の活動状況・出来事・ニュース・特別寄稿等を掲載 No.1（1999.7）-31（2015.6）
	北大理学部教授室N123 中谷宇吉郎研究室	1回	H16年3月	「北大理学部教授室N123 中谷宇吉郎研究室」復元展示の図録
	北海道大学キャンパス 台風18号の爪痕	1回	H16年12月	平成16年9月8日の台風18号襲来直後の北大札幌キャンパスにおける被害状況の記録
	北海道大学の学問の系譜－北大学派の学風－	1回	H17年3月	北大学派をつくった研究者たちを紹介
	北海道大学に通底する精神と教育思想の歴史	1回	H17年6月	札幌農学校時代から現在に至るまで北海道大学に通底する精神・教育思想の歴史を紹介
	エコキャンパス読本<改訂版> －植物篇 付・鳥類リスト－	1回	H21年3月	北大キャンパスで見られる植物を紹介
	北大エコキャンパス読本<改訂版>－考古学編－	1回	H23年3月	遺跡群から見た北大キャンパス周辺域の歴史
	北大エコキャンパス読本－植物園編－	1回	H22年2月	北大植物園で見られる植物を紹介
	北大エコキャンパス読本－建築遺産編－	1回	H23年3月	北大キャンパスの歴史や歴史的建物、建築に関わった人々について一端を紹介
	バラタクソノミスト養成講座・ガイドブック	12回	H21年3月～ H25年3月	バラタクソノミスト養成講座の教材 シリーズ1：昆虫（初級）採集・標本作製編 シリーズ2：きのこ（初級・中級）ハラタケ目編 シリーズ3：DNA（初級）編 シリーズ4：植物（初級）採取・標本作製編 シリーズ5：土器（初級）土器の観察・記録編 シリーズ6：土壌ダニ（初級・中級）採取・標本作製編 シリーズ7：鉄器の観察・記録・保存法（初級）編 シリーズ8：マルハナバチ属昆虫（中級）編 シリーズ9：石器（初級）編 シリーズ10：鉱床（中級）鉱床鉱物の観察・同定編 シリーズ11：昆虫（初級）目までの分類と同定編 シリーズ12：岩石（初級）編
	Guidebook: Museum Meister Course, The Hokkaido University Museum	年1回	H27年度	総合博物館ミュージアムマイスター認定コースの案内
	魚類の多様性	1回	H16年2月	第5回企画展示「魚類の多様性－5億年の進化の歴史－」の図録
	きのこの自然史	1回	H16年3月	第7回企画展示「きのこの自然史」の図録
	内田正練とその時代	1回	H17年4月	第20回企画展示「内田正練とその時代－日本にクロールがもたらされた頃－」の図録
	北大樺太研究の系譜 サハリンの過去・現在・未来	1回	H18年6月	第30回企画展示 北海道大学創基130周年記念企画展示「北大樺太研究の系譜～サハリンの過去・現在・未来～」の図録
	北海道大学の山小屋	1回	H18年5月	第33回企画展示 北海道大学創基130周年記念企画展示「北大の山小屋展」の図録
	モンゴル大恐竜 ゴビ砂漠の大型恐竜と鳥類の進化	1回	H18年7月	第35回企画展示「モンゴルの恐竜－大型恐竜と鳥類の進化－」の図録
	北大千島研究の系譜 千島列島の過去・現在・未来	1回	H19年2月	第43回企画展示 北海道大学創基130周年記念企画展示「北大千島研究の系譜～千島列島の過去・現在・未来～」の図録
	『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画 ファーブルにまなぶ	1回	H19年6月	第46回企画展示 『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」の図録
	『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画 ファーブルにまなぶ プチガイド	1回	H19年7月	第46回企画展示 『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」の子供向けガイド
	水産科学館分館化・水産学部創基100周年記念 水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史	1回	H20年3月	第52回企画展示「水産科学館分館化・水産学部創基100周年記念 水産科学館に蓄積された水産学部100年の歴史」の図録
	ライマンと北海道の地質 －北からの日本地質学の夜明け－	1回	H20年8月	第57回企画展示「ライマンと北海道の地質」の図録
	洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源 Environment and Resources of Lake Toya and Usu Volcano Area	1回	H20年6月	第58回企画展示 2008年G8洞爺湖サミット関連「洞爺湖・有珠火山地域の環境と資源」の図録
	カレル・チャペック その生涯と時代 没後70周年展 1890-1938	1回	H20年10月	第60回企画展示「カレル・チャペック 1890-1938 その生涯と時代 没後70周年展」の図録
	teetasinrit tekrukoci 先人の手あと 北大所蔵アイヌ資料－受けつぐ技－	1回	H21年2月	第63回企画展示「teetasinrit tekrukoci」の図録

部局名		広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
総合博物館		北大分類学の系譜	1回	H21年8月	第65回企画展示「生物多様な部屋」の図録
		TOYOJI HIKITA Photo Exhibition	1回	H21年10月	第66回企画展示「疋田豊治ガラス乾板写真展」の図録
		マキシモヴィッチ・長之助・宮部	1回	H22年3月	第69回企画展示「花の白露交流史－幕末の箱館山を見た男」の図録
		わが街の文化遺産 札幌軟石	1回	H23年3月	第70回企画展示「わが街の文化遺産 札幌軟石 歩いた！探した！見つけた！」の図録
		アラスカの恐竜	1回	H22年7月	第71回企画展示「アラスカの恐竜－アジアをめざした生命」の図録
		豊平川と私たち	1回	H23年3月	第73回企画展示「豊平川と私たち－その生いたちと自然」の図録
		「チョウとガ」が超わかる本	1回	H23年6月	第76回企画展示 レビドプテラ「空を舞う昆虫たち－チョウとガの世界」プチガイド
		クラーク博士と札幌の植物	1回	H24年3月	第77回企画展示「クラーク博士と札幌の植物」の図録
		川嶋昭二先生 海藻画作品集	1回	H24年7月	企画展示「藻類が人類の未来を救う」図録別冊
		ワニと恐竜の共存 巨大ワニと恐竜の世界	1回	H25年7月	企画展示「巨大ワニと恐竜の世界」解説書
大学図書館		北海道大学大学図書館年報	年1回	H27年3月	研究論文、資料紹介・目録、業務記録等を掲載
		北海道大学大学図書館資料叢書	不定期	H22年3月	資料翻刻、解説等を掲載
		北海道大学大学図書館リーフレット	不定期	H27年4月	大学図書館の概要、所蔵資料の紹介、利用に関する案内等を掲載
埋蔵文化財調査センター		北海道大学埋蔵文化財調査センターニューズレター	不定期	H27年9月	構内の遺跡、埋蔵文化財調査センターの活動内容を紹介
		北大構内の遺跡	不定期	H27年3月	北大構内（札幌キャンパス）における埋蔵文化財の調査報告
		人文・社会科学総合教育研究棟地点発掘調査報告書	1回	H17年3月	人文・社会科学総合教育研究棟地点における埋蔵文化財の調査報告
		工学部共用実験研究棟地点発掘調査報告書	1回	H23年3月	工学部共用実験研究棟地点における埋蔵文化財の調査報告
人材育成本部	上級人材育成ステーション S-cubic	上級人材育成ステーション S-cubic リーフレット	不定期	H26年3月	S-cubicの事業紹介
		S-cubic通信	不定期	H26年3月	DC・PDを対象とした進路選択のガイドブック
	I-HoP	Career Management Guide for the Doctorates	不定期	H27年9月	外国人英語コース博士のためのキャリアマネジメントガイド
	連携型博士研究人材育成推進室	科学技術人材育成のコンソーシアム構築事業 連携型博士研究人材総合育成システムの構築	不定期	H27年9月	コンソーシアム事業の紹介
創成研究機構		創成ニューズレター CRIS TIMES	不定期	H27年3月	創成研究機構の活動紹介
		北海道大学 創成研究機構	不定期	H25年9月	創成研究機構の組織紹介
		北大を特徴づける研究機関 創成研究機構 構成組織	不定期	H25年10月	創成研究機構各構成組織の紹介及び研究・活動内容の紹介
		ACADEMIC FANTASISTA 国民との科学・技術対話事業	不定期	H27年3月	北海道大学における「国民との科学・技術対話」推進に関する研究支援事業の紹介
		Strategy for Making Innovation 理の社会実装を目指して	不定期	H27年10月	北海道大学の研究者の紹介と、産学・地域協働を支えるシステムの紹介
		同位体顕微鏡システム	不定期	H26年5月	文部科学省：先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業「安定同位元素イメージング技術による産業イノベーション」事業の紹介及び利用募集
		同位体顕微鏡	不定期	H25年4月	文部科学省：先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業「安定同位元素イメージング技術による産業イノベーション」事業における坂本教授のインタビュー（リテラボプリ29号を元に作成）
		共用機器管理センター	不定期	H26年5月	創成研究機構共用機器管理センターの紹介
		オープンファシリティ	不定期	H26年9月	創成研究機構オープンファシリティの紹介
		オープンファシリティプラットフォーム	不定期	H26年8月	オープンファシリティプラットフォームの紹介
国際本部	留学生センター	北海道大学留学生センター年報	年1回	H26年3月	日本語教育部・留学生指導部・短期留学部活動報告、授業実施報告、留学生センター研修事業等を掲載
		北海道大学留学生センター紀要	年1回	H23年12月	研究論文、研究ノート、実践報告
		北海道大学国際本部留学生センターブックレット	不定期	H27年9月	留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える
	国際連携課	北海道大学概要（英語版）	年1回	H26年11月	本学の沿革、組織、職員数等、大学の概要を掲載
		Hokkaido University Magazine（英語版）	年1回	H25年12月	本学のニュースを掲載
		Campus Guide Map（北海道大学キャンパスガイドマップ 英語版、中国語版、韓国語版）	年1回	H27年10月	本学の地図、沿革、組織等、概要を掲載
		多言語チラシ/Foreign Language Brochures（ベトナム語、タイ語、ポルトガル語、ビルマ語、繁体字中国語、ドイツ語）	不定期	H26年10月（ドイツ語の場合、その他言語はH23年より作成）	1枚または両面の大学案内（大学紹介、部局数、等）
		ソウルオフィス リーフレット（日本語版、韓国語版）	不定期	H26年5月	ソウルオフィスの施設案内
		ヘルシンキオフィス リーフレット（英語版）	不定期	H24年6月	ヘルシンキオフィスの施設案内
		ルサカオフィス リーフレット（英語）	不定期	H24年8月	ルサカオフィスの施設案内

部局名		広報誌等名	発行回数	最新版発行年月	掲載内容等
国際本部	国際連携課	北海道大学概要（中国語版）	不定期	H26年10月	中国人留学生向けの大学案内（中国語版 大学概要）発行：北京オフィス
		北海道大学留学院案内ガイド（韓国語版）	不定期	H27年8月	韓国人留学生向けの入学案内（韓国語版）発行：ソウルオフィス
	国際教務課	外国人留学生のための北海道大学案内（International Student Prospectus）日本語版、英語版	年1回	H27年3月	留学を希望する海外の学生等向けに、入学手続・奨学金等の一般的な情報を掲載
		Modern Japanese Studies Program (MJSP)	年1回	H26年10月	現代日本学プログラムの概要を掲載
		現代日本学プログラム課程学生便覧	年1回	H27年4月	学修及び学生生活に必要な事項を掲載
		英語によるコースガイド（International degree program）	年1回	H26年1月	本学の英語で習得できる授業名、コース内容などを掲載
		HANDBOOK FOR INTERNATIONAL STUDENTS	年1回	H27年8月	在学中の留学生に必要な手続き及び生活情報を提供
		Hokkaido University Short-Term Exchange Program（シラバスを含む）	年1回	H26年12月	北海道大学短期留学プログラムHUSTEPの紹介及び開講科目の授業内容を掲載
		JAPANESE LANGUAGE AND CULTURE STUDIES PROGRAM (JLCSP)	年1回	H26年12月	北海道大学短期留学プログラムJLCSPの紹介及び開講科目の授業内容を掲載
		北海道大学国際交流科目	年2回	H27年9月	北海道大学国際交流科目の講義内容等を掲載
		北海道大学留学生センター 日本語授業概要	年2回	H27年9月	北海道大学留学生センター日本語授業の講義内容等を掲載
		留学しよう！北大生のための留学ハンドブック	年1回	H27年3月	北大生のための留学情報提供誌
	留学生指導教員のための留学生支援ガイド	不定期	H23年3月	指導教員のための留学生指導ハンドブック	
	国際連携研究教育局	GI-CORE概要 ※英語・日本語表記	不定期	H27年10月	国際連携研究教育局の概要、各グローバルステーション（量子、人獣、食水土GS）の紹介
	高等教育推進機構	高等教育ジャーナル－高等教育と生涯学習－	年1回	H27年3月	広く高等教育に関する論文・報告等を公開
ニュースレター		年4回	H27年9月	高等教育推進機構の活動を報告	
ラーニングサポート室リーフレット		年1回	H27年4月	ラーニング・サポート室の利用に関する案内	
アカデミック・マップ		年1回	H27年4月	進級、学部移行の参考として各学部学科等の研究内容等を掲載	
ラーニングサポートレター		年4回	H27年9月	アカデミック・サポートセンターで実施する学習サポート、セミナーの情報	
北海道大学オープンエデュケーションセンター2014年度活動報告書		年1回	H27年3月	北海道大学オープンエデュケーションセンターの活動報告書	
北海道大学オープンエデュケーションセンターリーフレット		年1回	H27年4月	学内の教職員を対象にオープンエデュケーションセンターの活動内容を紹介	
北海道大学オープンエデュケーションセンターフライヤー		年1回	H27年4月	新入学生向けに、北海道大学オープンコースウェア及びオープンエデュケーションセンターに関する案内を掲載	
2014年度北海道地区国立大学教養教育連携委託事業活動報告書		年1回	H27年3月	北海道大学オープンエデュケーションセンター（委託事業）の活動報告書	
2014年度北海道地区国立大学教養教育連携委託事業モデル授業実施報告書		年1回	H27年3月	北海道大学オープンエデュケーションセンター（委託事業）の活動報告書	
ELMS 教育情報システムリーフレット		年1回	H27年4月	教育情報システムの利用案内を掲載	
CoSTEP受講生募集案内		年1回	H27年3月	CoSTEPの学生募集案内冊子（要項）	
サステイナブルキャンパス推進本部	Sustainable Initiative 持続可能な社会への大志	不定期	H25年3月	サステイナブルキャンパス推進本部発足の経緯、組織概要、業務内容、本学の目指すサステイナブルキャンパスの概念について掲載	
	2015 サステイナブルキャンパスをめざして 環境報告書 Sustainability Report	年1回	H27年9月	本学の環境に配慮した活動等をまとめ、2014年度の環境に関する教育研究活動やエネルギー・水等の使用量の状況を掲載	
	2015 Toward Sustainable Campus Connecting and Working toward the Future Sustainability Report（英語版）	年1回	H27年10月	環境報告書の日本語版を22頁にまとめた海外向けの報告書	
	News Letter Vol.2	年1回以上	H27年6月	最近のサステイナブルキャンパス推進本部の活動の紹介	
	News Letter Vol.2（英語版）	年1回以上	H27年6月	最近のサステイナブルキャンパス推進本部の活動の紹介	
産学・地域協働推進機構	産学官連携の手引き	年1回	H27年8月	産学・地域協働推進機構の業務内容説明及び産学官連携のための案内	
	産学・地域協働推進機構パンフレット	年1回	H27年4月	産学・地域協働推進機構の概要紹介	
	北海道大学 研究シーズ集Vol.2	年1回	H27年3月	北海道大学の研究シーズを分野別に紹介	
	フード&メディカルイノベーション国際拠点パンフレット	不定期	H27年5月	FMI国際拠点の概要説明	
	「食と健康の達人」拠点パンフレット	不定期	H27年5月	センター・オブ・イノベーション（COI）の活動紹介	
	岩見沢市×北海道大学のフリーマガジン「live（ライブ）」	年6回	H27年10月	岩見沢での出産・育児を考える市民参加型のフリーマガジン	

(総務企画部広報課)

編集メモ

●広報誌「リテラポプリ」56号を発行しました。

今回の特集ページでは“強み”をテーマに、「北大を特徴づける研究／北極域研究センター」「フィールド研究／苫小牧研究林」「北大祭」を取り上げ、本学の強みの一端について、3つの切り口から紹介しています。

また、キャンパス風景では赤や黄に色づいた秋、白く雪化粧した冬の写真を掲載していますので、ぜひご覧ください。

◆ <http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>





2011.11.12 室蘭本線 小幌～静狩（豊浦町）

北の鉄道風景 32 去り行くブルートレイン

ブルートレインとは、青色に塗装された客車を使用した寝台特急列車の通称である。1958年10月1日から20系客車で運行が開始された夜行特急「あさかぜ」（東京～博多）を嚆矢として、最盛期には数多くのブルートレインが運行された。しかし、新幹線や飛行機などとの競合によって乗客が減少し、廃止が進められた結果、「北斗星」（上野～札幌）が最後のブルートレインとなった。その「北斗星」も、

車両の老朽化や北海道新幹線開業を理由に、2015年8月22日の札幌発上野行きを最後に運行終了、ブルートレインの歴史に終止符が打たれた。写真は晩秋の礼文華峠を駆け下りる札幌行きの北斗星である。今秋からは、落葉松の黄葉に映えるブルートレインを見ることは叶わず、一抹の寂しさを感じる。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ⑪ No.740 平成27年11月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html